

平成 29 年度

教 育 研 究 集 録



平成 30 年 3 月刊行

公益財団法人 日本教育公務員弘済会岡山支部

平成29年度「教育研究集録」刊行に当たって



新学期を迎え、教職員の皆様方には、お忙しい毎日をお過ごしのことと存じます。

皆様方には、平素から公益財団法人日本教育公務員弘済会(日教弘)岡山支部の諸事業に御理解と御協力をいただいていますことに、深く感謝申し上げます。

日教弘岡山支部は、有利で教職員の皆様方しか加入できない教弘保険を取り扱っている提携会社のジブラルタ生命保険(株)から日教弘本部へ入る契約者配当金を主な事業資金として、教育振興事業(公益目的事業)や福祉事業などに取り組んでいる公益財団法人であります。私どもの教育振興事業は、青少年の健全育成に資することを目的に実施しており、「最終受益者は子どもたちである」ことが事業実施の評価基準となっています。教職員のすばらしい研究実践をまとめた教育研究論文や著書を表彰させていただくとともに、それらをまとめた研究集録を県内の教育関係者に配付させていただくこの事業は、岡山県の教育の充実に役だっしてほしいという考えのもとに実施させていただいている教育振興事業であります。

本年度は、学校部門と個人部門、そして著書部門の計3部門で、県内の幼稚園、小学校、中学校、高等学校、特別支援学校、中等教育学校及び教育行政機関に勤務する教育関係者などを対象にして、教育研究論文等の募集を行いました。その結果、学校部門で5編、個人部門で22編、著書部門で2編の合計29編の応募をいただきました。

本年度の教育研究論文の内容の傾向としては、次の改訂学習指導要領の柱である主体的・対話的で深い学びの実践や、子どもが充実感を感じる授業づくり、地域と連携した教育の工夫などの実践研究が多かったように思いました。

今回、学校部門で最優秀を受賞された赤磐市立高陽中学校の校長平田俊治先生の論文は、「幸せを感じる学校教育を目指して―地域との協働や社会貢献活動を通して、自尊感情を高め、幸せを感じる生徒を育成する―」と題した論文で、学校経営の柱の一つに学校支援地域本部事業と社会貢献活動を掲げて、様々な生徒が大勢参加して活動に取り組むことにより、生徒の居場所ができ、それぞれの生徒の自尊感情や社会貢献の指数も向上してきたということ、アンケート調査などから検証されたものであります。また、個人部門で最優秀を受賞された岡山県立岡山朝日高等学校の教諭平田丞二先生の論文は、「作文を用いた対話による深い学びの試み―高等学校3年生 教科現代文での評論文教材を用いた研究実践とその考察―」と題した論文で、昨今中央教育審議会などでもいわれている「主体的・対話的で深い学び」の観点を取り入れた授業実践を、教科現代文の単元の中で行い、生徒同士が主体的に自分の考えや思いを伝え合い、その中で互いに教材の理解はもとより多角的なものを見方を学び、認識を深めていくことを検証していったものであります。

どちらの研究論文もたいへん素晴らしいもので、研究の分野は異なりますが、現在の各学校園が抱えている喫緊の課題の解決に向けた一助になるものではないかと思っております。こうした優良以上の表彰を受けられたすばらしい研究論文や著書につきましては、冊子にまとめ、各学校園に配付させていただきます。これらのすばらしい研究実践などが、県下の先生方の教育活動の中で生かされ、新たな課題の研究にも取り組んでいただき、各学校園ですばらしい成果を挙げられますよう願っております。

論文審査は、中国学園大学副学長 住野好久先生、元岡山県高等学校長協会長 山本近信先生をはじめ、多くの先生方にお世話になりながら、厳正に行っていただきました。お忙しい中、審査をいただきました先生方に、厚く御礼を申し上げます。

この冊子の終末には、本年度の日教弘教育賞の全国最優秀論文も掲載していますので、教育研究実践やまとめ方の参考等にしていただければ幸いです。

平成30年3月

公益財団法人 日本教育公務員弘済会岡山支部
支部長 門野八洲雄

巻 頭 言



審査委員長（中国学園大学・中国短期大学 副学長）住 野 好 久

新しい学習指導要領への対応が求められる前に、今年度は「働き方改革」が進められています。「教員の多忙化」をめぐる議論は20年ほど前からありましたが、ようやくこの問題の解決に向けて国が動き出しました。労働の量（働いた時間）ではなく、労働の質（実践の成果）を重視する労働観に基づいて、優先順位を決めて、みんなで協力して仕事を早く終わるチーム力とマネジメント力を高めることが求められます。教員も仕事の後に、音楽を聴いたり、旅をしたり、運動したり、本を読んだり、友だちとおしゃべりしたりと、好きなこと・やりたいことに取り組む時間が確保されることを期待します。魅力的な大人となることが、結果として教員としての資質向上につながるからです。

さて、今年度の教育研究論文・著書助成事業には、学校部門5編、個人部門22編、著書部門2編の応募がありました。

学校部門では、小学校から1編、中学校から2編、高等学校から2編応募されましたが、5編しか応募がなかったというのはとても残念なことです。日教弘岡山支部では、学校部門の応募を増やそうと、助成金額を増額するなどの方策をとってこられました。なかなか増えません（ちなみに、昨年度は7編でした）。その背景には学校の多忙化があるのでしょうか……。5編のうち3編は「地域」との連携・協働等に取り組んだものでした。地域社会のネットワークの中で子どもを教育し、子どもを地域の担い手に育てていくことが求められているなか、教育研究論文の審査の観点に上げられている「現代の教育課題を適切に取り上げている」ものと言えます。

最優秀賞に選ばれた赤磐市立高陽中学校の「幸せを感じる学校教育をめざして一地域との協働や社会貢献活動を通して、自尊感情を高め、幸せを感じる生徒を育成する一」は、生徒指導上の課題の大きい中学校での積極的で開発的な生徒指導に、地域社会とつながりながら取り組んだ成果を考察したものでした。本論文は、①困難な状況に対して諦めることなく、しっかりとした方針を立てて、計画的・継続的に（3年間）実践し、他の学校でも活用できる実践となっていること、②子どもたちの変容が継続的に把握され、実践の成果が客観的に示されていること、③目的・目標の設定－実践仮説の設定－実践－評価（成果の分析）－考察と、論文の展開が筋道立っていることなどが評価されました。

個人部門には、幼稚園から1編、小学校から9編、中学校から4編、高等学校から7編、特別支援学校から1編の応募がありました。その中から第二次審査に残ったのは、小学校から2編、高等学校から2編で、内容は「学校経営」「生徒指導」「ふるさと学習」「国語」と多岐にわたりました。

最優秀賞に選ばれた平田丞二先生（岡山朝日高等学校）「作文を用いた対話による深い学びの試み—高等学校3年生 教科現代文での評論文教材を用いた研究実践とその考察—」は、いわゆる進学校において「主体的・対話的で深い学び」をつくり出そうと取り組んだものであり、「現代の教育課題を適切に取り上げている」論文です。生徒の思考を表現させ、対話することで「生徒の頭をアクティブに働」かすことに成功した実践でした。

最後に、これから本事業に応募されようとする皆さんに検討していただきたいことを1つだけ指摘しておきたいと思います。それは、自分たちがしたことを羅列するのではなく、読者にその成果が伝わるように論述することです。子どもたちや教職員の変容などをしっかりと見せるようにすることです。そのためには、「どう成果を把握するか」という評価計画を持って実践に取り組むことです。

では、今年度の皆さまの優れた実践を、ぜひ教育研究論文にまとめ、ご応募下さい。特に、校内研究で取り組まれた成果を学校部門に。働き方改革でできた時間を使って、論文を執筆することを楽しみながら。

祝 辞



岡山県教育委員会 教育長 竹 井 千 庫

公益財団法人日本教育公務員弘済会岡山支部の平成29年度「教育研究集録」が上梓されるに当たり、並々ならぬ御研鑽を重ねられ、このたび教育研究論文及び著書の部で受賞されました方々に、心からお祝いを申し上げます。

さて、グローバル化や情報通信技術の進展に伴い、社会環境が大きく変化していく中、教育においては、こうした変化に的確に対応し、生涯にわたって、心豊かにたくましく生きていく力と、活力ある社会を築き支えていく意欲や実践力を備えた人材の育成がますます重要となっております。

昨年3月に告示された新学習指導要領では、子どもたちが学習内容を人生や社会の在り方と結びつけて深く理解し、これからの時代に求められる資質・能力を身に付け、生涯にわたって、能動的に学び続けることができるよう、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた取組を活性化していくことが求められております。

こうした状況の中、本県では、昨年4月からスタートした「新晴れの国おかやま生き生きプラン」において、引き続き「教育県岡山の復活」を重点戦略に位置付け、これまでの学力向上、徳育推進の取組に加えて、グローバル人材育成を教育の重点プログラムとして掲げ、様々な分野で主体的に活躍でき、地方創生を支える人材の育成に取り組んでいるところでありますが、このようなときに、本事業の「学校の実態を踏まえ、明日の教育を考える」という研究主題の下、教職員が学校現場で創造的に教育実践に取り組み、それを実践研究として取りまとめ、お互いに研鑽を重ねることは非常に意義深いことでもあります。

このたび、受賞されました教育研究論文や著書は、地域連携や学校経営、授業改善等、多岐にわたっておりますが、いずれもそれぞれの学校や地域の実態を踏まえ、課題を検証し、重点化・具体化した改善策を示す研究であり、多くの教職員の資質・能力の向上のため、広く活用していただけるものと考えております。

そして、受賞された皆様方には、今回の受賞を更なる契機として、引き続き実践や研究を深められ、それぞれの学校や地域の先導役として御活躍いただけることを期待しております。

終わりにになりましたが、教育研究助成事業の実施に当たり、御尽力いただきました関係者の皆様方に心から感謝申し上げますとともに、公益財団法人日本教育公務員弘済会岡山支部の今後ますますの御発展を祈念いたしまして、祝辞とさせていただきます。

平成29年度 教育研究論文・著書

審査委員名簿

第一次審査委員

(敬称略)

審査委員長	元高等学校長	山本近信
審査副委員長	くらしき作陽大学教授	松原泰通
審査委員	岡山大学特任教授	荒尾真一
審査委員	ノートルダム清心女子大学非常勤講師	小川 潔
審査委員	元高等学校長	永井 裕
審査委員	元中学校長	福田 宇一

第二次審査委員

(敬称略)

審査委員長	中国学園大学・中国短期大学副学長	住野好久
審査副委員長	岡山県教育庁義務教育課長	福原洋子
審査委員	岡山市立幡多小学校長	中尾雅文
審査委員	岡山市立藤田中学校長	梅原信芳
審査委員	岡山県立岡山朝日高等学校長	田中広矛
審査委員	元高等学校長（第一次審査会審査委員長）	山本近信

目 次

(所属は平成30年3月31日現在)

論文 (学校部門)

〈最 優 秀 日教弘教育賞推薦〉

1. 幸せを感じる学校教育をめざして
—地域との協働や社会貢献活動を通して、自尊感情を高め、幸せを感じる生徒を育成する—
赤磐市立高陽中学校 校長 平 田 俊 治 1
- 〈優 秀〉
2. 地域と共に生徒を育てる中学校教育の取組
備前市立伊里中学校 校長 金 光 一 雄 5
3. 地域資源を生かした「まちなかのふるさと教育」
—地域をはじめ広く持続可能な社会の形成に貢献する人材の育成を目指して—
岡山市立岡山後楽館高等学校 校長 上 林 栄 一 9
4. 生徒の主體的な行動を促し、社会人としての基礎力の養成を目指すプログラム開発
—地域と連携し、地域をフィールドとした総合的な学習の時間等の取組—
岡山県立瀬戸高等学校 校長 乙 部 憲 彦 13
- 〈優 良〉
5. 保・小・中の連携について
—教員の一斉研修を通して—
赤磐市立城南小学校 校長 中 西 伸 司 17

論文 (個人部門)

〈最 優 秀 日教弘教育賞推薦〉

1. 作文を用いた対話による深い学びの試み
—高等学校3年生 教科現代文での評論文教材を用いた研究実践とその考察—
岡山県立岡山朝日高等学校 教諭 平 田 丞 二 21
- 〈優 秀 日教弘教育賞推薦〉
2. 児童の成長を促す学校づくり
—開発的生徒指導における組織的取り組みに関する一考察—
津山市立高野小学校 教諭 池 上 直 紀 25
- 〈優 秀〉
3. 「向陽プライド」を合い言葉に、自己肯定感の向上を目指した学校経営
—体験学習を中心とした「向陽探険隊」や、ボランティア活動に取り組んで—
津山市立向陽小学校 校長 下 山 朋 子 29
4. 「ふるさと回帰」を実現するプログラムの創造はいかにあるべきか
—自校の歴史を五感で学び、それを発信する実践を通して—
岡山県立邑久高等学校 教諭 田 辺 大 蔵 33
- 〈優 良〉
5. 協同的な遊びを通して心豊かに生活する幼児の育成
—五感を使って感性を育む遊びを通して—
津山市立高田幼稚園 主査 影 山 世 都 子 37
6. 児童が意欲的に学ぶ図画工作科の指導法を探る
—主として絵で表す活動を中心に—
赤磐市立仁美小学校 校長 石 原 玲 子 41

7. 専門的な学びを探究するフィールドワークの取り組み			
—生徒主体の人文社会学類・学類研修を通して—			
岡山県立岡山城東高等学校	教諭	大西浩史	45
8. 次期学習指導要領で新設される必履修科目「地理総合」における一考察			
—学園祭でのクラス展示を通じた取り組み—			
岡山県立岡山朝日高等学校	教諭	竹内直志	49
9. 子どもの豊かな学びを支える			
—専門性向上のための校内研修体制の構築—			
岡山県立岡山支援学校	校長	篠田千枝	53

著書部門

〈優良〉

1. 北川先生の作文教室			
	退職者	北川久美子	57

平成29年度「日教弘教育賞」

〈最優秀賞・学校部門〉

1. 子どもの学びの姿から考える探究型の授業づくり			
—全職員で取り組む学校研究体制の構築を通して—			
山形県長井市立長井南中学校	校長	土屋正人	61
2. 児童の「才能の最大化」を引き出す学校経営の可能性			
—教職員の意識改革を目指して—			
富山県南砺市立井口小学校	校長	山下透	65

〈優秀賞・学校部門 岡山支部推薦論文〉

1. 「書く」ことの徹底による学力向上をめざした組織的プロジェクト			
—小規模中学校の挑戦—			
美作市立勝田中学校	校長	西村睦美	69

奨励賞の所属・氏名・研究題目の一覧表（参考）

個人部門

所 属	氏 名	研 究 題 目
真庭市立 檜呂小学校	校長 山崎 仁彰	職員の創意工夫と授業力を高める学校経営
真庭市立 中津井小学校	指導教諭 山野 定寿	批判的思考力を培う割合の授業
倉敷市立 藪小学校	教諭 土井 理子	教材を超える読み手を育てる —説明文の読みの指導を通して—
赤磐市立 仁美小学校	教頭 松本 哲也	運動の好きな児童を育て、体力の向上を図る
岡山市立 浦安小学校	教頭 池上 純治	思考力・判断力・表現力を高める算数科の授業作りを目指して
備前市立 日生東小学校	教諭 延原 一泰	「授業のユニバーサルデザイン化で『わかる、できる、がんばれる』 子へ!」 —特別支援教育の観点を取り入れた授業づくりの工夫を通して—
岡山市立 高島中学校	主幹教諭 小山 真二	総合的な学習と技術・家庭科（技術）を連動させた教育実践に ついて —沖縄修学旅行の調べ学習を通して—
総社市立 総社東中学校	教諭 平松 良夫	空間認識を重視した天体の学習とその評価Ⅱ —自作ソフト「月の見え方」へ月の写真を組み込んだ場合—
岡山市立 旭東中学校	教諭 竹島 潤	中学校第1学年平和学習プログラムにおける工夫 —パネルディスカッション, 探究活動, 地域教材(岡山空襲)を通して—
倉敷市立 北中学校	教諭 神原 優一	「わかった!できた!」を実感する授業の工夫
倉敷市立 工業高等学校	講師 前田 誠之	災害対応内部調査ロボットを事例とした部活動によるロボットの 遠隔操作, シミュレーションに関する研究
倉敷市立 真備陵南高等学校	教諭 三宅 聡	「主体的・対話的で深い学び」の視点からの数学の授業実践と その考察
岡山県立 倉敷中央高等学校	教諭 前田 昌義	図解と実物教材で学ぶ「現代社会」経済分野学習の試み

著書部門

所 属	氏 名	研 究 題 目
関西高等学校	講師 曾根喜美男	さむらい —日本が一番輝いていた日—

論文（学校部門）



幸せを感じる学校教育をめざして

—地域との協働や社会貢献活動を通して、
自尊感情を高め、幸せを感じる生徒を育成する—

赤磐市立高陽中学校 校長 平田 俊治

I はじめに

「教育の目的を煎じ詰めれば、子どもたちが幸せな人生を送るために必要な知恵や知識や体験をあたえることになる。」¹⁾ 私が理想とする学校教育は、学校支援地域本部を導入し、さらに社会貢献活動を取り入れ、自尊感情を高め、生徒の社会参画意識を向上させることにある。そうすれば、人の役に立つことを幸せと感じる生徒が育ち、地域社会を変えることができる。そのように考え、備前市立備前中学校を皮切りに、3校で10年間地域本部事業に携わってきた。

昨年、送り出した生徒たちは、入学時は生徒指導面で非常に厳しい状態であったが、3年間の取組の中で学校全体の意識が変容し、素晴らしい卒業式で送り出すことができた。ここでは、その取組と意識の変容について検証し、多くの閉塞感を感じている若者や学校の荒れに苦しむ先生たちの一助としたい。

II 研究の概要

小学校で学級崩壊を繰り返し、中学校入学後すぐに他校と暴力事件を起こすなど、昨年の卒業生は生徒指導面で苦慮した。経済的に困窮した家庭や発達に課題のある生徒をもつ家庭は、教育への期待が薄いように感じられ、学力は低迷し、部活動で好成績を残せる可能性も限られているように思えた。

このような生徒が、幸せな人生を送るためには、どのような取組が必要か職員と考えた。その結果、地域本部事業を通して地域の人たちと良質な関係を築き、彼らの自尊感情を育成することが必要だという結論に達した。

しかし、今までの経験で、地域本部導入で自尊感情はすぐに上昇し「学校の荒れ」は解消するものの、次の策を講じないと頭打ちになり、同じことの繰り返しになってしまうという課題がある。「日本の若者の自尊感情が外国に比べ低いのは、「人の役に立つ」という因子が他国に比べ強いいため、社会活動の経験が少ない若者の自尊感情が低く表れる²⁾」という説があることを知った。発達上の不安定さや学習内容の高度化で

自信をもちにくい中学生に、積極的に社会貢献活動と呼びかけることでこの課題を解決できるのではと考えた。

そこで、次のように仮説を立て、取組を実践した。

仮説 地域による学校支援活動の後、自発的に社会に働きかける活動を導入すると、自尊感情の「高み」が持続し、社会貢献への意欲が高揚する。

III 研究の内容

1 構想

- (1) 地域本部による学校支援活動を導入し地域の人々と交流を深める。
- (2) 中学校はもちろん小学校や地域に貢献する自発的活動を導入する。
- (3) 3年間の活動後、学校支援活動参加回数で高参加群、中参加群、低参加群の3つのグループに分け、それぞれの「学校評価アンケート」や「i-check」の設問に対する肯定率の変化を比較する。
- (4) 社会貢献活動（下記3の(1)~(4)）に積極的に参加した生徒を抜き出し、学校評価アンケートやi-checkの設問に対する肯定率の変化を調べ比較する。

2 学校支援地域本部事業

- (1) 学習支援活動は、放課後1時間程度(原則月曜日)、土曜日午前2時間程度、夏休み2時間程度の3パターンで、生徒一人に指導者一人の丁寧な対応を目指した。

放課後学習支援	H26	H27	H28
実施回数	14	12	*11
生徒参加数(一回平均)	11.0	21.8	24.4
ボランティア・保護者数(一回平均)	8.6	7.3	8.2
教師数(一回平均)	5.9	10.4	7.7

土曜学習支援	H26	H27	H28
実施回数	8	7	7
生徒参加数(一回平均)	10.0	24.9	26.4
ボランティア・保護者数(一回平均)	7.0	5.7	11.0
教師数(一回平均)	3.8	6.1	一部記録なし

夏休み学習支援	H 2 6	H 2 7	H 2 8
実施回数	4	4	4
生徒参加数（一回平均）	14.3	14.5	41.8
ボランティア・保護者数（一回平均）	10.3	6.8	7.3
教師数（一回平均）	4.5	6.3	8.5

(2) 環境整美は、地域住民と生徒が協働して樹木の剪定や草取りを行うふれあい整美活動と土曜日の早朝に学校に集まり、1時間程度丁寧に便所を磨く「心を磨くトイレ掃除」を実施した。

環境整美	H 2 6	H 2 7	H 2 8
実施回数	*6	6	*5
生徒参加数（一回平均）	**45.8	**76	**78.8
ボランティア・保護者数（一回平均）	9.2	24.8	15.2
教師数（一回平均）	9.2	14.2	12.2
*中止一回 **全員参加のPTA整美作業参加者を除く			

(3) 読み聞かせ（年6回程度）は、各クラスにボランティアが向いて名作や郷土民話の朗読を、約10分間行った。

読み聞かせ	H 2 6	H 2 7	H 2 8
実施回数	5	6	6
ボランティア数（一回平均）	13	13	13

3 生徒の社会貢献活動

(1) 携帯・スマホ校内持込追放委員会…多発する携帯・スマホのトラブル防止のため、委員を募り、自分たちの力で校内持込の根絶と使い方ルール作りを行った。その成果をもって小学校へ行き、スマホ依存症を防止するための啓発活動を行った。中学生の活動により、地域の携帯・スマホの所持率は他地区に比べ低い。



(2) 小学校で学習支援活動…夏休みなどの長期休業中に、校区内の小学校に学習支援ボランティアとして参加した。成績が振るわない生徒にも学習ボランティアを呼びかけたところ、たくさんの生徒が応じた。小学生に教えるため、勉強したり、学習の大切

さを児童に説いたりするなど、小学校の先生が驚くような成長が見られた。

生徒の感想

- ・わかりやすく教えられたのがうれしかった
- ・教えながら、自分の復習になった
- ・満足できるボランティア活動になった



(3) 小学校で読み聞かせ…中学校の読み聞かせボランティアの指導を受けた中学生が、小学校に出向き読み聞かせを行った。



(4) 高齢者学級でハンドケア…日本赤十字社のハンドケア講習を受講した保健委員が、公民館活動に参加し、高齢者にハンドマッサージを実施した。



(5) その他

- (ア) 生徒会が主催する学校周辺の道路清掃
- (イ) 小学校陸上競技大会に向け、走り方やバトンの渡し方といった陸上競技部が行う陸上教室

- (ウ) 小学校のあいさつ運動に中学生の生活委員が参加
- (エ) 地域活動支援として、生徒が公民館祭りや行事に参加した。吹奏楽部が演奏したり、実行委員として運営に参加したりした。

4 学校評価アンケート

全校生徒を対象に毎年6月と12月に実施した。「学校を誇りに思うか」といった40問からなるアンケートを校長が作成し、生徒意識の経年変化を確かめた。

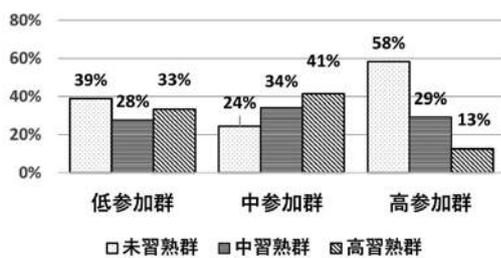
5 i-check (アイチェック)

東京書籍が作成した学校満足度調査で、学校評価アンケートとはほぼ同じ時期に年2回実施した。質問は94問と多岐にわたる。全国で実施され標準化されているので、全国と比較し生徒の意識変容を確かめた。

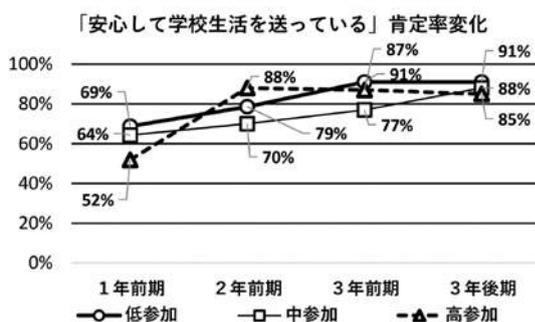
IV 研究の結果

- 1 学校支援活動への参加群間で(低参加群15名・中参加群40名・高参加群25名)学習成績の差異を調べるとグラフのようになった。高参加群の生徒の学力が低く、他は差異が見られなかった。なお、学力については、国が実施した学力学習状況調査の基本問題の正答数で高習熟、中習熟、未習熟の3群に分類した。分類では人数がほぼ同じになるよう配慮した。

学校支援参加回数と成績の関係
(全体に占める割合%)

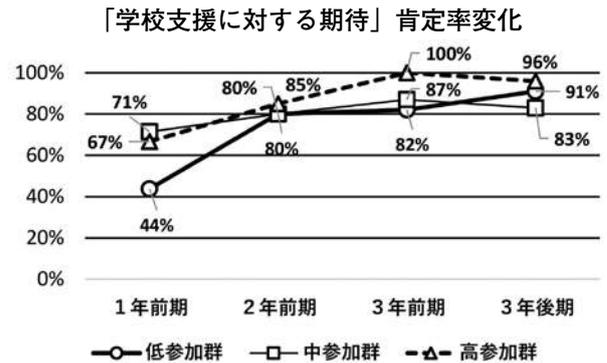


- 2 参加群間で就学援助を受けている生徒割合を調べると、(高参加25%・中参加21%・低参加29%)となり、参加回数と経済状況の差異は認められなかった。
- 3 「安心して学校生活を送っている」の肯定率変化は次のようになった。ここで着目したいのは、1年



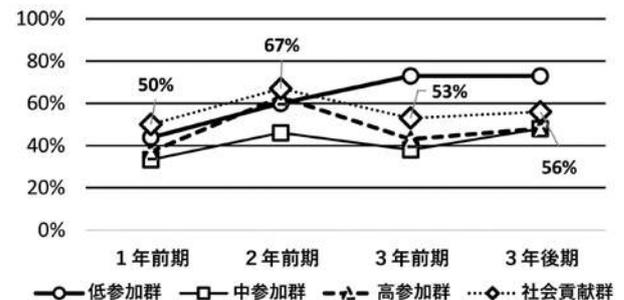
生から2年生にかけて、高参加群の肯定率が他群に比べ大きく上昇していることである。

- 4 「学校支援に対する期待」のグラフは、3とは対照的に低参加群の生徒が1・2年生間で大きく上昇している。高参加群では入学直後に安心感が大きく伸び、低参加群では「学校支援に対する期待」が大きく伸び、対照的である。「ボランティアや保護者に感謝」のグラフでも「学校支援に対する期待」グラフと同様の傾向を示している。

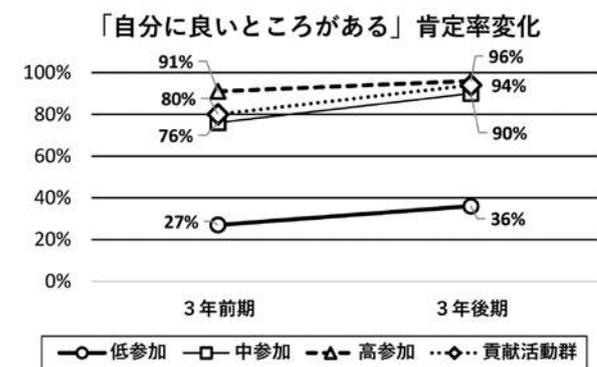


- 5 3・4のグラフは3年生の後期には3群とも9割前後と高い肯定率を示す。
- 6 「クラスで長所を認めてもらう」グラフに、小学校の学習支援活動や読み聞かせなどに参加した生徒の肯定率変化を付け加えた。

「クラスで長所を認めてもらう」肯定率変化

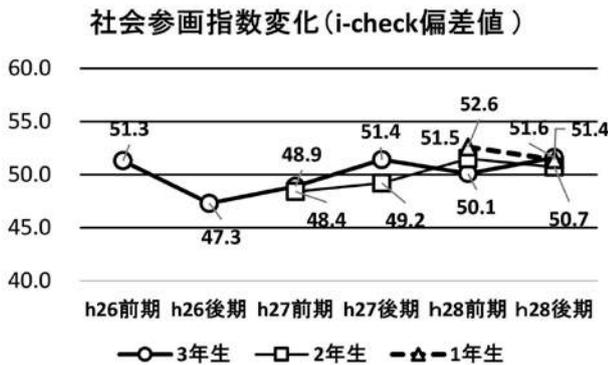


- 7 同様に、「自分に良いところがある」アンケートに社会貢献活動に参加した生徒の肯定率変化を付け加えた。この項目は、自尊感情の指数として昨年新



たにアンケートに付け加えたものである。

8 「i-check」の社会参画指数を3年間にわたり調べグラフに示した。質問内容は「小さい子やお年寄りが困っているとき、迷わず手助けができるか」や「ニュースで戦争や災害、貧しさで苦しむ人を見ると、心が痛むか」、「お祭りやボランティアなど、地域の行事に参加しているか」などである。縦軸は全国と比較した偏差値で表しており、全国平均は50である。



V 考察と課題

- 1 結果3からわかるように、学校支援開始後すぐに、高参加群の「学校への安心感」が上昇した。高参加群は成績が低迷し、教師から学習支援に参加するよう助言を受けている生徒が多い。参加することで、勉強に対する不安だけでなく、将来に対する不安などが解消し、安心して学校生活を送ることができるようになったことがうかがわれる。
- 2 結果4では、低参加群の「学校支援への期待」が上昇した。低参加群はそれまで何か支援してもらおうという経験が少なかったのかもしれない。しかし、友人が支援してもらおう様子を見て、期待している様子がうかがわれる。結果3・4が3年後には高い肯定率に集約することから、生徒が地域の支援を肯定的に捉え安心して生活できるようになったことがわかる。
- 3 社会貢献活動を通して「人の役に立つ」経験をした生徒は、「自分に良いところがある」といった自尊心が向上したことが読み取れる。「クラスで長所を認めてもらう」の肯定率が高いとはいえないが、貢献群の約半数が高参加群、残りが中参加群であり、いずれの群もこの項目の肯定率が低いことから、効果が表れるにはもう少し時間がかかりそうである。
- 4 社会参画意識は次第に向上し、全国平均を大きく上回るようになった。この項目は、学校支援の取組

から社会の善意を感じ取り、さらに「人の役に立つ」活動を通して、自尊感情を高揚させた生徒が全体に与えた影響と考えることができる。

また、1年生の指数がその年の3年生の指数に追隨していることも興味深い。つまり、上級生の意識が高まると、他学年の社会参画意識もその高みを受け継ぐように見える。貢献活動により社会参画意識が好転し始めると、学校全体に変化が拡散すると考えられ、その効果の大きさに驚く。

- 5 課題としては、この研究がまだ緒についたばかりでデータの蓄積が充分でない点である。一過性のものとならないようより良い取組を求め、継続的に研究を進めたい。

VI おわりに

勉強ができる、部活動で活躍する、生徒会で活躍する、そんな人はなかなかいない。まして全部ができる人など皆無に近い。社会経験の乏しい学校の中だけでは、自尊感情を高め、自己肯定感を高めることが難しい現実があった。

そこにボランティア活動という新しい価値観が加わると、多くの生徒が満足感を得た。勉強、部活、生徒会、そしてボランティア活動、一人ひとりが得意な分野を伸ばしてお互いを認める雰囲気があれば、「今のままの自分でいいのだ」と考える生徒が増え、居場所があると感じ、安心して生活することができるようになった。

「人間の究極の幸せは4つある。人に愛されること、人に褒められること、人の役に立つこと、人から必要とされること。」³⁾という。

従来の学校支援活動に加え、自主的な社会貢献活動という2段階目のロケットに点火できたとき、学校が大きく変化した。感動的な卒業式ができたのは、多くの生徒が厳しい背景を克服し幸せを感じたからだろう。

その余波を借り、今年度の生徒たち有志が13年前に途切れていた高陽地域の盆踊りを復活させた。高陽中学校の進化はまだまだ続いている。

引用文献

- 1) 「めだか、太平洋を往け」重松清 平成25年
- 2) 「自尊感情とその関連要因の比較：日本の青年は自尊心が低いのか」加藤弘通 平成26年内閣府資料
- 3) 「虹色のチョーク」小松成美 平成29年



地域と共に生徒を育てる中学校教育の取組

備前市立伊里中学校 校長 金光 一雄

I はじめに

「伊里」とは「これさと」、我が故郷の意である。その名の通り、伊里地区の方々は地域を愛し、地域を誇りに思い、まとまりがあって、1認定こども園・1小学校・1中学校からなる「伊里学園」の子供たちをとっても大切にしてくださる。

平成23年4月には、伊里学園支援地域協議会が立ち上がり、学校園に直接的、組織的な支援が行われるようになった。更に平成27年4月、それまでの4年間の活動が総括され、新たな会則の下、組織の整理と充実が図られて、より一層充実した学校園への支援が行われるようになった。

一方で、平成27年4月、旧閑谷学校に繋がる五つの史跡・資料（旧閑谷学校、釈菜、延原家文書、井田跡、熊澤蕃山宅跡）が、水戸市の弘道館、足利市の足利学校跡、日田市の咸宜園跡とともに日本遺産第一号に認定された。五つの遺産はすべて伊里地区にあり、地域活性化の切り札として、区長会を始めとする関係団体が活用を進めている。

県内でも、人口の減少と高齢化の進展という厳しい課題に直面する地区は多い。伊里地区の素晴らしい教育力と社会的・文化的資産をどう生かし、どう生徒の成長に繋げ、どう地域の活性化を図っていくか、これまでの取組を振り返りながら考察したい。

II 目的

地域の子供たちを、地域の方々と共に、地域で育てていく中学校教育の取組について研究する。

III 取組の内容

1 地域の力をお借りする

伊里学園支援地域協議会は、3校園を学習支援・見守り・環境整備の三つのボランティアで支援してくださっている。各校園に配置されている地域支援コーディネーターに、地域の方々がFAXや電話で連絡してボランティア登録し、各教員は作成された一覧表を見てコーディネーターを通じて依頼する仕組みである。

本校でも、授業の補助やゲストティーチャー、朝の読み聞かせ等、沢山の御支援をいただいているが、「地域のことを教えたい」「地域の中学生に関わりたい」と、次のような指導や支援もいただいている。

(1) 1年生絵手紙教室

伊里公民館の絵手紙教室の方々が、講師の先生と一緒に美術の時間に御指導くださっている。和紙の葉書や団扇に生徒は自由に描く。絵手紙は初めてという生徒ばかりだが、毎年、味のある作品が出来上がり、学校の玄関に展示して皆様に見ていただいている。

(2) 2年生備前焼教室

地域の備前焼作家の方が美術の時間に御指導くださっている。御自身の登り窯で焼成までしてくださるので、仕上がりは見事である。毎年10月に行われる岡山県こども備前焼作品展に出品しており、2年連続で最高賞となる県知事賞を受賞している。

(3) 3年生放課後学習教室「寺子屋」

学力向上のため、学習会を実施する学校は多いが、全校生徒127名の本校では部活動の指導もあり、平日の実施は難しい。コーディネーターに相談したところ地域の方々が毎週火曜日・金曜日の16:20～17:20に学習支援で来校してくださることになった。

学校で購入させた中学校3年間の復習用問題集を中心に、備前市が配付している進研ゼミ、生徒個人の問題集等に各自で取り組み、分からないところを、毎回3～5人来てくださる地域の「先生方」に質問する。その日の授業で不明だったことを聞く生徒もいる。

今年で5年目になるが、年々、希望者が増え、今年は8割の生徒が申し込んだ。学力向上はもちろん、学習意欲を高め、学習習慣を整える場ともなっている。

(4) 芝生ボランティア

硬式野球場がとれる本校の広いグラウンドは雑草がはびこる。地域の方々が市役所と相談し、周囲に芝生を張る活動を始めてくださった。昨年度、見事に完成し、来校者は青々とした芝生に驚く。昼休みに生徒が出てきて寝そべったり、テニスやサッカーをしたりして遊ぶ。小学生が遠足に来て弁当を食べたりもする。

大変な芝生の管理も、地域で購入してくださった芝刈り機と個人の草刈り機を使い、5～8月は2週間に1回のペースで手入れをしてくださっている。市教委と相談して消火栓と消火ホースを使えるようにし、7・8月は1週間ごとに水やりもしてくださっている。

2 地域と共に育てる

伊里学園支援地域協議会の設立以前から学校に支援をくださっていた6名の方(1名は故人)が、学校と一緒に生徒の成長に繋がる取組をしたいと、「ふれあい学級」を開設してくださった。本校の1学級として教室を用意し、毎週水曜日の午前中を学校で過ごされている。教室には手作りの看板を掲げ、体育会で作った6人の似顔絵のパネルを置き、次のような活動をしたり、地域の方々を集めて活動してくださったりしている。

(1) 共学

教室に机と椅子を持ち込み、生徒と一緒に授業を受けるのを共学と呼んでいる。授業後、管理職や教員に授業や生徒の様子についてお話しくださる。「校長、これはこうした方がええで」と意見を言われることもあるが、ほとんどが教員や生徒への褒め言葉である。後で教員に伝えている。生徒にとっても良い刺激になっており、その熱心な勉強ぶりを見て、自分たちも頑張らなければと思うようである。

(2) 学校行事への参加

毎学期の始業式・終業式には必ず参加してくださっている。3年生の列の横に1列で並ばれ、式辞を聞き、一緒に校歌を歌ってくださる。生徒にとっては、もはや当たり前のことで、全く違和感がない。

また、6月の体育会では入場行進もしてくださる。生徒は手を肩の高さまで上げて行進するが、「ふれあい学級」の方々はアナウンスで紹介されると、観客に手を振って応えていらっしやる。開会式も生徒と一緒にグラウンドで参加する。生徒は「お年寄りなのに、自分たちと同じように参加して凄い」と感心している。

(3) 1年生「人生の先輩」の授業

1年生の3学期、進路指導の一環で「人生の先輩」としてお話をいただいている。講義形式ではなく、5人の方々を囲んで輪になり、小グループで話を聞かせていただく。これまでの人生を振り返り、楽しかったこと、苦しかったこと、頑張ったこと、感動したこと、中学生に頑張してほしいこと、地域の一員として期待していること等、たくさんのお話をくださる。

生徒の感想文を読むと、生徒が真剣に耳を傾け、人としての生き方や在り方について、しっかり考えたことがよく分かる。とても貴重な授業である。

(4) 2年生立志式

2月中旬、2年生の立志式を行う。生徒一人一人がこれからの決意を漢字一文字に込めて色紙に書き、思いを発表する。「ふれあい学級」の方々は生徒への期待と激励の言葉を色紙に書き、説話をしてくださる。

外では地域の方々が紅白の祝い餅を搗いてくださっている。それを手作りの紙箱に入れ、包み紙に包んで渡してくださる。その後は、生徒に餅の搗き方を御指導くださりながら、一緒に餅を搗く。搗きたての餅を一緒に丸め、伊里地区の昔からの食べ方として、砂糖醤油、海苔、黄な粉、小豆餡、もろみ、八丁味噌などをつけて食べる。「美味しい、美味しい」と7個も食べた女子もいる。地域の方々に祝っていただき、将来に向けた決意を持つ意義深い1日となっている。

(5) 3年生面接指導

3学期、3年生は高校入試に向けた面接指導をしていただく。民間企業や役場に勤めておられた方の指導は、人としての在り方を問い、これからどんな大人になるべきかを直接的に指導する面接である。いつも身近にいてくださるけれど、教員とは違った緊張感をもたらすようである。評価もなかなか厳しい。毎年、全員やり直しの評価を受け、2回目を実施している。

(6) 小・中学校地域合同清掃

平成27年度、小中一貫教育の取組として、地域に感謝の気持ちを表すため、全小・中学生による地域合同清掃を始めた。伊里公民館、伊里駅、給食センター、こども園等に分かれて清掃する。昨年度は教員と一緒に地域の方々にも御指導をお願いした。更に今年度は3地区の生徒が住んでいる地区にある施設を、地域の方々に御指導いただきながら掃除させていただいた。

(7) 地域ボランティアと3校園教職員懇親会

生徒への指導ではないが、毎年夏季休業中に開催する懇親会は、いつもお世話になっているボランティアの方々に、学校園が感謝の気持ちを伝える貴重な機会である。総勢60～70人が6～7人ずつのグループに分かれ、ケーキと飲み物をいただきながら、子供たちのこと、地域のことを和気藹々と話す。また、伊里地区を盛り上げるアイデア募集、伊里地区の良いところ見つけ等のテーマで、KJ法を使って知恵を出し合い、模造紙にまとめたりもしている。

3 地域に貢献する

「小学生と中学生の違いは、お世話される側から、お世話する側になること」と機会があるごとに生徒に話している。阪神、東日本、熊本など、大地震が発生した時の中学生の活躍についても伝えている。

そして、校内のボランティア活動を充実させ、積極的な参加を呼びかけている。毎週木曜日の「草抜きボランティア」、毎月1回の「トイレボランティア」、夏季休業中の「水やりボランティア」「芝生ボランティア」等、それぞれ30名前後の生徒が登録し、やりがいを感じながら意欲的に取り組んでくれている。

また、「地域の一員として、地域に貢献しよう」と地域行事のボランティアを募集し、参加を呼びかけている。いつも定員以上の応募があり、参加した生徒は地域の一員として盛り上げに一役を買っている。現在取り組んでいるボランティア活動は次の通りである。

(1) 伊里地区体育会（5月第3日曜日）

地区対抗の大人の体育会である。本校で実施し、中学生は用具、放送係を担当する。用具係は担当者の指示を受けてよく動いている。放送係は「好きにしているよ。」と任せていただき、アドリブで競技を大いに盛り上げている。中学生の活躍を本当に喜んでくださり、昨年度、生徒会が会場で熊本地震への募金をお願いしたところ、沢山の募金が集まり、生徒や保護者分と合わせて計10万円もの募金をすることができた。

(2) 伊里認定こども園夏祭り（7月中旬）

3年生は毎年、家庭科の授業で幼児用のおもちゃを作り、こども園を訪問している。その時の中学生と園児の関わりを見たこども園から、夏祭りの遊び屋台でボランティアをしてほしいと要望された。こども園の保護者が出す屋台に中学生が協力する形である。最初は補助的な役割だった生徒たちが、今では屋台を任せられ、遊ばせ方を工夫するようになった。準備や片付けでも主体的に活動するようになってきている。

(3) 伊里地区シニア体育大会（10月第1日曜日）

老人会主催の体育大会である。本校体育館で実施されるので、伊里地区体育会と同様に、当日の放送係、用具係、演技係の補助として参加している。中学生が司会をしたり補助をしたりすることで、進行がスムーズになる。また、参加者のモチベーションが上がり、体育会自体が盛り上がると喜んでいただいている。最後の片付けも中学生が手伝うので、短時間で終われるようになっている。

(4) 伊里地区文化祭（10月最終土・日曜日）

伊里小学校を会場に土・日2日間で行われる文化祭は地域の方々が出演も観覧も楽しみにしている行事である。書道、手芸、絵画、陶芸、歴史研究物等、多種多様で大量の展示品を、パネルや長机に展示する。2階のギャラリーから吊すパネルもある。中学生も絵手紙や備前焼、美術作品などを出品している。

実行委員が高齢化する中、会場作りや展示等の準備及び終了後の片付けを要望された。準備は土曜日の午前中なので部活動に協力を依頼したところ、どの部も快く引き受けてくれた。力仕事も細々とした仕事もできる中学生の力は貴重なようである。会場ではいろいろなことを頼まれるが、生徒たちはニコニコしながら、友達と声を掛け合ってよく働いてくれている。

日曜日は午後3時頃から片付けがあり、これは有志の参加としている。ステージ発表の参加者や参観に来ている生徒が手伝ってくれるが、準備同様とてもよく働く。終了後は、実行委員の方々から感謝の言葉や感動したとの言葉を毎年いただいている。

(5) 伊里地区なわとび・マラソン大会・駅伝競走大会

本校では、公益財団法人岡山県学校給食会の給食支援事業補助金の交付を受け、食育の一環として季節の野菜を育て、自分たちで調理して食べる実践を行っている。その実践の一つとして、毎年12月中旬の伊里地区なわとび・マラソン大会、1月下旬の伊里地区駅伝競走大会で振る舞われる豚汁の野菜を育てている。

約30名の生徒が登録し、地域の方々の御指導の下、白菜・大根・蕪・青梗菜・九条葱等を育てている。大会では「今年も伊里中学校の生徒さんが育ててくださった野菜たっぷりの豚汁を用意しています。」とアナウンスしてくださり、地域の方々から「ごちそうさま」「ありがとう」と声を掛けていただいている。

なお、地域の人口が減少する中、なわとび・マラソン大会には全員参加、駅伝競走大会には運動部1・2年生が参加し、大会を盛り上げている。

(6) 旧閑谷学校日本遺産認定記念講演会（1月中旬）

一昨年度、旧閑谷学校等の日本遺産認定を受け、区長会が中心となって記念講演会を開催することになった。参加者はどうしてもお年寄りが中心になる。そこで、中学生の活躍ぶりを知る区長会から、これからの伊里地区を担う中学生にも参加してほしいとの要望があり、昨年度から参加している。

土曜日の実施なので、生徒会執行部と参加可能な部

活動の参加とした。旧閑谷学校に関する講演会を大人たちと一緒に聞いた後、元中学校長を講師とする論語の朗読を行う。中学生らしい元気な声を響かせ、地域の方々からとても喜ばれている。

3回目となる今年度は、小学生と一緒に朗読することも計画している。子供から大人までみんなで盛り上がる伊里地区になればと思っている。

Ⅳ 考察

1 成果

(1) 生徒にとって

本校では12月に①学習、②生活、③人権、④行事、⑤地域、⑥教員の6つの大項目、27の設問で学校評価アンケートを行っている。昨年度までの3年間、生徒の肯定的回答の割合を大項目ごとにまとめてみた。

	①	②	③	④	⑤	⑥
H28	86.1	89.3	91.3	92.7	91.6	85.3
H27	83.7	88.2	90.7	90.7	90.6	84.0
H26	86.1	85.8	84.0	90.7	89.2	83.7

保護者についてもほぼ同様の傾向である。元々、前向きな生徒たちで肯定的評価は高い。それでも多くの項目で、更に少しずつ上昇しているのは嬉しいことだし、我々の自信にもなる。一昨年と比べると地域行事へのボランティア参加者数は2倍以上になった。備前市社会福祉協議会が主催する「夏休みボランティア」の参加者数も2名から21名に増加した。また、これまで3年生中心だった参加者は全学年に広がってきた。

参加して達成感を味わい、先生や地域の方々から声を掛けられて更に達成感を高めるという好循環が出来てきていると感じる。そして、それが学校生活へも良い影響を与えていると分析している。

(2) 地域にとって

「中学生は怖い」「中学生はよく分からない」といった声を聞くことがある。一方で、来賓として出席した行事で、中学生が乱暴な言葉で、ぞんざいに使われているのを見て悲しかったことがある。今は、多くの地域の方々が中学生に「ありがとう」「助かる」「頼まあ」と優しく、本当に頼りにするような声掛けをしてくださる。会の後で「中学生のお陰で本当に助かった」とおっしゃっていただくことも増えた。

今年度の体育会では、伊里地区体育振興会が「中学生のために何かしてやりたい」と、ソーラン節で着る法被50着を寄贈してくださった。少し予算オーバーに

なると分かったとき、すぐに区長会が不足分を工面してくださった。地域の方々の目が、確実に中学生に向くようになり、また、優しくなってきたと本当にありがたく思っている。

2 将来に向けて

(1) こども園・小学校との連携

平成27年度、備前市教育委員会の指定を受けて小中一貫教育の取組を開始し、平成29年4月、小中一貫教育校「伊里学園」として新たなスタートを切った。昨年度から毎月1回の合同研修会を重ね、4つの専門部会、毎年4教科・領域の教科部会で、一貫教育の詳細を詰めてきている。さらに、今年6月に小学校で4年生理科、6年生国語、9月に中学校で1年生英語、2年生国語、3年生数学の研究授業を行い、小中学校の全教員が参加して授業研究を行った。

小学校は、中学校とだけでなく、こども園とも連携協議の場を設けた。こども園の入園式・運動会・生活発表会・卒園式に小学校長だけでなく中学校長も出席する。3校園合同で研修会や懇親会も開催した。

これからも「伊里学園」として、これらの取組を継続・充実させ、3校園で一貫した教育を進めていくことが何よりも重要である。また、伊里学園支援地域協議会とも協議しながら、3校園それぞれが要望し、いただいている支援を、幼児教育から中学校教育までを見通した一貫した支援になるよう整理できれば、更に有効になると考えている。

(2) 地域との連携

平成25年度末、パナソニックの工場が閉鎖され、地域人口は大きく減少した。その後も人口減少は進み、高齢化も進行している。これからの伊里地区を考えると、ただ学校を開くだけでは不十分である。地域と共に生徒を育てる学校作りが必要と取り組んできた。

ただ、学校園に目を向け、実際に活動して下さる方はまだまだ限定的で、地域の課題が地域全体で共有されているとは言い難いと思っている。

学校運営協議会の設置の努力義務化やその役割の充実等を内容とする「地方教育行政の組織及び運営に関する法律」の改正が行われ、平成29年4月1日から施行されている。地域と学校が同じテーブルにつき、一緒に責任を負って教育に取り組むコミュニティスクールは一つの解決策になるかもしれない。そのための人材発掘と組織作りも重要な課題である。



地域資源を生かした「まちなかのふるさと教育」

—地域をはじめ広く持続可能な社会の形成に貢献する
人材の育成を目指して—

岡山市立岡山後楽館高等学校 校長 上 林 栄 一

1 はじめに

岡山市唯一の市立高校である本校では、平成28年度より地元商店街などの地域資源を生かした社会的・地域的課題を題材としたアクティブラーニングの視点に立った課題研究や、多様な経験や技術を持つ地域の人材・企業・大学などの協力による地域学習などを推進している。これにより、岡山市の抱える地域課題をとともに考え、解決策を導こうとする持続可能な社会の形成者を育成したいと考えている。

平成28年度に1年次生を対象に実施した「岡山市の課題を発見し、解決策を提案する」プログラムの感想の中に「岡山市に対して、あまり興味がなかったので対策についてなどあまり知らなかった。この授業を通して、岡山市の取組などを知ることができて、とても“岡山人”って感じがした。楽しかった。」があり、地域の現状を知る機会や考える機会をきちんと提供することこそ、学校として取り組むべき課題だと考えた。

そこで、岡山市役所や本校周辺にある文化施設・教育施設・観光施設・商業施設・地元企業などと連携し、地域活動に取り組むことで、岡山市について理解を深める。さらに岡山市の抱える課題を見つけ解決の方法を考え、岡山市をより良くするための提案を行う活動をすることで、「ふるさと岡山市」における次世代の地域創生の基盤をつくりたいと考え「まちなかのふるさと教育」を実施しはじめた。

「まちなかのふるさと教育」は「総合的な学習の時間」

を利用し、全生徒を対象に地域の方や仲間と協働的に活動するという取組を中心に行っている。これ以外に、授業の受講者や希望者を対象とした特別の活動も行っている。本研究では、全生徒対象の3年間を見通した「まちなかのふるさと教育」の学習プログラムの開発と、さらに発展させた教科横断型の特別な活動の取組を行った。

本論文では、平成28年度の取組の成果と課題、課題を解消するために現在行っている平成29年度の新たな試みなどを報告する。

2 研究仮説

「まちなかのふるさと教育」に取り組むことで生徒に期待される成果として、次の4点を考えている。

- ① 岡山市の抱える地域課題をとともに考え、持続可能な社会の形成者となる。
- ② 地域を活動の場とすることで、地域の現状を知り、問題解決の糸口を見つけることができる。
- ③ 地域の方や仲間と協働的に活動することでコミュニケーション能力、情報収集能力、情報活用能力が向上する。
- ④ 課題を解決するための論理的思考力、判断力、表現力を身に付けることができる。

また、効果としては、学校が地域と関わることで、持続可能な地域が創生でき、地域の人材育成と活性化につながると思っている。

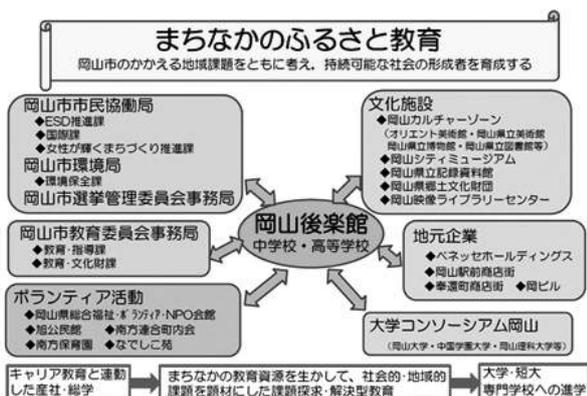
3 平成28年度の取組

3年間を見通した「まちなかのふるさと教育」の学習プログラムの開発と実施

(1) 1年次学習プログラム

① フィールドワーク研修会及び地域連携活動

会場 奉還町商店街・西奉還町商店街
岡山駅前商店街・岡ビル市場
指導者 岡山大学地域総合研究センター
前田 芳男 准教授



実施月 6・7月

内 容

第1回 フィールドワーク調査の実施方法の研修及び商店街などでの調査（聞き取り調査・土地利用調査・人の流れ調査）の実施

第2回 調査結果をまとめたポスターの作成

第3回 グループ単位でポスターを使って発表

実際に調査することで、ふだん何気なく通行している商店街の実態を知り、それぞれの商店街の課題などを考えることができた。また各商店街を比較することでそれぞれの商店街の特徴に気づいた生徒もいた。

② プレゼンテーション講演会

実施月 9月

指導者 中国学園大学・中国短期大学
松畑 熙一 学長

内 容 プレゼンテーションを行うときのポイントや心構えなど

③ 岡山市政の現状や課題を理解し、解決策を提案する活動

実施月 10月

内 容

第1回 岡山市の職員による現状や課題についての講義（29年度は8テーマ）

第2回 岡山市の課題を発見し、解決策を考えるためのワークショップおよびポスター作成

第3回 グループ単位でポスターを使って発表



生徒が作成したポスター

このプログラムを実施後の生徒の感想の中に、「今回の活動はすごく有意義な時間だったと思う。市役所の担当部署の方から、現状や問題点を聞き、どのような方向にもっていけばよいかを考えられたのは良かった。詳しく世の中を知ることができて良かった。自分たちで解決策を考えるという行為がすごいと思った。「考察する」という面で頭が鍛えられたと思う。今回考えたことをもっと外に発信していただけたらいいなと

思った。こういう取組をもっとしていきたいと思う。」
「他の講義を受けた人の資料や発表が大変面白かった。もっと岡山の未来への課題について深く取り組む授業が増えたらいいなと思った。」というものがあつた。

④ 課題研究講演会

実施月 11月

指導者 岡山大学大学院教育学研究科
平田 仁胤 講師

内 容 調べ学習と課題研究の違い
課題研究の進め方など

⑤ ESD講演会

実施月 11月

指導者 岡山市ESDコーディネーター
原 明子 様

内 容 持続可能な社会とは何か
これからどのような取組が必要なのかなど

⑥ 岡山大学の地域研究に関する講演会

実施月 1月

指導者 岡山大学環境理工学部
氏原 岳人 助教
大学生

内 容 地域に関わる研究の手法や意義について
大学生の卒業研究の内容紹介など

1年次では、2年次から開始する「課題研究」のための基礎作りを行う学習プログラムとなるよう工夫を行った。その中で、現状を知る機会や考える契機を提供するための学習プログラムのさらなる開発とプログラムを継続させるための工夫の必要性を改めて感じた。

(2) 2・3年次学習プログラム

① 地域の課題を題材とした「課題研究」

研究テーマ（一部のみ掲載）

岡山の政策
西川の水質
不適正利用ダメ！絶対！（救急車）
あなたの子どもが受ける教育
岡山空襲を次世代に
商店街の魅力
岡山の制服
外国人観光客と魅力的な岡山

2年次から始まる本校の「課題研究」は、グループ単位で自分たちが設定した研究テーマに対して、仮説を立て調査を行い、結果をまとめたポスターを作成し、

発表を行っている。

3年次には研究成果を最終発表会で発表した後、個人で研究論文にまとめている。

研究テーマは、「まちなかのふるさと教育」を推進していくために、平成28年度から岡山の課題に限定した。テーマを限定することに対して、はじめは生徒や教員から反対意見もあったが、「まちなかのふるさと教育」を学校全体の取組とするために、学校組織あげて取り組む姿勢を打ち出して、「課題研究」をスタートした。



最終発表会

岡山の課題に限定したことで、現地調査や聞き取り調査などが実施しやすくなり、研究内容も今までのものに比べるとかなり充実したものになった。生徒からは、「大変だったが、いろいろ調査したりまとめたりしたことで、新たな発見や気づきもあり、やりがいのある活動だった」という感想があった。課題研究を機に、地域活動に興味を持ち、後に述べる「西川水族館」や「わくわく夏休み学習会」に参加する生徒もでてきた。

4 平成29年度を取組

(1) 西川水族館

会場 西川緑道公園筋（歩行者天国）

実施日 平成29年7月23日

対象者 本校2年次・3年次生希望者10名

内容 西川に生息している生き物を採集し、水槽展示生き物についての説明

西川に水中カメラを入れて、水中Live中継

「西川水族館」では、西川に生息する生き物を知ってもらい、川を大切にすることの啓発活動を行った。



水槽展示の様子

この活動は平成28年度から行っているが、平成29年度は、岡山大学の学生と連携したこと、西川を活用したまちづくりの一環

として歩行者天国実行委員会と連携したことが改善点である。連携したことで、生徒が岡山市の魅力化につながるイベントの意味を理解し、活動につなげることができた。人を集めるための声かけや生き物の紹介方法を工夫するなど活動の深化がみられた。

(2) らっかんランチ食堂

会場 岡山後楽館高等学校

実施日 平成29年6月10日

対象者 本校1年次・2年次生希望者13名

地域の一人暮らしの高齢者11名

地域の婦人会・地元の寿司屋

内容 ばら寿司づくり



ばら寿司づくりの様子

本校は、平成29年度より「食」を通じて地域の方と交流することを目的として、「地域福祉」という視点を大切に活動を行っている。福祉科・家庭科・工業科が協力して実施した「ばら寿司づくり」を通して、「一緒に活動できて楽しかった」「次回も参加したい」という地域の方からの感想や、「地域の方は私たちのことを温かく見守って、応援してくださっていることが分かった」「これから地域の方と何か一緒にしていきたい」という生徒の声も聞かれた。

今後は、月に1回地域の方々を学校の食堂に招き、孤食から共食をテーマに開催する「らっかんランチ食堂」を計画し、第1回を7月18日に実施し、第2回は夏休み中の8月18日に流しそうめんを実施し、地域の方に楽しんでもらった。

(3) わくわく夏休み学習会

会場 岡山後楽館高等学校

実施日 平成29年7月25日

対象者 本校1～3年次生希望者39名

岡山中央小学校3～6年生19名

内容 小学生の夏休みの宿題の支援

「わくわく夏休み学習会」も、平成29年度から始めたもので、小学生の学習支援活動から児童の教育について考え、参加生徒が地域社会へ貢献している意識を向上させるとともに、自己肯定感・有用感を認識できるような活動となっている。参加した小学生からは、



学習会の様子

「また参加したい」「宿題が終わって良かった」などの感想があり、「小学生が教えたことを理解して正解にたどりつ

て、分かったと言ってくれたときはとてもうれしかった」という生徒の声も聞かれた。

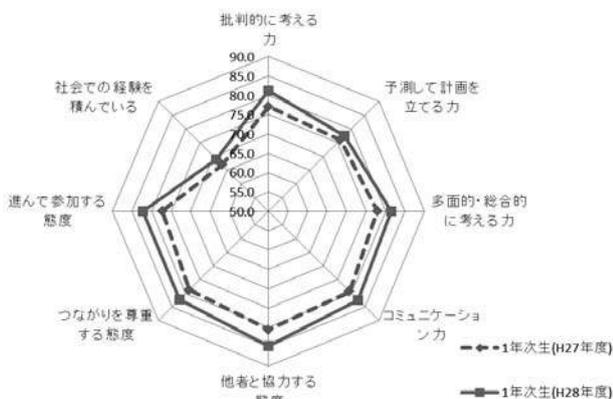
5 成果と課題

(1) アンケート調査による成果の検証

① 生徒の変化

地域資源を生かして、地域の方や仲間と協働的に活動するという「まちなかのふるさと教育」の取組を実施した平成28年度は、平成27年度と比較して研究仮説で述べた期待される成果の中の、「③コミュニケーション能力、情報収集能力、情報活用能力の向上」や、「④課題を解決するための論理的思考力、判断力、表現力を身に付けることができた」と感じている生徒が増加した。また、さまざまな活動後の感想の中で、期待される成果の「②地域の現状を知り、問題解決の糸口を見つけることができた」ことに触れているものもあった。しかし、「社会での経験を積んでいる」という項目に関しては、多少数値は上がっているものの非常に評価が低く、社会経験の場の提供の少なさが課題となっている。

「まちなかのふるさと教育」実施前後の生徒の変化

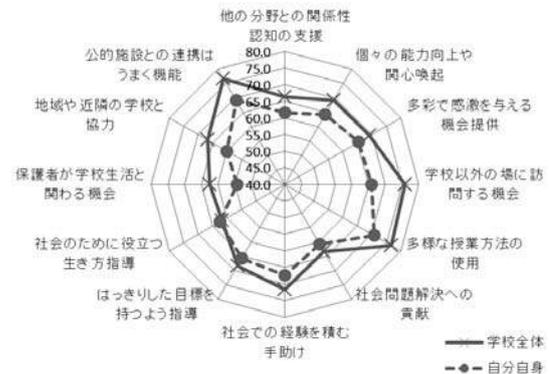


② 学校全体と教員の地域学習に関する認識の違い

「まちなかのふるさと教育」を始めてから、学校全体の地域との連携や社会問題への取組については向上しているが、教員個人としての地域学習への関わりは

低いという結果が見られた。学校全体での取組になっていないこと、教員が主体的に関われるようにするための教材提供や研修の不足、また、地域や近隣の学校との協力があまりできていないという実態が明らかとなった。

地域学習に関する学校全体と教員個人の認識の違い



(2) 今後の課題とその解決への展望

教員の意識調査の中で、教員の指導力を向上させる機会やしきみが必要という意見もあり、全教員が自信を持って楽しみながら取り組めるよう平成29年度以降定期的に教員研修を実施したい。そこで、平成29年度は、教員を対象に5月24日「持続可能な社会への取組」についての研修会を実施した。今後は多忙な中での効果的な研修の方法を考えていく必要がある。

また、地域や近隣の学校との協力があまりできていないという課題と、社会での経験を積んでいないという課題を改善するために、「らっかんランチ食堂」や「わくわく夏休み学習会」の取組を新たに始めた。

さらに、外部の指導者の指導助言を受けながら、担当者が変わっても学習プログラムを継続するための工夫を行いたい。

6 おわりに

「まちなかのふるさと教育」を始めてから、この1年半の間で、本校と地域との関わりが大きく変化した。地域の人・場所・時間などと本校とのつながりを、これからも継続的に改善を加えながら深めていかなければならない。現段階では、期待される成果の中の「①岡山市の抱える地域課題をともに考え、持続可能な社会の形成者となる。」に関しては、まだ結果は出ていないが、本校を卒業した生徒が持続可能な社会の形成者の中心となっていくことを期待している。今後も「まちなかのふるさと教育」を充実させていくために、学校と地域が力を合わせて協働して取り組んでいきたい。



生徒の主体的な行動を促し、 社会人としての基礎力の養成を目指すプログラム開発

—地域と連携し、地域をフィールドとした
総合的な学習の時間等の取組—

岡山県立瀬戸高等学校 校長 乙 部 憲 彦

1 本校の現状

本校は、岡山県の東備学区に位置する1学年4クラスの普通科高校で、現在、東備学区（一部岡山学区を含む）の29中学校から生徒が来ている。生徒のほとんどは進学希望で、卒業生のうち約8割は四年制大学へ進学している。近年、岡山市内の高校や私立高校への希望者が増加し、生徒募集の厳しい現状がある。また、生徒の状況は、真面目でおとなしい生徒が多く、受け身で指示待ちの生徒もいる。

2 総合的な学習の時間等を改編した理由

本校は総合的な学習の時間の中で、1・2年生の後半でそれぞれ課題研究を行っており、これまでは学問や仕事等、進路に関する調査研究を行ってきたが、調べ学習の延長で生徒の主体的な活動につながりにくい面があった。また、本校の社会貢献活動は、学校近くの保育園、児童クラブ、社会福祉施設での活動や町内会と連携した土嚢作りや清掃等を行ってきた。

そこで、さらなる主体的な行動を促し、社会人としての基礎力（考える力、伝える力、行動する力等）を付けたいと考え、1年生後半、2年生前半の総合的な学習の時間を改編するとともに、2年生の夏休みに実施する社会貢献活動を、1年生で調査した地域を対象に自らが探した貢献活動を行うこととした。

これらの取組を通し、東備学区等の幅広い地域から来る生徒が、それぞれの地域のことに関心を寄せ、地域の魅力や課題等について調査研究・発表し、さらに地域貢献活動を行うことで、社会人としての基礎力（考える力、伝える力、行動する力等）を付けることを目標とした。

3 取組の概要（平成28年10月～平成29年10月）

(1) 「地域調べ・地域貢献」（1年生後半）の目的

シンキングツールを活用し、自分が住む地域と他の地域を比べ、地域の魅力や課題を確認し、自分たちが

地域に対してどのような発信・貢献ができるか考える。

(2) 「地域調べ・地域貢献」（1年生後半）の内容

- ① 発表方法の学習～伝える力を手に入れよう～
- ② 地域紹介～パンフレットで地域を紹介しよう～
- ③ 研究方法の学習1～発想法を手に入れよう～
（シンキングツールの学習1）
- ④ 研究方法の学習2～比べる力を手に入れよう～
（シンキングツールの学習2）
- ⑤ 調査研究1～地域の魅力・課題を調べよう～
- ⑥ 調査結果報告～地域の魅力・課題を伝えよう～
- ⑦ 調査研究2～地域の魅力・課題を洗い出そう～
- ⑧ 調査研究3～地域の魅力の宣伝方法・課題の解決方法を考えよう～
- ⑨ 調査研究のまとめ～地域の魅力・課題等をまとめよう～
- ⑩ 地域振興関係者を囲む会～調査研究内容を発表しよう～
- ⑪ 地域貢献についての考察～貢献できることを考えよう～
- ⑫ 地域貢献～希望するグループが春休みに行動してみよう～

(3) 「地域貢献」（2年生前半）の目的

1年生の取組で確認・発見した地域の魅力のさらなる発信や地域の抱える課題の解決に取り組む中で、郷土のすばらしさを理解し、これからの地域作りに貢献できる素地を築く。また、社会の中での自分の役割を考え、解決するための知識や技術を身に付け、社会で活躍するために必要な社会人としての基礎力を培う。

(4) 「地域貢献」（2年生前半）の内容

- ① マナー講座～制服の着こなし方、アポの取り方・電話応対のやり方を学ぼう～
- ② マナー講座～名刺交換・名刺の渡し方、自己紹介の仕方、礼状の書き方を学ぼう～
- ③ 地域貢献先を探そう～行動する力を手に入れよう～



図5 全体発表の様子



図6 グループ別座談会の様子

⑤生徒の感想（抜粋）

- ・今まで住んでいた地域の良さ、課題について改めて考えることができた。
- ・自分が知っていたこともほんの一部に過ぎなかったのだと実感した。
- ・高校生など若い人の力が地域には必要なので、今後活動に積極的に参加したい。
- ・自分の地域は隠れた魅力がたくさんあることに気がついた。岡山を代表するものばかりなのに、なぜもっとPRしないのかなど疑問も浮かんだ。
- ・私たちにもできることがあることがわかったので、社会貢献活動に積極的に参加していきたい。
- ・課題についてグループで話し合った以外にも、役所の人と話をしているうちにどんどん浮かんできた。高校生などの意見も聞きたいということなので声を上げていきたい。
- ・市の人と実際に話をして、調べ学習では分からないことを教えていただいて貴重な体験ができた。自分から地域の魅力を伝えられるようにしたい。
- ・今までは地域に貢献していなかったけれどこれからは少しずつ行動に起こそうと思いました。
- ・今まで知らなかった問題を知ることができた。特に人口の減少の問題は思っていた以上に深刻だった。役所の人や若い人たちに移住してもらい、今

いる人には永住してもらいたいと言われていたので、それに協力できるよう努力したいと思う。

- ・マイナスだとばかり考えるのではなく、その中にプラスになるものがないのか考えることが大切だと感じた。

(3) 1年生の取組⑫ ～希望するグループが春休みに行動してみよう～

春休みを中心に、希望する5グループの生徒が出身中学校等を訪問し、中学生学習支援や中学生との合同清掃活動（図7）等に自主的に取り組んだ。



図7 中学校生徒会と合同清掃の様子

(4) 2年生の取組①・② マナー講座

アポの取り方、電話応答のやり方、名刺交換の方法等を学び、夏休みに実施する「地域貢献活動」に向けて学習を行った。



図8 名刺交換実習の様子

(5) 2年生の取組④ 地域貢献活動

夏休み中に、社会貢献活動の一環として実施した。昨年までは、学校近くの保育園、児童クラブ、社会福祉施設での活動や町内会と連携した土嚢作りや清掃等、学校が用意したプログラムを行っていた。今年は1年生の取組を踏まえ、自らが貢献先に連絡を行い、貢献内容を決定し実施した。

主な取組の内容

- ・瀬戸町の防災について

- ・長船町PR動画作成
- ・あかいわ映画祭りと赤磐の魅力について
- ・地域清掃（瀬戸駅・三徳園・赤磐市内など）
- ・金属製ゴミステーションの設置要望について
- ・アユモドキ保全活動の調査研究
- ・瀬戸町のグルメ紹介
- ・あかいわのぶどうPR
- ・あかいわ桃のPR
- ・児童・生徒の学習支援
- ・赤磐花火大会片付け
- ・東備地区森林組合の調査
- ・三石の歴史・文化
- ・備前市マスコットキャラクター製作
- ・瀬戸内市中央公民館イベント支援

実際に活動を行うと、当初予定した活動通りにはいかないグループがあったり、活動が予定より広がり現在も継続的に実施するグループがあり、生徒の主体的な動きを感じているところである。活動の詳細報告は、地域貢献活動報告会で実施した。

(6) 2年生の取組⑤ 地域貢献活動報告会

- ①日 時 平成29年10月26日（木）13：20～16：15
- ②出席者 2年生156名，1年生159名，地域振興関係者等20名，大学関係者2名，中学校関係者4名
- ③概 要 2年生による地域グループごとに実施した地域貢献に関する取組の報告を行う。1年生は、報告を聞き、評価するとともに、参加して下さる地域振興関係者の方から様々な意見をいただくことで、自らが取り組む課題を発見し、今後の調査研究に役立てる。
- ④内 容
 - ・各グループのポスター発表…参加する1・2年生が各グループのポスター発表を聴き、意見交換を行う。
 - ・代表グループの全体発表とパネルディスカッション（パネラー：地域振興関係者代表，大学関係者，本校教員，代表グループの生徒）
 - ・地域振興関係者を囲む会…1年生が，参加された地域振興関係者の話（地域の課題）の聴き取りを行う。

5 まとめ

インターネットの普及によって調べ学習の内容は格

段に進化した。本校でも、これまでは1・2年生の総合的な学習の時間の一部で課題研究を実施してきた。普通科高校である本校では、その内容は将来の進路に係わる内容が多く、その多くはインターネットを活用した調べ学習的なものであった。また、その成果発表でも、クラス発表とその後のクラス代表による全体発表で、一人一人が積極的に発表する場面は少なかった。その結果、「検索」や「活用」という力は付いても、自らが主体的に動く「意欲」や「考える力」、「コミュニケーション能力」の育成につながっていなかった。その証拠として、進学指導の面接練習の中で、高校生で取り組んだことを聞いてみると、誰一人として課題研究をあげる者はおらず、自らが何に取り組んだかも忘れていた者もいた。

本校は、岡山県の東南部を学区とし、その地域は広範囲にわたる。教員がそれぞれの地域に出るのは難しい。逆に地域の方を一堂に学校に招くことで、地域との接点ができないかと考えた。さらに、高校3年間で1週間程度取り組む「社会貢献活動」とつながりをもたせることで、主体的な行動を促した。今回のプログラムは、シンキングツールを活用することで「考える力」の育成、グループで意見交換し、地域の方に発表することで「コミュニケーション能力」、さらに自らが企画、連絡して、地域に出て活動を行うことによる「行動する力」、「意欲」の醸成に役立っている。実際、多くの希望者が任意に地域への活動に参加している。これまで、学校と家庭との往復だけであった者が、積極的に行動している。ただ、貢献活動内容が不十分なもの、発信力に欠けるもの、受け身の活動になっているものもある。今後、異学年交流を行い改善を促すことで、次年度の取組のレベルアップを図りたい。

今回の活動で、地域からの瀬戸高校への応援者が数多く現れた。赤磐の桃農家の方、市役所の商工観光課の方々、地元町内会の方々から、多くの励ましをいただき、今後の活動の示唆もいただいた。最後に、今回の活動でお世話になった方々に御礼を申し上げる。

6 参考文献

テストの花道1(2011)NHKテストの花道制作チーム
 テストの花道2(2011)NHKテストの花道制作チーム



保・小・中の連携について

—教員の一日研修を通して—

赤磐市立城南小学校 校長 中西伸司

1 はじめに

中1ギャップや小1プロブレムが言われ始め、保・幼・小・中の連携が求められるようになってきている。

赤磐市は、平成17年3月に旧山陽町、旧赤坂町、旧熊山町、旧吉井町の4町が合併して誕生した。その翌年の平成18年度から市教委が指定した中学校ブロック（1中学校とその学区の小学校）で共同研究を進め、その成果を市内で発表することで小中の連携を図ってきている。また、毎年、中学校ブロック（幼・小・中）でチーム編成を行い、教職員体育大会を通して、中学校ブロックを中心に教職員の連携も図ってきている。

旧吉井町には、4保育園、2小学校、1中学校があり、旧町時代からの吉井教育研究会が現在も続いている。保・小・中の保育士や教員が4部会（①集団づくり ②健康教育 ③学力向上 ④幼児教育）に分かれて、それぞれの年間テーマに基づいた話し合いや活動を行っている。平成28年度の吉井教育研究会の総会の前に、本校の勤続年数が比較的長い教員に保育園や中学校で名前を知っている保育士、教員を尋ねたところ、わずか2～3名程度だった。同じ中学校区の他校種で、その程度の人しか名前を知らないという現状に大変驚いた。このような状況で、保・小・中連携もあったものではない。

小学校を例にすると、校長は保育園長や中学校長はお互いによく知り合っている。教頭も保育園長や中学校の教頭・校長を知っている。養護教諭や事務職員も知っている。つまり、小学校の一人職の立場の者は、日頃から関わりが深く、お互いに連携しやすい立場にある。ところが、実際に幼児の保育に直接関わっている保育士や児童生徒の教育を行っている小中学校の教員は、校種の異なる保育園や中学校の保育士、教員の名前すら知らないのが現状である。それで、保・幼・小・中の連携が図られるはずはないのではなかろうか。

そこで、本校では、平成28年度から学区内の3保育園に教員を一日派遣して、まずは学区の保育園の実態を体を通して理解しながら保小中連携を始めることに

した。

2 平成28年度の実践

(1) 目的

城南小学区の公立保育園に一日訪問して、幼児の保育を通して、幼児や保育園の実態把握や保育内容、方法等を知り、あわせて保育士との交流を図り、保・小連携を深めていく。

(2) 訪問先と訪問者

①周匝保育園

8/1（月）・・・福田維子

8/2（火）・・・田中 歩

8/4（木）・・・延岡康明



②黒本保育園

8/4（木）・・・東 智栄

8/22（月）・・・國安真輔

8/26（金）・・・草村洋美



③佐伯北保育園

8 / 4 (木)・・・三宅康生, 井上淑英

8 / 22 (月)・・・南奈津子



(3) 訪問者の研修報告

①活動内容

- 登園補助
- 自由遊び
- プール遊び
- 運動会に向けての練習
- 体操
- 給食指導～歯磨き指導
- 読み聞かせ
- お昼寝
- お迎え待ちの補助～居残り保育
- 情報交換
- 環境整備・・・草抜き, 畑仕事, 掃除



②研修で分かったこと

- 幼児の実態等
 - ・ 0歳から6歳までの幼児の実態
 - ・ 具体的な場面での幼児の実態
 - ・ 幼児の気づき
- 保育内容
 - ・ 幼児の活動を保障する豊富な準備物
 - ・ 生活のきまりや友達関係
 - ・ 保育園の食育指導

・ 積み重ねの指導の大切さ

・ 丁寧な説明と待つ姿勢

○保育士

- ・ 母親的存在と信頼関係
- ・ 言葉かけや支援
- ・ 褒め言葉や注意の言葉
- ・ 言葉のトーンや抑揚
- ・ 学区の保育園の保育士さんとのつながり
- ・ プロ意識の高さ
- ・ 幼児の目の高さでの話しかけ

○保育園の体制

- ・ 幼児から離れる場合の保育士同士の連携
- ・ 保育士同士のあうんの呼吸
- ・ 幼児の自立に向けての補助
- ・ 自ら気づくような言葉かけ
- ・ 生活習慣の定着への段階的な指導
- ・ 小学校にはない施設や設備等への配慮
- ・ 動植物や掲示
- ・ 男性保育士の必要性
- ・ 保育園の方針や考え方

○その他

- ・ 休憩時間等々, 勤務条件の厳しさ
- ・ 集団生活の基盤である保育園の重要さ
- ・ 小1のカリキュラムの見直しの必要性
特に, 生活科
- ・ 「トイレの使い方」「並び方」「姿勢」等の基本は保育園でできている。保小連携の必要性。
- ・ 保育園から小1への連携の重要性
- ・ 小学校以外の初めての職場で新鮮だった
- ・ 安全面, 衛生面, 健康面へのきめ細かな配慮
- ・ 分かりやすい道具等の配置や表示

(4) 保育園長の感想

- 小学校の先生が保育園に来てくれるということで, 園児達は大変楽しみに待っていた。そして, 一緒に遊んだり, 活動したりすることがとても楽しかったようだ。また来てほしいと言っていた。
- 小学校の先生達と一緒に一日過ごせたことで, 城南小学校がとても身近に感じられるようになった。本当に保育園にとってありがたい取り組みでした。来年度もよろしくお願いします。
- 男性の先生が来てくれたので, 日頃保育園で

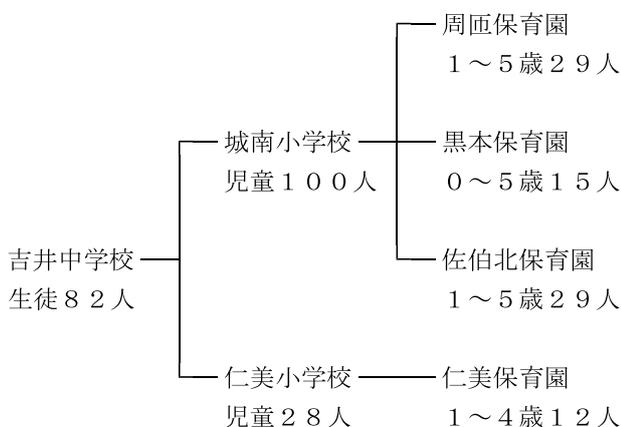
できない環境整備（草抜きや畑仕事等）をして
 いただいて大変助かりました。

3 平成29年度の実践

(1) 目的

城南小学校区の公立保育園や仁美小学校、吉井中学校に城南小学校の教員を一日派遣し、幼児、児童、生徒の保育や指導を通して、幼児、児童、生徒の実態を把握するとともに、他校種、園の方針や体制等を知り、保育士や教員との交流を図りながら、保・小・中の連携を深める。

(2) 吉井地域の保・小・中



(3) 訪問先と訪問者

①周匝保育園

8/7（月）・・・上田朋宏
 8/8（火）・・・越智幸枝

②黒本保育園

8/7（月）・・・狩野英雄
 8/8（火）・・・六代有紀

③佐伯北保育園

8/7（月）・・・田中 歩
 8/10（木）・・・國安真輔

④仁美小学校

11月予定：野村文武

⑤吉井中学校

11月予定：延岡康明
 11月予定：井上淑英

(4) 訪問者の研修報告

①活動内容

- 朝の準備
- 朝の会
- おやつ
- 着替え
- 運動会の練習
- 避難訓練
- 水遊び、砂場遊び
- 給食～歯磨き指導
- 布団敷き～お昼寝
- プール後片付け
- 運動場整備
- かかし作り
- 帰りの会
- 園児引き渡し
- 延長保育児の相手



②研修で分かったこと

- 幼児の実態等
 - ・あいさつ、返事の徹底
 - ・朝の準備や着替え
- 保育内容
 - ・積み重ねの重要性
 - ・遊びの広がりや準備物
 - ・発達段階に応じたコミュニケーションの育成
- 保育士
 - ・チームワークの良さ
 - ・保育士同士の声の掛け合い
 - ・勤務の厳しさ
 - 園児から一日中目が離せない
 - 事務作業等は、昼寝時か退園後
 - ・一人ひとりへの支援のあり方
 - ・待つ姿勢
 - ・幼児の意欲や自主性を引き出す声かけ

○保育園の体制

- ・園全体の統一
- ・準備物と収納の仕方
- ・保護者との綿密な連絡
- ・基本的な行動の仕方の徹底

聞く、話す、返事、並ぶ、待つ等々

○その他

- ・保育園から小学校へのつながりの必要性
- ・小学校では当たり前のことが保育園では一つ一つきめ細かく指導されていた。
- ・警報発令時だったが、責任を持って園児を預かる危機意識に接した。
- ・発達障害傾向の保育園での見分け方の難しさ

(5) 保育園長の感想

- 吉井地域の保育園に赴任して、小学校との交流があることに驚いた。とても小学校が身近に感じられ、ありがたいことです。保護者にも園児にも大好評です。
- 運動会の練習や水遊び等、大変助かりました。男の先生に園児がぶら下がったり、肩車等をしてもらって、園児がとても喜んでいました。また来てくれるのを園児は楽しみにしています。
- 保育園から小学校をみると、敷居が高いと思いましたが、このような交流があればとても親近感が湧き、小学校と一緒にこの地域の子ども達を育てていくという素晴らしいつながりが持てました。今後ともよろしく願います。



4 おわりに

(1) 保小連携

昨年度から始めた保育園への一日派遣研修では、幼児の保育を通して、幼児の実態、保育内容、保育士の動き、保育体制等々、教員は実に多くのことを学ぶことができた。学区の保育士との交流も深まり、また小学校教育のあり方を考え直す機会にもなった。

(2) 小小連携

一日派遣研修は、まだ実施できていない。しかし、本校では4年生の閑谷学習、5年生の海事研修、そして6年生の修学旅行を仁美小学校と合同で事前指導から実施し、児童同士も教員同士も意思疎通ができていく。その上に、一日派遣研修を通して、日頃の児童の実態や授業のあり方を学級担任同士が理解することで、さらなる教育活動の充実や卒業後の吉井中学校での友達関係等にも良い影響がもたらされるのではないだろうか。

(3) 小中連携

小学校を卒業した児童のほとんどは吉井中学校に進学している。中学校での様子は断片的に耳に入るが、日々の学校生活や友達関係、学習状況等々については、良くない場合の噂話を聞く程度である。そこで、小学校時代に担任した教員を吉井中学校に一日派遣して、学習の状況をみたり、学習の補助をしたり、あるいは直接雑談したりすることを通して、小学校での指導のあり方を見直す機会にもなる。また、たとえ中学生になっても小学校の先生が見守っているということの中学生に感じてもらうことができれば、悩んだり困ったりした時に、立ち直る一つのきっかけにもなるのではないだろうか。

(4) 保小中連携

まず、この地域の子ども達の保育・教育に携わる我々は、校種に関係なくみんなでこの地域の子ども達を育てていかなければならない。

そのためには、まず我々がお互いの顔や名前を知るのは最低限のことで、次に同じ土俵で一緒に行動することでお互いの理解が深まるのではないかと考えている。保小中連携というには、まだまだほど遠い状況であるが、まずはできる時に、できることから始めている。

論 文（個人部門）



作文を用いた対話による深い学びの試み

—高等学校3年生 教科現代文での評論文教材を用いた研究実践とその考察—

岡山県立岡山朝日高等学校 教諭 平田 丞二

1 研究の背景と仮説

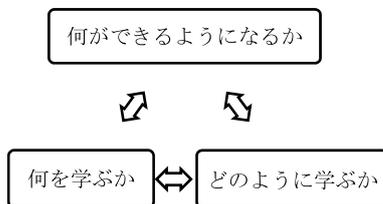
本研究では、最近の「アクティブ・ラーニング」についての考え方や動向を踏まえ、高等学校3年生の教科現代文の授業の中でその視点を取り入れた研究実践を行い、その成果や課題を検証する。

教育現場において、ここ数年、「アクティブ・ラーニング」の必要性が叫ばれ、多くの優れた取組がなされる一方で、「アクティブ・ラーニング」という言葉が先走り、その手法の導入自体が目的化されてしまうというような問題を指摘する向きも多い。

平成28年12月に示された中央教育審議会の答申では、「アクティブ・ラーニング」を「主体的・対話的で深い学び」と定義し、知識の質や量だけではなく、学びの質や深まりを重視することを掲げている。つまり、課題の発見と解決に向けた主体的・対話的な学びが求められている。

また、今回の指導要領の改訂が目指すのは、単元や題材のまとまりの中で、子供たちが「何ができるようになるか」を明確にしながら、「何を学ぶか」という学習内容と、「どのように学ぶか」という学びの過程を組み立てていくということにあり、「アクティブ・ラーニング」は、「どのように学ぶか」の中に位置付けられる。

【答申で示されたイメージを簡略化したもの】



今回の取組では、答申でも掲げられている「深い学び」につながるように、教科現代文の中で「どのように学ぶか」ということに焦点を当て、「作文」を用いて、生徒が主体的・対話的に取り組める授業展開を工夫したいと考えた。本稿では、「作文」という言葉を、「書くこと（行為）」と「書かれたもの（文章）」という二つの意味で用いている。「作文」に着目したのは、「作文」

という静かな印象を受けるかもしれないが、実際の生徒たちの取り組みぶりを見てみると、自らの考えを文章として結晶化させようと集中して取り組む、頭がアクティブに働いている、主体的・能動的な行為と思われるからだ。



【集中して作文に取り組む様子】

一方で、作文に対して苦手意識を持っている生徒が多いことも事実だ。2年生の終わりに行ったアンケートで、「作文に、苦手意識はありますか?」という問いに対し、「ある」「ややある」と答えた生徒が73%と、約4人に3人の生徒が作文に苦手意識を持っていることが分かった（下表参照）。

	ある	ややある	余りない	ない
割合 (%)	26.5	46.5	21.5	5.5

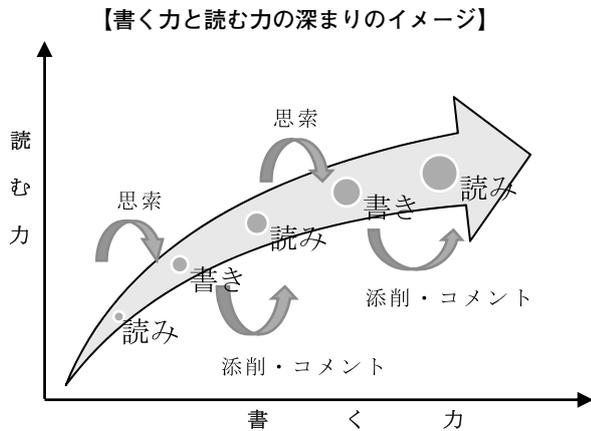
従来から作文指導には力を入れてきたが、こうした実態を踏まえて、生徒の苦手意識が払拭されるようなより効果的な作文指導を行いたいと考えた。

今回の取組では、以下3つの研究仮説を立てた。

- (1)作文する中で、教材をより深くまで読み込むようになり、書く力と読む力の双方が相乗的に伸びる。
- (2)級友の作文を読むだけでなく、コメントを加え、それをフィードバックするという一連の取組を通し、作文を媒介とした級友との深い対話が可能となる。
- (3)作文を通して級友の考えや感想も併せて知ることによって、より多角的で深い理解が可能になる。

教材を「読み」、それについて「書く」ことにより

「読み」が深まる。「読み」が深まることにより「書き」の精度が上がる。このように、「読み」と「書き」が互いに補強し合いながら、より深い理解につながるというイメージを下図で表している。



2 具体的な研究内容

(1) 取組の概要

研究実践は、3年生の現代文（2単位）の2つの講座で、教科書『高等学校 現代文B』（第一学習社）の「いのちのかたち」（西谷修 著）を教材として行った。この教材には、英語の「ライフ」と日本語「いのち」の違いやその背景、機械論に立脚する生命科学に対するあるべき姿などが述べられている。重いテーマを扱った骨太の内容であり、知識として「知る」段階から、概念的な意味理解と洗練（「わかる」）の段階へと深化させ、人としての在り方や生き方をも考えさせることができるのが、本教材の醍醐味である。その醍醐味をより主体的・能動的活動を通して味わうことができるように、作文を取り入れた対話的な取組を行うこととした。

(2) 本文理解を深める作文を用いた対話

本文を深く読み込むために、本文に対応した6つの発問と、200字要約を書き込める「学習プリント」を活用した。このプリントの活用上の一番のポイントは、生徒が書き放しで終わることのないようにすることだ。教員が添削し、フィードバックし、他の生徒の解答や考えも示し、それを互いに共有する。そのことで、自分が書いた作文の見直しを行い、本文の読みをさらに深めていった。このように、教員の添削や級友のコメントによって、作文のモチベーションが上がるとともに、書き直しなど事後の取組にもつながった。

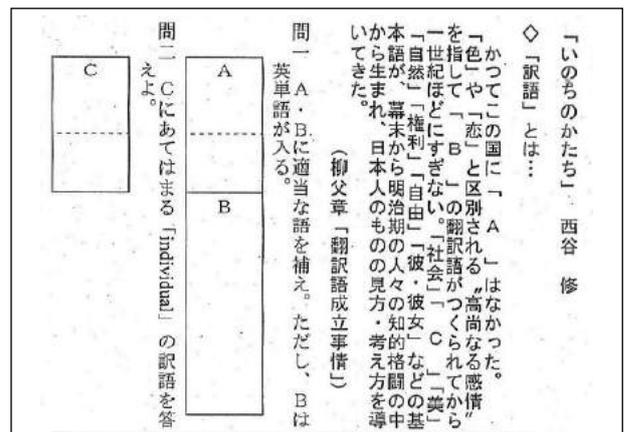
また、指名して模範文例を板書させる際には、その

文章を作る上で工夫した点や困った点などを発表させ、それについて他の生徒にも意見を求めることで、互いに考えを述べ合う形での主体的な対話となり、理解を深めさせる上で効果があった。

(3) 発展的な作文を用いた対話

対話的な取組の中心に据えたのは、二枚の「補助プリント」を用いた作文だ。生徒の作文については、よいものをいくつかピックアップして印刷し、フィードバックして、それについて近くの生徒同士で協議させた上で、お互いの作文にコメントを加えさせた。作文に当たっては、各自の書いたものが教材として使用される可能性があることを事前に示すことで、生徒たちは他者の目を意識し、よく練った文章を書いていた。

補助プリントの一枚目は、本文の前半で活用した。近代日本で言語を輸入する中で、なぜ訳語や造語が作られたのかを、より深く思考させるためのものだ。柳父章の「翻訳語成立事情」の一説を示すなど、「いのち」以外の訳語について、また翻訳に関する文化的背景を、身近な言葉から考察できるように工夫した。



プリントを参考にしながら、「なぜ訳語・造語は作られたのか？」ということについて、各自の考えを作文させた。次時では、その中の8編を抜粋し、プリントにして生徒にフィードバックし、そのプリントについて考えたことを話し合う時間を設けた。作文をもとにすることで、論点を明確にした活発な話し合いがなされていた。

さらに、話し合った内容も含めて、級友の作文についての感想を書かせ、よい作文を選んでプリントし、生徒に配布して再度話し合わせた。このように、作文と話し合いを交互に行い、それを積み重ねることで、生徒たちは話し言葉と文章によるキャッチボールをしながら、次第に考えを深めていったようだ。



【級友と活発に話し合う様子】

その中で、作文によるやり取りの一例を次に示す。
(a)は「訳語がなぜ作られたか？」についての作文、(b)は(a)を読んで考えたことを作文したものだ。

(a) 訳語には抽象度が高く目に見えないけれど存在するというようなものが多いが、近代になり目に見えないが我々に影響を及ぼすような存在にも目を向け始めるようになった。明治に入ると西洋の物・考えが積極的に取り入れられたため、そのような中で新たに生まれてきたのではないか。

↓

(b) 上記の意見は、自分の考えにも近いのかもしれないと思った。「目に見えないが我々に影響を及ぼす存在」というのは、西洋の言葉や文化のことでだけでなく、日本を統治していくような政府やそれらによって様々に変化していく民衆自身でもあったように思う。その大きな存在にのみこまれるのではなく、受け入れつつも自分たちに合うように形を変えていったので、「日本人らしさ」も感じられるような、革新的な言葉が生まれてきたのだと思う。

(a)の文章自体が鋭く本質に迫る内容だが、さらに(b)はそれを受けて、掘り下げた発展的な見解を述べている。これは一例だが、多様な考えや意見が作文に込められており、教科書の内容を深めることは勿論のこと、級友の考えも知ることで、多角的で深みのある視点が養われた。

補助プリントの二枚目は、単元の中ほどで配布した。「ライフ」という語の背景にある西洋思想を、生徒たちに深く理解し考えさせることを意図した。内容は、西洋思想を考える上でキーワードとなる「機械論」・「分析」・「抽象」という三つの語彙解説と、それらの言葉に象徴的に表される西洋思想の根幹をまとめたものだ。

一枚目の補助プリントと同様に、このプリントについても読んで気付いたことや考えたことを作文させ、次の時間には秀作をプリントして配布し、話し合いの時間を設けた。実際の作文を以下二編紹介するが、(c)は本文の内容を受けて自分の意見を述べ、(d)は筆者とは異なる観点から、哲学的な思索に至っている。

(c) 人間の単なる生理学的な生と死だけでなく、人間としての人生や人間関係を含む「いのち」という言葉が、科学や西洋思想に傾倒しすぎている人間にストップをかける最後の砦である。

(d) 精神が何によって司られているのか。たとえば脳という「パーツ」が「精神」という別次元の存在でもあるということになる。ただ、もし脳をそのまま他の身体に接続し、脳の固有の精神も発現するなら、脳もパーツでしかないと言えるのではないか。

上に紹介したもの以外も加え、生徒には八編の作文を紹介した。級友の多様な気付きや考えを読み、話し合うことで、西洋思想についての認識を深めていき、その上で本文にもう一度戻って考えることで、本文自体の読みも一層深められたようだ。

(4) 取組の核心

ここまで、具体的な実践内容について述べてきたが、ここで取組のポイントをおさらいしたい。

授業に用いた「学習プリント」と「補助プリント」だが、前者では本文理解をより深め、後者では発展的な内容へと展開できるよう、それぞれの特徴を生かすことで、効果的に本文を読み深められるよう配慮した。

特に今回は作文を用いた「書く・読む」という手法に焦点を当てたが、活動の中には議論による「話す・聞く」という手法も併せて用いた。「書く」という行為にはじっくりと言葉を練り込んで伝えられることなど、「話す」という行為にはその場でタイムリーにやり取りができることなど、それぞれの特性の違いがあり、目的に応じて効果的に使い分けることを心がけた。

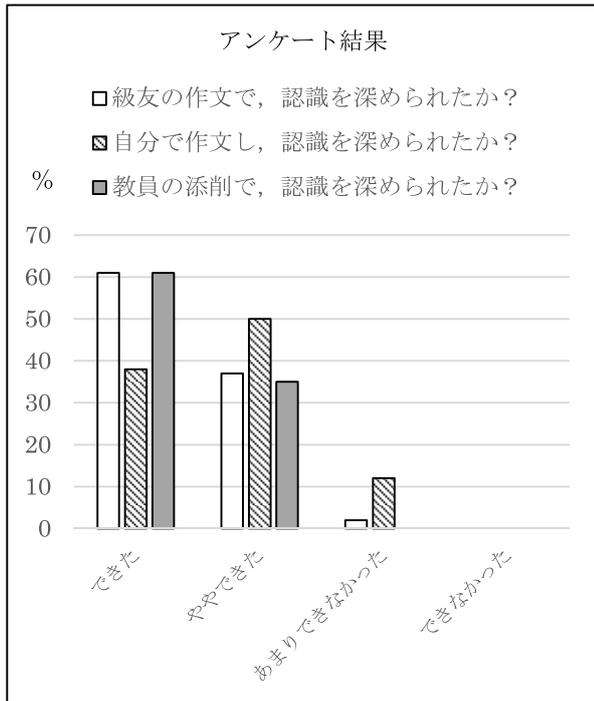
以上のように、一つ一つの取組が、うまく組み合わせられることで、相乗効果によるより主体的で深い学びが可能となると考える。

3 研究成果と課題分析

本章では、三つの研究仮説に基づく本研究の狙いがどれほど達成できたか、単元の最後に実施した生徒へのアンケートをもとに検証する。

(1) 研究成果

本研究では「深い学び」を大きな狙いとしたが、数値的なデータを用いてこの点について分析したい。下のグラフは、「認識の深まりを感じられたか？」という問いに対する4段階（できた・ややできた・あまりできなかった・できなかった）の回答を集計したものだ。「友達の作文」「自分で作文すること」「教員の添削」それぞれについて、同様の質問を行った結果を下にグラフ化した。グラフの数値は、生徒が選択した割合(%)を示している。



上のグラフから分かるように、全項目について肯定的なものが多く、「できた」「ややできた」を合わせると、「友達の作文」が約98%、「自分で作文」が約88%、「教員の添削」が100%と高い割合となった。特に、友達や教員が深い認識を導く上で大きな刺激となっていることが分かり、対話的やり取りが効果的に「深い学び」につながったと言える。

次に、二項目（①級友が書いたもの、②自分が書くこと）について生徒たちが考えたことを自由記述させたものから、数値では見えない生徒の生の声を汲み取りたい。

① 「友達の作文」について

○いろんな角度からのアプローチがみられて楽しかったです。この文章は複雑だし、具体がみつげられいけれど、皆のおかげでかみくだけたような気がします。

○自分と異なる考えを持つ人の意見を見たり、こんなにハイレベルな意見が書けるのかと感じ、感動し

たり刺激になった。

② 「自分で作文すること」について

○文章中の言葉をそのまま使うのではなく、それを理解したうえで、一歩踏み込んだ説明にすることで、より深まった分かりやすい文章が書けると思った。

○一・二年の時とは違って自分の分かっていない点
が明白となり授業での理解も深まった。

上記以外にも、多くの生徒がアンケートにびっしりと書き込みをしていたが、ほとんどは今回の取組を肯定的に捉えたものだった。対話を通して級友からよい刺激を受けるとともに、自分と異なる多様な意見や考え方を知ることによって、知の幅を広げ、教材そのものの読みも深めることができたようだ。

また、多くの生徒が苦手意識を持っていた作文だが、級友の作文を目にし、それをもとにやり取りすることによって、作文のこつがつかめてきたと感じている生徒は多いようだ。単に作文するだけではなく、作文を通じた対話によって、より主体的な取組がなされたことが書く力を付ける上で大きかったと考える。

また、実際に添削する中で、多くの生徒が質の高い作文を書いており、「書く力」「読む力」の伸長が実感された。アンケート結果や実際に積極的に授業に取り組む生徒たちの様子からも、今回の研究実践が、三つの研究仮説の正しさを裏付けるものとなったと考える。

(2) 今後の課題

今回の取組は、「アクティブ・ラーニング」としての「主体的」「対話的」「深い学び」を意識したが、その成否のポイントとして「生徒の頭がアクティブに働いたか」ということがある。だが、それは可視化が難しいものだけに、今後評価を工夫していく必要がある。

また、大きな問題として、次期学習指導要領で求められるだろう「志高く未来を創り出していくために必要な資質・能力」の育成と、今回の取組がいかに結び付くか、また国語科として他にはどのようなアプローチが可能か、注視しつつ研究してみたい。

そういった大局観を持ちつつ、一方で今回の手法を他の教材にも応用してみるなど、足元の一つ一つの授業の工夫改善を重ねていきたいと考えている。

●参考文献:文部科学省中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」平成28年12月21日付



児童の成長を促す学校づくり

—開発的生徒指導における組織的取り組みに関する一考察—

津山市立高野小学校 教諭 池上直紀

I はじめに

生徒指導の基本書である「生徒指導の手引」が約32年の時を経て、平成22年3月に「生徒指導提要」として改訂された。ここには、従来の積極的生徒指導と消極的生徒指導という枠組みからさらに、「児童の成長を促す生徒指導、予防的生徒指導、課題解決的生徒指導」という文言が明示された。(文部科学省 2010)

倉本(2007)は成長を促す生徒指導を学校組織を改善していく考えから開発的生徒指導と言い換え、「生徒のよさを日常の教育活動から発見し、自覚させ、引き伸ばしていく生徒指導」としている。そして、課題解決的生徒指導を対処的生徒指導と言い換え、開発的生徒指導を「対処的生徒指導や予防的生徒指導を連動させながら、生徒の良さを伸ばす生徒指導のあり方」としている。よって、これら3つの生徒指導は別個のものではなく、連動し取り組むことによってその効果が生まれる。

学校現場にいると、生徒指導とは児童の問題行動等への対処的生徒指導や問題が発生する前に予防する予防的生徒指導を彷彿してしまう。しかし、生徒指導の目指す「児童の自己指導能力の育成」を考えれば、それと同時にすべての児童がさらなる人間的成長を果たしていくための開発的生徒指導を行う必要がある。

そこで、本論文では開発的生徒指導における組織的取り組みでの本校生徒指導部の役割について考察する。

II 主題設定の理由

本校は全校児童489人、1学年はほぼ3学級の大規模校である。いわゆる「荒れた学校」であったため、生徒指導と言えば、「嫌なもの」「苦しいもの」という消極的なイメージが先行していた。つまり、本校での生徒指導は、問題行動等への対処的生徒指導とその予防的生徒指導に終始していたのである。そこには、すべての児童の成長を促す視点はあまり意識されていなかった。

そこで、年度当初に児童とのより良い人間関係を築き、成長を促す開発的生徒指導を各学級だけでなく、

継続的に学校全体で行う必要があると実感した。そのことは、問題行動そのものを減少させ児童のより良い成長を後押しすると考えたからである。

諸富(2013)は「生徒指導担当者の主な役割の一つに学校・学年・学級にふさわしい生徒指導プログラムを作成し実施していくリーダーとなることが求められる。そのためには、正確なアセスメントに基づいたグループアプローチがより有効である。」と指摘している。

したがって、生徒指導機能の充実のために、アセスメントとしての組織改編と開発的生徒指導を組織的に取り組むことが必要と考え、本研究を行うことにした。

III 研究仮説

【研究仮説①】

校務分掌において、生徒指導機能の充実のために、組織改編を行う。そうすることで、より効果的な児童の現状分析・課題把握ができるであろう。

【研究仮説②】

現状分析・課題把握を基に、全校児童のさらなる人間的成長のために開発的生徒指導を計画し組織的に取り組む。そうすることで、学校は互いを尊重し安心感のある居心地の良い場となるであろう。

IV 研究内容

本研究は、本校児童全員を対象とする。生徒指導部を中心に児童の現状分析・課題把握をする。それらを基に、開発的生徒指導を計画し組織的に取り組む。

1 研究仮説①「組織改編」について

学校づくりの基盤である生徒指導機能を教育課程内外でより効果的に実行するには、正確な現状分析・課題把握が必要となる。そのためには、生徒指導担当者の一側面的な視点だけではなく、より多角的な視点で児童のあらゆる情報を一元的に集めることが求められる。

そこで、生徒指導部内に昨年度まで別々であった特別支援教育部や児童支援部などを位置づけた。そうすることで、従来の低・中・高学年などの教職員で編成

されていた生徒指導部に、特別支援コーディネーターや養護教諭、児童支援部に所属していたスクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカー、登校支援員なども加わることとなった。

月に一度行う生徒指導部会の中で情報収集し、現状分析・課題把握を行う中で分かったことがある。それは、今までの対処的・予防的生徒指導に注力することで問題行動や不登校児童数は少し減少した。しかし、学校全体の児童の生活満足度は大きく高まることはなかったということである。つまり、児童にとって学校は安全であっても安心がなかったのである。このことがこの学校の児童が抱える大きな課題のように思えた。

この課題について話し合っていると、児童が抱える潜在的課題が明らかになってきた。家庭状況は、生活保護受給者などの低所得者層やひとり親が非常に多い状況であった（生活困窮4人に1人、ひとり親6人に1人）。これらは、親が児童にかかわる時間を減少させ、愛情を注ぐ妨げになっていた。つまり、児童の潜在的課題とは、「自己有用感の低さ」であった。

幼少期の欲求として「無条件の愛情欲求」や「園や学校、家族や仲間から存在を認められたい欲求」がある。これらを満たすことは、児童がより良い成長をするために不可欠なことである。まず、私たちが本当にやるべきことは、児童の存在そのものを認めることであった。

2 研究仮説②「開発的生徒指導」について

部会で明らかとなった潜在的課題を基に、児童が毎日当たり前に行っていることに目をつけた。それは、「挨拶や返事、後片付け」である。これらの基本的な生活習慣の確立は、児童の自主性や自律性をはぐくむという生徒指導を進めていくために不可欠なことである（文部科学省 2010）とされている。したがって、全校児童を対象とした自己有用感を高めるための取り組みを検討し組織的に取り組んだ。

(1) 「あいさつ名人」の取り組み

人間関係が希薄な現代社会において、挨拶とはコミュニケーションの基本である。児童が自分から大きな声で挨拶をする姿は、見ていてとても気持ちがいいものである。

この取り組みは、児童会が企画し教職員と児童が協力して取り組んでいる。（資料①）毎朝、児童玄関前で教職員や児童会の児童が笑顔で挨拶をして登校してくる児童を出迎える。教職員も児童も、自分から

大きな声で元気よく挨拶をする。そしてその中で、その日に特に頑張っていた児童を「あいさつ名人」として表彰する。昼の全校放送では、放送委員会の児童が手作りの賞状で表彰をする。（資料②）選ばれた児童も嬉しそうに全校に向けて感想を言う。また、表彰される児童宛に綴ったメッセージの内容が放送され、その後校内に掲示される。（資料③）このように、全校への放送や掲示は、児童の自己有用感の高まりの一助となっていることは言うまでもない。

児童は毎日当たり前に行っている挨拶を認められることで自信をつけ、以前よりも笑顔で気持ちの良い声が学校全体に響きわたっている。また、全校掲示のメッセージを何度も見に行き、嬉しそうな笑みをこぼしている姿がなんともほほえましい。

この「あいさつ名人」の取り組みは、更なる広がりをみせ、他の委員会と共同して「スーパーあいさつ名人」や「あいさつの旗」などの児童の主体的なアイデアあふれる新たな取り組みも生まれた。また、学校内だけでなく、地域へも「あいさつの輪」が広がっている。

(2) 「プロ掃除士」の取り組み

掃除とは、まさに整理整頓や後片付けであり、大切な指導の時間である。以前の掃除時間と言えば、多くの児童はおしゃべりや遊びの時間となり、まじめに取り組むことができていない状態であった。そういう状



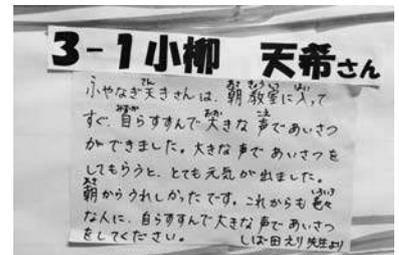
【資料①児童会の児童による挨拶運動の様子】



【資料②昼の全校放送で表彰される様子】



【資料③「あいさつ名人」全校掲示】



【資料④毎日綴る手書きのメッセージ】

況なので、問題行動等が起こりやすい時間でもあった。そして、教職員の中にも指導の温度差があり、学級ごとの取り組みの差が明らかであった。

そこでまず、指導の考え方を教職員で共通理解した。その中で、掃除指導は「だまって」「いっしょうけんめい」「じかんいっぱい」取り組むことにより、児童に「我慢する心」や「工夫する心」、「協力する心」を育てる場として、全教職員で指導することを再確認した。その後、全校朝会や学級活動などの時間を通じてそのことを全校児童に指導していった。児童が分かりやすいよう、指導のポイントは頭文字をとって、「掃除はだいじ」として指導を行った。(資料⑤) また、



【資料⑤「だいじ」を意識した掃除の様子】

掃除時間の終わりには同じ掃除場所の児童が集まり、児童相互間で「そうじ反省会」を行うことで児童の主眼的な参画意識を高めた。(資料⑥)



【資料⑥そうじ反省会の様子】

当初は指導がうまくいくばかりではなかったが、少しずつ「だいじ」を意識して掃除を行うことができるようになっていった。指導の中では特に、問題行動を繰り返す児童たちに追従している層を引き上げる取り組みとして、教職員が頑張っている児童を「プロ掃除士」として表彰する取り組みも行った。



【資料⑦「プロ掃除士」全校掲示】



【資料⑧毎日綴る手書きのメッセージ】

この取り組みも「あいさつ名人」の取り組みと同様に児童会が参画しており、昼の全校放送や表彰状、全校掲示などに取り組んでいる。(資料⑦⑧) このことが、児童のより良い成長を後押しし

ていることは言うまでもない。

(3) 「くつそろえNo. 1・かさそろえNo. 1」の取り組み

掃除同様、靴そろえとは整頓や後片付けであり、児童が一日に何度も行うことである。靴を揃えることは心を揃えることでもあり、基本的な生活習慣の一つである。しかし、以前は学校全体での指導を行えておらず、下駄箱は整頓されていない状況であった。

そこでまず、教職員でよい靴の揃え方とは、「靴のかかとが靴入れの取り出し口の端、真ん中で整っていることである」という指導の考え方を共通理解した。これを児童に分かりやすいように、靴そろえは「かかと・はし・まんなか」で整えると指導するようにした。そして、道徳や学級活動の時間を通して、全校児童に指導をしていった。その中で全体の取り組みとして、クラス単位で靴がきれいに整頓されているクラスを「くつそろえNo. 1」クラスとして毎日の昼の放送や月に一度ある全校朝会の場で表彰する取り組みを行った。

はじめは当番活動などを通じて児童に意識付けをしていったが、少しずつ下駄箱全体がきれいに整頓されるようになった。



【資料⑨整頓された下駄箱の様子】

(資料⑨) さらに、児童の中には自分の靴を整えるだけでなく、周りの友だちの靴もきれいに整頓する姿が

見られるようになってきた。(資料⑩) また、靴だけでなく傘置き場の傘も児童からきれいに整頓する姿が見られるようになり、それに伴って「かさそろえNo. 1」の取り組みも行った。



【資料⑩友だちの靴をきれいに整頓している様子】

これらの取り組みも「あいさつ名人」や「プロ掃除士」の取り組みと同様に児童会が放送や掲示を通じて参画しており、より良い自主的な成長を促している。

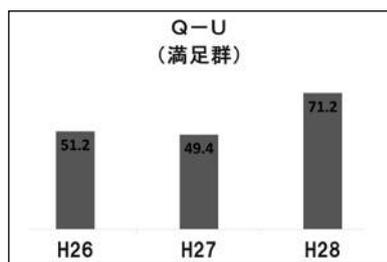
V 研究の成果

【仮説①「組織改編」の検証】

校務分掌において、生徒指導機能の充実のために組織改編を行うことで、より多角的な視点から児童の現状分析・課題把握を行うことができた。特に、従来の教職員による教育的視点からだけではなく、チーム学校として専門職であるスクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーなどの心理的・福祉的視点から児童の課題を把握できた点が大きいと考える。このことが、対処的生徒指導や予防的生徒指導はもちろんのこと、全校児童を対象とした開発的生徒指導をより充実させたことは言うまでもない。したがって、この組織改編は非常に有効であったといえる。

【仮説②「開発的生徒指導」の検証】

児童が学校生活に適応できているかどうかの指標として、Q-U（楽しい学校生活を送るためのアンケート）がある。この調査にて、学校全体の学級満足度尺度の満足群の割合は、平成26年度51.2%、平成27年度49.4%だったのに対し、開発的生徒指導を組織的に取り組んだ平成28年度は71.2%と大きく増加した。（資料①）これは前年度比で44%も増加したことになる。実際に何が大きく



【資料①Q-U】

変わったのかを調べると、児童の承認得点が大きく高まっていたことが分かった。つまり、児童が自分は認められていると感じることができ、自己有用感が高まっていることが分かる。

また、児童の自己有用感が高まった成果として、不登校児童数も前年度比で30%も減少した。新規不登校児童数に関しては0人であった。実際に、児童の表情も目に見えて明るく活発なものとなっていった。それは、学校生活だけにとどまらず、学校外でも表れるようになり、保護者や地域住民より電話や手紙などの感謝の連絡が届くようになった。そして、地域からも挨拶ボランティアという形で学校が行っている挨拶運動に参加してくれ



【資料②膝あて贈呈式の様子】

たり、掃除で使う手作りの膝あてを児童全員分贈呈してくれたりした。（資料②）これらのことが、児童のより良い成長を後押ししていることは言うまでもない。

VI おわりに

生徒指導はよく、児童の問題行動等への対処的生徒指導や事前に問題を起こしそうな児童に個別に指導・支援を行っていく予防的生徒指導であると考えられている。確かにこれらも生徒指導の大切な機能の一つであるし、児童の安全のために適切に行わなければならないことである。しかし、生徒指導は一部の児童だけを対象に治療的に行うものではない。私たちはすべての児童を対象に、教育的に生徒指導を行うべきである。つまり、対処的・予防的生徒指導と同時に、児童の成長を促す開発的生徒指導を行う必要がある。

他の生徒指導もそうであるように、開発的生徒指導を組織的に取り組むことは教職員間の共通理解が必要不可欠である。しかし、この共通理解が難しい。なぜならば、教職員一人一人の生徒指導に対する「考え方」が違うからである。考え方が違えば当然、指導方法も異なる。そうなれば、組織として一貫性のある指導が行えず、先生不信・学校不信へとつながる。したがって、生徒指導部がリーダーシップをとり同僚性・協働性を基に、生徒指導に対する考え方の共通理解を常時図っていく必要がある。

学校は児童が社会に向けて舵をとるために、彼らに知識を与え、精神を鍛える場である。そのために、荒れに苦しむすべての児童に役立ってこそ、本物の学校であるという思いを持ち続け、今後もさらに研究実践を進めていきたい。

参考文献

- ・倉本哲男編（2007）『開発的生徒指導論と学校マネジメント』ふくろう出版。
- ・諸富祥彦（2013）『新しい生徒指導の手引き：すぐに使える「成長を促す指導」「予防的な指導」「課題解決的な指導」の具体的な進め方』図書文化。
- ・文部科学省（2010）『生徒指導提要』教育図書。



「向陽プライド」を合い言葉に、 自己肯定感の向上を目指した学校経営

—体験学習を中心とした「向陽探険隊」や、
ボランティア活動に取り組んで—

津山市立向陽小学校 校長 下山 朋子

1 はじめに

向陽小学区は、津山市の西部にあり、古くは4～5世紀の美和山古墳群や高野神社、立石家、土居家など、歴史と文化に囲まれた地域である。

一昨年、向陽小学校に赴任し、最初に感じたのは、児童の自己肯定感の低さである。意欲はあるが、自分に自信が無く、「どうせ…」と長続きしない子どもが多かった。

そこで、この恵まれた自然や遺跡、立地を生かし、体験学習で、成功体験を重ねさせ、児童に自信を付けさせようと、「向陽探険隊」を立ち上げた。それは、子どもたちに自分のふるさとしてある向陽学区を知り、誇りに思い、学区を愛する人に育ってほしいと願ったからである。そして子どもたちの自己肯定感をなんとしても高め、自信を持って生きる児童を育成するために、校長としてどう取り組んできたかをまとめた。

2 研究の概要

(1) 子どもの体験活動の実態に関する研究

体験学習の重要性を改めて認識したのは、国立青少年教育振興機構の平成22年度の報告書を読んだときである。報告書によると、「子どもの頃の様々な体験が豊富な人ほど、大人になってからのやる気や生きがい、モラルや人間関係能力などの資質・能力が高い傾向にある。」と述べられている。

このことから、向陽小の恵まれた自然環境や立地を生かして体験学習を強化することを考え、「向陽探険隊」を組織していった。

(2) 向陽探険隊の誕生

前任校で、小学校長と兼務の幼稚園長をしていた私は、体験活動を「探険」ととらえ、幼稚園の「遊び」の楽しさを小学校でも継続・発展させていこうと考えた。当初は体験活動だけを想定していたが、教科学習も「知的探険」ととらえるとすべての学習を「探険」でくることができた。また、教師集団にも授業を魅

力あるものにするため教材研究を「教師の探険」と位置づけ、学校全体で探険を楽しむことを提案した。

(3) 向陽探険隊の概要

① 1年生

- ・学校探険
- ・昔遊び（敬老会の方々と）
- ・春見つけ・秋見つけ（美和山古墳群）



- ・保幼小遊び交流会
- ・じぶんたんけん からだを知ろう

② 2年生

- ・田植え・稲刈り（地域の田んぼを借りて）
- ・さつまいもの栽培と収穫
- ・やさいを育てよう
- ・おとうふ屋さんたんけん
- ・じぶんたんけん（いのちのはじまり）

③ 3年生

- ・学区探険・学区地図づくり
- ・お店探険（スーパーマーケット）
- ・車いす体験・アイマスク体験
- ・昔の暮らし体験（七輪）
- ・自分探険（大切なからだところ）

④ 4年生

- ・地域探険（小田中浄水場・嵯峨井堰・消防署
クリーンセンター）
- ・立石家見学（地域の先人・立石岐学習）
- ・自分探険（変わっていくからだ）

⑤ 5年生

- ・海探険（海事研修・境港見学）
- ・福祉施設訪問・手話体験
- ・保・幼・小交流（来年度の1年6年交流）
- ・自分探険（からだところの変化）

⑥ 6年生

- ・ヒロシマ平和発信プロジェクト（修学旅行）
- ・向陽歴史教室



- ・地域探険（津山郷土資料館・洋学資料館見学）
- ・自分探険（生命の誕生・共に生きる）

こうして出発した「向陽探険隊」は、今まで向陽小で学習してきたことが基本である。学習してきたことを縦に並べ、6年間を通して「探険」としてつないでみるとたくさんの体験活動を学び、学区の地域や歴史を知ることができたことに気づかされた。学区の素晴らしさをたくさん知ることが自分たちの自己肯定感の向上にもつながってきた。

(4) 向陽プライドの誕生

向陽小学校に赴任し、初めての1学期始業式で驚かされたのは、体育館での式の間中私語がやまず、前で話をしている教員の声が聞こえなかったことだった。

転勤してきた教職員は、「これは、すごいところに来てしまった。」と、一様に驚いた。

私は、まず、全校集会が静かにできる方策を考えた。

- ①担任が、今までの慣例の校長の横に並ぶことを廃止し、クラスに入って注意をする。
- ②比較的静かにできる学年が先に体育館に入り、静かに待っている様子を後から来た学年に見せる。
- ③教員の号令で礼をするのではなく、前で話をする人に合わせて礼をする。（前を見ていなければ礼ができない。）
- ④視覚優位の児童が多いので、話すだけでなく、話

の内容をプレゼンにしたり、絵や文字を見せながら話すようにする。全校朝の会なども生徒指導が毎回プレゼンを作って話をする。

そして、職員会議で職員に「プライドを持って、自分のクラスを話が聞ける集団にしていこう。」と呼びかけた。これが「向陽プライド」の始まりであった。

(5) 向陽プライドに向けた具体的な取組

「自分たちの学校を愛し、正しい行いをして自信を持ち、良い意味のプライドを持っていこう」ということの総称を、本校では「向陽プライド」と呼ぶようになった。向陽プライド構築に向けてまず動いたのが児童会である。

① 児童会 あいさつがんばり隊の活動

以前から毎月10日にはPTAあいさつ運動を行ってきた。保護者と教職員が児童玄関前に並び、「おはよう」と声を掛けるのであるが、子どもたちの声になかなか大きくならなかった。

そこで、児童自らが主体としてあいさつ運動を試みたらどうかと児童会担当からアイデアが出て始まったのが「あいさつがんばり隊」である。

まず、児童会のトレードマークとなる「ゆるキャラ」を全校児童に募集し、選ばれた「向テルくん」の旗を児童会で作った。その旗を児童会メンバーが掲げ、その周りには、ボランティアとして参加したい、どの学年の児童でも「あいさつがんばり隊」に参加できることにして、あいさつ運動を始めた。こうして毎月10日のPTAあいさつ運動の時間には、子どもたちがたくさん集まって自主的にあいさつ運動をする姿が見られるようになり、全校に広がっていった。



あいさつ運動に参加してくださる地域の方や駐在所のお巡りさん、青少年育成センター、民生委員や津山っ子を育てる会のみなさんが、「向陽小学校の子どもたちが、がんばってるなあ。」とか、「あいさつの声が大きくなったなあ。」と褒めてくださるようになったことも意欲付けになって参加者がどんどん増えていった。おかげで、日々のあいさつも、しっかりとできる児童が増えていった。

そのほか、児童会主催で、自分たちのクラスの自慢を発表する「向陽プライド・じまん大会」や3年生から6年生の上級生のクラスでお店を出し低学年を楽しませたり自分たちも交代でお店を回ったりする「向陽フェスティバル」も「向陽プライド」の向上に寄与している。

② 地域清掃ボランティア

児童会が次の仕掛けとして、4年生から6年生まで呼びかけ、地域清掃ボランティアを始めた。4年生は学校の北に広がる国の指定遺跡「美和山古墳」、5年生が東側の「二宮公民館」、6年生が南側の「高野神社」をそれぞれ掃除した。たくさんのゴミや落ち葉が集まり、きれいになったことで、子どもたちが満足したところへ、二宮公民館長さんや、高野神社の神主さんから感謝状をいただき、児童の向陽プライドが高まった。



③ 児童会の募金活動

熊本大地震が起こってすぐ、児童会が募金活動を始めた。参観日には各教室や廊下にも児童会のメンバーが出て、保護者にも協力を呼びかけた。

そのほか「ユニセフ募金」にも取り組み、自分たちだけでなく国内外の人たちにも気持ちを向けられるようになってきたことに成長を感じた。

④ 向陽プライド発見カード

本校の児童の自己肯定感が低いのは、褒められたり、認められることの少なさにあるのではないかと分析し、全校あげての良いことを見つけ「はっけん！向陽プライド」を始めることにした。教職員や児童自身が良いことをしている児童のことをカードに書いて箱に入れ、給食時間に生徒指導担当が放送で読み上げることにした。効果は抜群で、カードを読んでもらいたい児童が、学校中で掃除や給食の手伝いなどの善行をたくさんするようになった。教頭のところに落ち葉掃きや雪かきなどのボランティアが多数集まることにもなった。現在も、ボランティアは続いている。それも学級で弱い立場の児童や、さみしい児童が多い。認めてもらい、褒めてもらえる上に、居場所がある。教頭先生の周りにはいじめっ子も寄ってこない。子どもはどの子も認められることと、安心していられる居場所を求めているのである。

⑤ チャイムスタート週間

学年	1組	2組	3組	4組	5組	6組
1年	100.0					
2年	78.5	91.8				
3年	100.0					
4年	87.9					
5年	70.0	70.3				
6年	100.0					
6年2組		90.8				

学習に対する規範意識向上を狙って、チャイムスタート週間をもうけている。チャイム着席をして、授業がスムーズに始められることや、次の授業の準備を行うことにもつなげている。5月の実施では全校90パーセントを超えていて、花マルチタイム（遊び時間）をもらうことができた。

(6) 学力向上に向けての取組

自己肯定感が低くなる大きな要因の1つは、学力である。学習に不安がある子は自尊感情も育ちにくいと考え、本校で基礎学力向上に向けて行ったことを次に述べたい。

① 各種学力調査結果の振り返りを個別指導で

テストの後、間違えたところを分かるようにすることが重要と考え、本校では6年生が毎年4月に行っている全国学力・学習状況調査の結果が返ってくると、個別指導をして返すようにした。具体的には教務と生徒指導担当が朝自習の時間に一人ずつ別室に呼び、間違えたところを解説しながら一緒に解いていった。時間はかかるが、この「一手間」が「分かる喜び」を増やし、向陽プライドにつながり、基礎学力の定着を生むと考えている。

② 全校で「〇〇ウィーク」の取組

基礎学力を付けて中学校に進学させたい、というのはどの小学校でも同じ思いであろう。中学校からも「九九だけは覚えてきてほしい」との要望があった。そこで、昨年度は「全校100マス計算」の週をもうけ、全校で九九の100マス計算を行った。(1年生は足し算・引き算)

また、九九の苦手な児童を調べ、校長が九九のCDを作って配布したり、階段に九九カードを張って視覚に訴えたりした。

③ 宿題忘れ0週間の取組

家庭学習の強化のため、学期始めには「宿題忘れ0週間」の取組を行っている。全校の宿題忘れが一定のパーセント以内なら翌週の水曜日が掃除無しで昼休みが遊べる「花マルチタイム」になる「人参作戦」である。そして、みんなのために頑張ることも目指している。

④ 自主学習ノートを校内掲示で賞揚

家庭学習を頑張らせるとともに、知的好奇心を育てることも目指している。頑張っている自主学習ノートを校内掲示し、向陽プライドを賞揚するとともに、どんな自主学習があるか知ることができるように掲示している。

3 研究の成果と課題

(1) 成果

全校集会を静かに開き、しっかり話を聞く児童を育てたいという想いから出発した「向陽プライド」の取組は、現在功を奏し、静かな中で会を開くことができている。本校で毎年開催している中学校の吹奏楽部を招いての音楽会でも、中学校の顧問の先生が、ここ数年に比べても、音楽を聴く姿勢がとても良くなっていてびっくりした、と話してくださった。

この表は、毎年6年生に行っている全国学力・学習

状況調査の児童質問紙による自己肯定感に関する質問の回答の抜粋である。同じ児童ではないので簡単には比較できないところもあるが、平成27年度よりも「向陽プライド」を合い言葉に指導してきた平成28年度の児童の方が自己肯定感は高まってきている。

質問事項	H27年度	H28年度
ものごとを最後までやり遂げてうれしかったことがありますか	はい 60.6 %	はい 73.9 %
自分にはよいところがあると思いますか	31.3 %	32.6 %
将来の夢や目標を持っていますか	70.8 %	76.1 %

地域の方も児童の成長は分かってくださっており、「あいさつがんばり隊」や「地域清掃ボランティア」の活動が認められ、駐在所の推薦で、津山警察署長から児童会が表彰された。また、岡山県下の小学生ボランティア活動等を表彰する、第41回山陽新聞桃太郎賞も受賞した。また、児童の体験学習や地域学習をまとめた冊子を作り、学校から家庭や地域に発信した。

(2) 課題

自己肯定感が低くなる大きな要因の1つである学力ではここ2年間、国語Aは全国平均に比べ数ポイント上回り、算数Bは数ポイント下回るという結果であった。学力がもう少し上がれば自信も付き、自己肯定感も上がると思われるので、引き続き学力向上に努めていきたい。

4 おわりに

子どもたちは、成功体験を重ねたり、大人に認めってもらったり褒めてもらったりすることによって自己肯定感を育てていく。そのことを、この「向陽プライド」を合い言葉にする取組を行うことで改めて感じている。子どもは一人では成長できない。仲間と、そして支えてくれる人の間で育っていくのである。今後もいろいろな体験活動で失敗や成功体験を重ねさせ、本校の児童が自信を持って成長し、「向陽プライド」を持てるよう手立てを積み重ねていきたい。



「ふるさと回帰」を実現するプログラムの 創造はいかにあるべきか

—自校の歴史を五感で学び、それを発信する実践を通して—

岡山県立邑久高等学校 教諭 田 辺 大 蔵

1 はじめに

教育史をひもとくまでもなく、我が国には連綿と連なる教育への熱い思いがある。しかし昨今、数値だの効率だのといった結果主義・成果主義的な風潮がこの教育界にも蔓延している。現在の学校も、かつては地域の大人たちの熱い思いが具現化した場所であったはずである。それを子どもたちに学習させ、今様の目指すべき教育目標に落とし込めたら、地域の熱い思いに子どもたちが触れ、自校で学ぶ喜びを知ることによってアイデンティティ確立につながるのではないかと考えた。そしてさらに、多くの自治体が抱えている人口流出の問題を解決する糸口になるのではないかと考えた。

2 研究の概要

昨年の2016年12月28日、地元紙である山陽新聞に、新規特集「Lの時代へ」の連載が始まるとの社告が掲載された。そこには、東京の一極集中と地方の衰退、少子高齢化がもたらす歪み、そして健全な持続可能な社会への是正の方策を考えると記されていた。

地域衰退の兆しは十数年前から感じていた。そこで教科書を離れて生徒たちと学校を飛び出し、地域とともにそれに抗う取り組みを実践してきた。

地域に出ると、そこには数多くの課題が見つかった。生徒たちはそれらに実際に触れることで、解決策を模索し始めた。その実践の軌跡をまとめ、共通項を発見できれば、学校も地域も持続可能となるのではないかと考えた。そこで、かつての実践をまとめ、現在進めている邑久高校での取り組みを整理した。

3 二つの学校での取組事例

旧備前高校に赴任した年、生徒課として、毎朝、バケツと火バサミを持って学校周辺を歩いて回った。生徒が捨てていった吸い殻を集めて回るのである。その際、地域の人々と挨拶し、言葉を交わすうち、あることに気づいた。「高校は小中学校とは異なり、地元以外から登校してくる生徒も多い。よって、地域と生徒

とはお互いに接点をもたず、ただ同じ場を一時的に共有しているにすぎない」ということを。地域からすれば高校生の多くは、顔の見えない、怖いよそ者の若者なのである。しかし、実際は顔も名前もある生徒たちである。そこで、高校生が顔をもつ存在として地域と交流することはできないかと考えた。

備前高校は再編整備され、備前緑陽高校となった。新入生も好奇心旺盛で、挑戦することを好む傾向にあった。その一方、地元の片上商店街は不振に喘いでいた。そこで、高校生たちが商店街に出て行くことで、彼らのエネルギーを拡散したいと思い立ち、ラジオ局開設を企画し、放送やチャリティバザー等を展開した。

地元商店街にあるNPO法人「片上まちづくり」の支援をとりつけ、空き店舗を借り、片付け・清掃から始めた。そして高校生たちが各商店を訪ね、バザーの商品提供を依頼したり、ラジオ局のオリジナルステッカーを貼ってもらったりした。クリスマス・イブには「緑陽キャンパスラジオ」を開局し、クリスマス特別放送を行った。

備前市長による開局宣言に続き、高校生たちが空き店舗のスタジオからクリスマスソングを放送した。新聞各社のみならず、RSKラジオ

の取材も入り、同時生放送を実現した。

この経験を通して、地元の問題を肌で感じる事ができた。その後も地域で高校生が力を発揮し、持続的に関わるようになった。これを契機に地域の人々の意識も大きく変わった。卒業式には、生徒一人ひとりにコサージュをプレゼントしてくれるまでになった。

次に赴任した和気閑谷高校は、「閑谷学校」をその



山陽新聞 (2007年12月25日)

母体とする、創立340年を迎える超伝統校であった。

しかし、閑谷学校との関わりは、新入生の宿泊訓練の場、教員が進行する閑谷学校の祭事「^{せきさい}積菜」の場のみであった。閑谷学校は藩主池田光政によって作られた日本最古の庶民学校であるが、この国宝が「自分たちの学校」と感じる企画はないかと考えた。そこで、閑谷学校の観光ガイドを、その流れをくむ和気閑谷高校の生徒たち自身によって行う企画を立ち上げた。

当初、生徒たちは閑谷学校職員の案内の様子を見学し、部分的に建物を案内することからはじめた。そして、順次ガイド内容を広げていき、最終的には閑谷学校全体をガイドすることができるようにしていった。

この活動には、生徒が観光客に直接対面し、客の反応を見ながら臨機応変に取り組む必要がある。異年齢の人々と関わり、自校の特徴を解説する経験は、生徒たち自身の見聞を広めるのみならず、コミュニケーション能力を中心に、人間関係形成能力を伸張させた。



山陽新聞 (2013年12月22日)

また、映像作品を作成し、動画投稿サイト You Tubeへアップロードし、世界に向けて発信するタイプのガイドもあわせて実践した。生徒が資料館館長に閑谷学校の建物の意匠をインタビューする内容である。

これはネット上に公開するので、不特定多数の視聴者に配慮し、注意深く作成した。また完成作品から逆算して、使用する写真を撮ったり構成や編集を計算したりして作成するので、計画的に取り組む力がついた。

これらの活動は、結果的にユネスコの目にとまり、「世界の四つの成功事例」として世界で紹介された。さらに、「歴史、文化、伝統」をキーワードに和気閑谷高校は2010年度ユネスコスクールに認定された。

その後、活動は生徒会のボランティア活動の軸となり、地域連携活動、探究学習、国際理解学習を組み込み、ESD世界大会への参画へと発展していった。



「世界の四つの成功事例」 ユネスコのホームページより

4 邑久高校での取組事例

(1) 研究の目的

現在の勤務校の邑久高校は、2016年度「おokayま創生高校パワーアップ事業」の指定を受けた。この指定により、いわゆる「地域学」の学習が始まった。一般入試倍率が近年1倍前後で推移しているという入口の問題と、国公立大学進学者が10名前後という出口の問題を打破せんがためであった。

前年度の地元瀬戸内市内の中学校からの邑久高校への進学率は約20%と、中学生に選ばれない傾向にあった。そしてそれは、多数の生徒が岡山市やその周辺へ流出していることを意味していた。

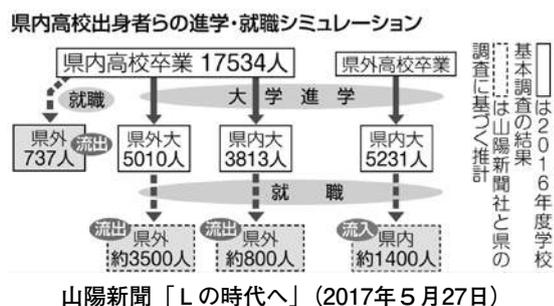
人口の東京一極集中の前段階として、岡山市街地に向けた生徒の流出を食い止めなければ、学校はもとより、地域が衰退、崩壊してしまう。そういった危機感から学校をあげて取り組むこととなった。

しかしこれは、一学校の話ではない。また、一地域の問題でもない。前述の山陽新聞の特集「Lの時代へ」は、若者流出の構図を明らかにした。大学進学者のうち57%が県外の大学に進み、その内70%が地元に戻らずに就職しているという。地域が存立し続けることができるためには、ブラックホールと化した東京から、まずこの人を取り戻さなければならない。さらには、モノ、金、情報等を取り戻さなくてはならない。政府は地方創成を声高に訴えるが、すべてを東京にスポイルされるこの構造は簡単には改善されない。

その改善のためには、一度は県外に出て学んだ後、地元に戻りたいと思わせる魅力を地域自体がもたなければならない。また、たとえ地元で生活できたとして

も、インターネット時代においては、金や情報がスポイルされることがあることを学ばなければならない。

そのためにこそ、地域の産業や町づくりについて学ぶ機会、いわゆる「地域学」が必要となる。そして、インターネットがもたらすその間の部分を学習する機会も必要となる。これらはまさに教育の分野である。そして一方、地元にはその思いを受けとめるために、工場誘致やハード整備だけではなくUターン就職の基盤づくりが求められる。



(2) 研究の内容

本格始動した今年度、学校全体のテーマが「地域で学ぶ、地域から学ぶ」と設定された。自らの興味関心や進路の志望分野に基づいて、地元瀬戸内市を中心とした課題解決に向けて協働的に活動する内容である。

私は、「邑久高校だからこそ」という課題を探し求めていた。ある日、ハンセン病療養所を調べていると、偶然そこに邑久高校の名前を見つけたのである。「岡山県立邑久高等学校 新良田教室」である。隔離されたハンセン病患者に対し、邑久高校が全国で唯一、希望の光を与えていた事実がそこにあったのである。

また、ハンセン病には多角的かつ複眼的な視点からの学びのアプローチも可能なことが分かった。医療、看護、福祉、法律、行政、教育、差別、人権、戦争、歴史、文学等のアプローチである。今年は生徒のニーズに応じて、「福祉」を中心に学ぶこととした。しかしこの福祉は他校にはない、独自の問題意識をもつことのできる分野へと成長することは間違いない。これこそ本校にふさわしい対象であることを確信した。

(3) 研究の実際

生徒たちには、「なぜハンセン病か」という視点がなかった。そこで座学による基礎的な知識の入手と一般の問題点の把握をしたのちに、フィールドワークを行い、人とふれあい、文献研究し、それらを生徒がお互いに共有することで深化させることとした。

① 見る

生徒たちはハンセン病という病名すら知らない。当然、ハンセン病が色々な課題を今なお抱えていることも知らない。そこで、テレビ番組の視聴から始めた。

NHKの番組「探険バクモン」という番組の「ハンセン病を知っていますか(2016年1月27日放送)」を導入教材として視聴させた。

当初は、有名なお笑い芸人が出演する番組を見ることができると喜んでしたが、国立療養所多磨全生園、国立ハンセン病資料館で真面目に知ろうとする彼らの姿と、そこに映し出された負の歴史の凄まじさを目にすることとなる。そして、生徒らは自己の無知に気づき、大きな問題がそこにあることを感じとるのである。

しかしまだ、それを自らの問題だとは感じていなかった。そこで、「ハンセン病」という言葉が4月から地元紙にどれほど掲載されたかを調べさせ、ひとつひとつの記事に目を通す作業を行った。このとき、「興味をもった内容」、「人に伝えたい内容」の箇所に線を引かせながら読ませた。さらに読後には、それぞれ線を引いた箇所を紹介し、感想を発表させた。同じ記事であっても、それぞれの視点や切り口があることや、また誰もが感じた共通の部分があることを共有した。

② 聞く

山陽新聞で2015年1月から始まった長期連載「語り継ぐハンセン病 瀬戸内3園から」が完結した。

その中心となって綿密に取材してきた阿部光希記者に来校願い、取材を通して感じたことや実際に見聞きしてきた問題点などを生徒たちに話してもらった。ここに来て、ようやく基礎的な知識と問題点を把握できた。



③ 歩く

夏期休業中の補習の午後にフィールドワークを行った。瀬戸内市にある二つの国立のハンセン病療養所を2日間に分けて訪問したのである。

1日目は、「邑久光明園」を訪ねた。資料展示室を見学し、元患者の自治会長から特別講話を伺った。ハンセン病の元患者に生徒たちはこのとき初めて対面

した。「園内の見学はできますか」という生徒の質問に対して、「案内しましょう」と即座に対応してくれ、監禁室や火葬場跡も見学でき



た。特に監禁室内には収容された方の思いが落書きとして残っており、生徒たちに強い衝撃を与えたようであった。

また2日目は長島愛生園を訪ねた。歴史館見学と、ビデオによる元患者の証言視聴、納骨堂や新良田教室跡地の訪問を行った。愛生園歴史館学芸員で、邑久高校の卒業生である田村氏にこのときの解説を依頼した。



山陽新聞 (2017年9月8日)

④ 考える

自らの問題意識がはっきりとしてきたので、今までの新聞からの情報収集に加え、文献研究を始めた。フィールドワークの後であるので、生徒たちは新聞や文献の活字に実体を感じられるようになってきていた。

そこで、断片的な知識やこれまでの経験を自らの研究目標に従ってまとめさせた。そして、他の生徒や教員、大学生に発表する機会をもち、質問や意見、感想を受け、次なる課題の発見をしていった。

⑤ つながる

文化祭では、各種展示資料を邑久光明園から借り受け、文化祭でハンセン病の実際を他の生徒に説明する機会を設けた。また独自制作の資料は、図書館においてハンセン病関連図書とともに展示することとした。

今後は、新良田教室の元教師や、長島愛生園で現在も生活している卒業生を招聘し、具体的な実際を聞き、さらに深めていく予定である。人とつながり自らを深め、人とつながり発信していく。文献研究とともに、

発信する機会を増やしていく中で、年明けの発表に向けて、さらに深化発展させていく予定である。

5 研究成果からの提言

地域の課題を発見し、解決策を模索する「地域学」は、思考力、判断力、表現力等を養い、価値観の違う他者と主体的に協働する力を身につけられるとして注目されている。その時、自校との関連という視点を持てば、独自の先駆的な取り組みとして探求することができるかと確信した。そして、地域の熱い思いを知ることによって、たとえ県外に出たとしても、Uターン就職をし、地域の担い手となれば、地域にとっても深刻な人口流出の課題を解決する糸口にもなりうる。魅力のある学びづくりは魅力ある人材づくりであるとともに、それが魅力ある地域づくりにつながるのである。

知識を上手く与えることや体験をさせること、人と接し、色々な意見や思いを聞くこと、さらには関連の書籍や新聞記事を継続的に追うことによって、少しずつ深めることができれば、生徒自身がその場にいる意味を知らず知らず考えるようになり、最終的にはアイデンティティの確立につながっていくのである。

高校生が企業や行政とともに机上の観光の資源開発や特産品づくりなどではなく、情緒的な言葉でいうならば、生徒自身の「ふるさとの記憶」をいかにつくるかである。そのとき有効になるのが、単なる課題解決学習ではなく、自校にしかできない、独自の、そして唯一の学習プログラムの確立である。

鮭の「母川回帰」には、太陽コンパスと嗅覚が重要であるという。母川特有のにおいに対する記憶を頼りに母川に回帰するのである。衛生的で利便性の高い生活は嗅覚を痩せ衰えさせ、より生活しやすいだけの土地を追い求めさせるようにする。生徒たちがふるさとへ愛着をもち、いずれは田園回帰できるよう、地域の記憶を五感に刷り込ませることが大切なのである。

いま、ハンセン病を研究しているこの生徒たちには、ある種の使命感のようなものを感じる。中間発表で、「私たちこそが、ハンセン病の正しい知識と、差別に関わる『負の歴史』をしっかりと学ぶ必要があります。二度とこのような過ちを繰り返さないように、語り継いでいかなければならないのです。そして、私たちの学校が、夢が詰まった希望の学校であったという誇りを忘れてはならないと思います。」と結んだ。最終発表が楽しみとなる折り返し点であった。



協同的な遊びを通して心豊かに生活する幼児の育成

—五感を使って感性を育む遊びを通して—

津山市立高田幼稚園 主査 影山 世都子

1 はじめに

今の子どもたちは、幼い時期から多くのメディアに触れ、機械のボタンやパネルを触って映像や物を動かし、電子音を聞いて遊ぶゲームやスマホ、テレビなどを介して遊ぶことが多くなってきている。岡山県北部の津山市は、山と川が周囲にあり、自然豊かな地域である。しかし「家庭での遊びアンケート」(図2)からも、戸外で遊んだり、友だちと触れ合ったりして遊ぶ機会や体験の少ない傾向があり、友だちとかかわる実感や人とつながる感覚のみにくい生活を送っている。そのため、五感を使っての直接体験が乏しく、幼稚園での経験が貴重であるという実態がある。また、食についても偏食、特に野菜は味わって食べるよりがんばって食べることを求められる傾向にあるように思う。このように、最近の幼児は、本来もっているはずの、人とかかわり“心と体で「遊ぶこと」・「食べること」=生きること”が弱くなっているように思う。

ところで、平成29年告示の幼稚園・保育所・認定こども園の新要領・指針の改訂ポイントとなる、小学校教育との円滑な接続を図るにあたり「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」として、「協同性」「言葉による伝えあい」「豊かな感性と表現」等が明記されている。(*「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」)これにより、生きる力の基礎を育むために、友だちとかかわる中での豊かな体験の重要性が、要領・指針間で関連づけられている。

また、先行研究に「*自然の中で遊ぶことは、色・形・臭い・手触り・音などの五感を鍛えてくれる。」(*高橋敏之・梶谷信之・尾上雅信 岡山大学教育学部研究集録第135号(2007)127-135「幼児期の子どもの遊びと学び」より)とあり、自然の中で五感を使った遊びの重要性を指摘している。

そこで、心豊かに生活する幼児の育成を研究主題に掲げ、感性教育に着目し、「*感情的側面の発達の促進と自己と対人関係の形成の基礎であり、幼児の生活である“遊び”」(*西久保禮造「幼児理解の心理学」

より)を通して、心と体を働かせ、五感を使って感性を育むことを指導の重点に、研究に取り組むことにした。そして、幼児が友だちと五感を使って幼稚園の身近な物的・人的環境で遊ぶ活動を取り入れることにした。さらに、友だちとかかわり、共通の目的をもって相談したり協力したりする「協同的な遊び」をすることにより、幼児自身、自分と他の人との違いを感じながら、「友だちと一緒に遊ぶって楽しい。」と、目を輝かせて生活する幼児の育成をめざして取り組んでいきたいと考えた。

2 研究の視点

(1) 研究主題の捉え方

「五感」とは、五官で感じる「触覚」「嗅覚」「味覚」「聴覚」「視覚」と“心で感じる”ことと捉えることにする。

(2) 研究の仮説

- ・心と体を動かして、身近な環境に友だちと一緒にいかかわって意欲的に遊ぶことにより、五感を通して豊かな感性を育むことができるであろう。
- ・幼稚園での友だちと一緒に考え、遊びを進めていく協同的な遊びを通して、感動を共有したり、感じた思いを友だちと話すことで感じ方が自分と友だちは違うことに気づいたりすることによって、豊かな心や人とかかわる力が育つであろう。

(3) 研究の構想図

<図1>



3 研究の内容

(1) 研究の方法

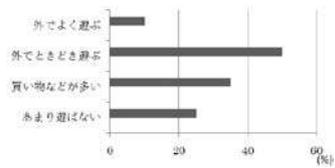
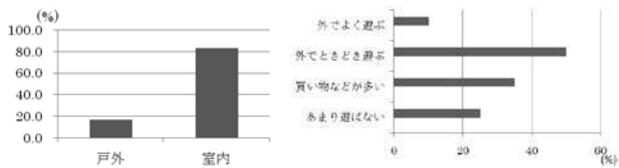
- ・家庭との連携の工夫として、「家庭での遊びアンケート」を行い、家庭での遊びの実態把握を行う。
- ・保育の中に感性を育む遊びを取り入れ、身近な物的・物的環境を生かし、“五感を使った体験”ができるように計画・実施する。

- ・小グループの友だちと一緒に、五感を使って遊ぶ活動をする。
- ・保育参加日に、保護者にも、幼児と共に五感を使った遊びを体験できるようにする。
- ・サツマイモの苗を植えたり、野菜の苗を幼児自身が選び、何ができるか楽しみに1人1鉢に植え栽培したりし、収穫したものをみんなで味わう体験をする。

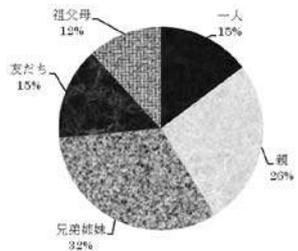
(2) 実践

○<図2>「家庭での遊びアンケート」から(全体数:20)

降園後、主にどこで遊んでいますか？



降園後、主に誰と遊んでいますか？(複数回答あり)



○“友だち だあれ”遊び(対象:4歳児 4・5月)

- ・目を瞑って動物の鳴き声だけで、誰かあてる遊び
- ・目を瞑って友だちにさわって、誰かあてる遊び

○“冷たいはどこ?”遊び(対象:4・5歳児 7月)

- ・暑い幼稚園の中で「冷たい」を探す遊び

○“いろいろ忍者散歩”遊び(事例1)

- ・二人でスティック繋ぎをして散歩①
- ・手を繋ぎ一人が目を瞑って散歩②



○“幼稚園探検遊び”(事例2)

- ・小グループで幼稚園の環境にある者・物を五感を使ってみつける遊び
- ・登園後すぐの、自ら選んだ遊びの時間に、幼児が自主的に友だちを誘い合い、小グループでみつけたい物をカードに記入して遊ぶように
- ・保育参加日に大人の“友だち”と一緒に(事例3)

事例1「いろいろ忍者散歩遊び」(対象:4歳児 6月)

①色スティックの両端を指1本で挟み散歩をする遊びをする。(教室に置いておいて、製作遊び以外の使い方を聞いてきた幼児と一緒に遊んだことから)

②クラス活動で二人組になり、一人は目を瞑ってもう一人がエスコートして歩く遊びをする。

<ねらい>

- ・共通の目的をもち、お互いを感じながら遊びを楽しむ。

<内容>

- ・友だちとの触れ合いを楽しみ、相手の動きを感じて遊ぶ。
- ・いろいろな感覚に気づき遊びを楽しむ。

<結果>

・スティックを落とさないという共通の目的をもち、普段是一緒に行動する友だちでない幼児とも、一緒に遊ぶ姿が見られるようになった。目を閉じてやってみる姿も見られた。視覚を使わないことで、より集中している表情でしており、少しでも長くできることを共に喜んでいた。

・友だちに手をひかれながら「明るいとかかかないところ(明るくない所)あった。」と、目を瞑っても、光を感じていた。繋いだ手の感触を「あったかかった。」「ちょっと冷たかった。」「ぴやんだった。」と感じたことを自分なりの言葉で表現し、みんなに伝えていた。

・朝登園してくる友だちの声だけで「あ、〇〇君来た!」と玄関に出迎えるようになり、気の合う男児・女児にかかわらず出迎えるようになっていった。

<事例1の考察>

- ・いろいろな“忍者散歩”をすることを通して、相手の動きを感じ、同じ目的をもって協力する楽しさを味わうことができた。
- ・普段一番使う視覚を使わない遊びを楽しみ、相手を気遣って遊ぶ姿が見られた。目を瞑ることで、より友だちの存在をお互いを感じているようであった。

事例2「幼稚園探検遊び」(対象:4・5歳児 10月)

<ねらい>

- ・友だちと一緒に五感を使って身近な環境に関わり、感触やにおいを楽しむ。
- ・友だちと共通の目的をもち、遊びを進める楽しさを味わう。

<内容>

・興味や関心をもって「物」や「人」にかかわって遊び、味わった感覚を言葉にして伝える。

<方法>

「幼稚園探検に行こうよ。」と、幼稚園の環境にある者・物の音の数で(例ウサギは3人)集まる遊びをし、集まった友だちと、園内の環境(葉、石、友だち、砂や泥など)を五感を使ってみつける遊びをした。初めは園児全員で行ったが、空欄の用紙を用意することで毎

日の自ら選ぶ遊びの時間に、気の合う友だちを誘って、どの内容にするかを考え、相談して遊ぶようになった。

<結果>

- ・マリーゴールドの葉を触っていた幼児が、「いい匂い。」と表現すると、同じグループの友だちは「臭い。」と自分の感覚で感じたことを伝え、それを見て、別のグループの幼児たちも試してみる姿が見られた。「ファブリーズの匂い。」と自身の経験から似た香りを表現する幼児もいた。感じたどの感覚も「いいね。」「おもしろいね。」と教師に認められ、満足した表情が見られ、楽しいという声が聞かれた。
- ・10月下旬で良い天気の日、友だちと一緒に考えた「あったかいを探そう」は、日に当たっていた黒い石が温かいということに気づき、友だちに知らせ、「ほんまじゃあ、あったかい。」と共感する様子が見られた。教師を誘い一緒にみつけたことを共感し楽しんだ。友だちや先生に承認してもらうことで、ワクワクしている様子がうかがえた。白い石は温かくないことにも気づき、触って比較してみる姿が見られた。また、友だちの手を引いて園内を探していたが、ふと友だちの手首の所が「あったかい」ということに気づき、目を見合せてニッコリする様子が見られた。
- ・登園するとすぐに友だちを誘い、「今日はべちょべちょ（を探そう）にしよう。」「ザラザラ探そう。」と相談し地図に書いて遊びを始める姿が見られた。また、友だちと話し合い「ぺらぺらおさがそう」と書いたり、「でんしゃがみえるところおさがそう」と字と線路と踏切を描いたりした地図をもって遊び、園内を探し楽しむ姿も見られた。

【幼稚園探検遊びの地図】



あったかい!



黒い石はあったかい。白い石はぬくくない。

事例3 「幼稚園探検遊び（保育参加日に）」

（対象：4・5歳児と保育参加の保護者 10月末）

<ねらい>

- ・友だち（大人と子ども）と一緒に遊びをする中で五感を使って感じたり、自分の思ったこと感じたことを伝えたりする楽しさを味わう。

- ・遊びをする中で、友だちと相談したり協力したりして遊びを進めていく楽しさを味わう。

<内容>

- ・身近な人や自然、物とかかわって、においや音などや感触を楽しんだり、素材その物の味や香りを味わったりする。
- ・遊びの中で感じたことや思ったことを友だちと話すことで、同じように感じたり違うように感じたりすることを知る。

<方法>

一緒にサツマイモ掘りをした後、サツマイモを食べ、大人が入った3～4人のグループで「幼稚園探検遊び」をした。くじで同じ色のカードを引いた者同士のグループの友だちと行った。

<結果>

- ・くじで偶然できた、4・5歳児と保育参加の大人の友だちとのグループで行うことで、いろいろな人と触れ合い、発見を楽しむことができた。
- ・相談して考えたものを探したりつくったりした。同じ目的で遊ぶ中で、自分なりに感じたり発見したりしたことを、言葉や表情で表現し、伝えあい、顔を見合わせて共感していた。
- ・「音をつくろう」では、ままごとのお茶碗を下に置いて鳴らし「あっちは?」「こっちと違う。」と、様々な所で試していた。また、自分の太ももをたたいたり、友だちと手を合わせて鳴らしたりしているなど、協同して工夫する様子が見られた。棒をみつけてあちこちをたたいてみて「コンコン。」「こっちコチコチ。」と伝え、グループ3人で鳴らし合って「合奏じゃなあ。」と楽しむ様子も見られた。
- ・「チクチクを探そう」では、実際に“触って”チクチクする遊具の綱の部分や、松の葉をみつけるグループもあれば、“見た”感じでチクチクした木の先や棕櫚の葉をみつけるグループもあった。
- ・「とんとんをつくろう」では、ヨド物置を手の拳で音を鳴らし、触れる拳の位置で「トントン」になることに気づいていた。発見したことを違うグループの友だちに伝え「ほんまじゃ。」と共感し楽しむ様子も見られた。振り返りの発表で、足で思いっきり踏むと「ドン」軽くすると「トン」となることをして見せ、感じたことをみんなで共有することを楽しんだ。
- ・「あったかいを探そう」では、「こうやって擦る。」と自分の手を触ってみつけたり、友だちと手を合わ

せて擦ったりしていた。「友だちの手をこうやって
ギューしたらあったかい。」と発表した。見て聞いていた幼児が真似て、友だちの手を握って「あった
かーい。」「つめたーい。」と、触れ合いを楽しんだ。
・遊びの後の振り返りの際、グループ全員で前に出て
カードを見ながら話す様子は、味や匂いを思い出して、今、感じたり匂ったり食べていたりしているか
のように仲間を見合いながら感想を言っていた。

<事例2・3の考察>

- ・身近な園内の環境にかかわって、友だちと一緒に同じ物について触れたりにおったりしても、いろいろな感じ方や違いがあることに驚いたり楽しんだりすることができた。
- ・答えが1つしかないクイズではなく、技能も心身の発達段階の違いの考慮も必要ない、五感を使った遊びであることから、興味を持続させ関心をもって遊ぶことができた。特別支援の必要な幼児も自分の感じたことを、友だちや教師に全面的に認められることにより、かかわりを楽しむことができた。
- ・自分たちで探す内容を考え、同じ目的で協同して遊ぶ中で、次はどうしようか、おもしろそう、と考えを出し合うことの楽しさやかかわることの楽しさを味わっていた。特に「あたたかい」を見つけることは、触って共感することで同じ感覚を味わえ、心にひびき、感性を育むことになったようだ。
- ・遊びの後の振り返りの際に、様々に感じたことを思い出して話す様子から、味やにおいの実体験は記憶に残り、もう一度、感じたことを反芻するように思い出すことができ、心に定着しやすい感性となると感じた。
- ・保育参加日に行うことで、家に帰ってからも共通の話ができ、家族で楽しんでいただくことができた。

4 まとめと課題

- これまで私は、幼児が身近にあるもの（者・物）に、直に五感を使って経験することが少ないことと、よく使う「見て」も目は見えても、意識して見つめているわけではないことが多いと感じていた。そして、この実践研究をしてみて、幼児が五感でものを捉え、実体験をすることで「感じる」ことができ、遊びを通して繰り返し感じることで「定着」し本当の生きた「知る」ことになるとわかった。
また、友だちについても、心を動かして触れ、名前

を知ろうとする。そして覚え、自分で言えるようになって、愛着や関心が強くなり、“友だちと一緒に遊ぶって楽しい”と、親しみがわき、相手を大事にする様子が見られるようになった。これが“生き生きと目を輝かせて心豊かに生活する幼児”なのではないかと感じた。

- 幼児の場合は大人と違う特徴的な、頭の中で考えるより「手で考える」とよく言われるように、五感の中でも「さわって」触れることで心を動かし、考えたり知ったりすることが一番多く、感性豊かに表現することがわかった。
- 友だちと一緒に考えて遊びを進めていく協同することの楽しさ、かかわりを楽しめることは、一方的に入ってくるメディアを使った遊びと大きく違い、感性を育て、人とかかわる力を育てていくことにつながるということがわかった。
- 実践研究を通して、「において」「味わって」の実体験は、記憶に残り、以前体験したことを思い出すことが多く、心に定着しやすい感性となると感じた。反面、今の子どもたちにとって「聞いて」「見て」というのは、意識することで豊かになり、意図的な環境づくりや遊びが必要であると感じた。また、人とかかわり共感しながら「味わって」みることで総合的な満足感・充実感につながるということがわかった。
- 豊かな感性を育むには、五感を通して“人とのふれあい”“自然とのふれあい”を実体験する中で「自分の心を表現する」幼児の育成をめざすという要素が大切である。日常の“遊び”を教師が見直し、計画的で継続性のある活動を行うことによって、自分も周りの人も大切に思うことができる感性豊かな幼児の育成に繋がるのではないかと感じた。
- 保護者の方にも幼稚園という「環境」を通して、一緒に子どもを育む楽しさを感じていただけたのではないだろうか。特に「さわって」あたたかさを感じ、我が子とつながる感覚の重要性を、伝えていけるよう今後も働きかけていきたい。
- この実践研究を通して、感性を育むことは、人間らしさの根っこを育てるのに大切なことであり、友だちと協同して五感を使った遊びをすることは、お互いのよさを認め合い、人とかかわることの楽しさ、あたたかさを感じられることにつながると感じた。これからも、特に「さわって」人と人とのつながりを感じられる教育を大切にしていきたいと思う。



児童が意欲的に学ぶ図画工作科の指導法を探る

—主として絵で表す活動を中心に—

赤磐市立仁美小学校 校長 石原 玲子

1 主題設定の理由

この主題を設定するにあたっては、主に2つの要因がある。私が若い頃、図工の時間に児童の「何をどう描けばいいの?」「描くことが思い浮かばない。」というつぶやきを頻繁に耳にし、画用紙を前にして困り果てている様子を目の当たりにすることがよくあった。また、「下描きまでは上手くいくけど色をぬるといつも失敗する。」といった技能的な悩みや、「どうせ自分は下手だから…さんのように上手く描けない。」と、人と比べて苦手意識や劣等感を抱いている児童も少なくなかった。

また、教師側からも、「図工は何をどう教えればいいのかわからない。」「特に発想や構想の段階での指導が難しい。」「絵の具やパスの基本的な使い方や彩色の指導法がわからない。」といった悩みが多く聞かれた。「～方式」という画一的な指導法で、児童の思いや持ち味がないがしろにされる授業も見受けられた。また、「自由に伸び伸び思ったとおり描きなさい。」とだけ指示して、あとは放置しがちな場面もよく見受けられた。

以上のような要因で、「図画工作科において、苦手意識や劣等感を払拭し図画工作の基本的な力をつけながら、自分らしさを発揮して意欲的に取り組む児童を育てる指導法を探る。」というテーマを自分の中で設定し、今日まで追求・実践してきたことを今回提案してみたい。そのことは、今後も期待される児童の主体的な学びを支援することへもつながると確信している。

2 取り組みの柱

(1) 図画工作科における「基礎・基本」

基礎・基本というと、技能的なことだけにとらわれがちだが、創造的な技能はもちろん、意欲や態度（つくり出す喜び）、発想・構想の力、互いの作品を見て良さや美しさを感じ取る鑑賞の力などが図画工作科における基礎基本である。児童がそれらの力を相互に関連させて発揮しながら意欲的に学習に取り組むことをねらい、授業を中心に具体的な実践を重ね、児童の意識や態度、技能面の変容を探っていった。

(2) 鑑賞活動の充実（表現と鑑賞の一体化）

導入、発想・構想、表現、制作後の各段階で、鑑賞活動をできるだけ取り入れて、児童にある程度の抵抗感や刺激を与え、概念を崩したり新しい表現方法にチャレンジする意欲や態度を高めたりしていくようにした。また、学級活動や図工の時間に、アートゲームや対話型鑑賞などの独立した鑑賞活動を取り入れ、色や形、タッチなどに着目して、思ったことを交流して言語活動の充実を図りながら図工への関心意欲を高めるようにした。

3 具体的な実践

(1) 学級作りの一環として、年間を通して造形感覚を養う

① 図工の時間だけでなく他教科でも児童が表したものを大人の感覚（上手・下手、写実的か否か等）で評価しないように心がけた。苦手意識や固定観念を取り除くため、どんな児童の作品でも必ず良さを見つけ、そこを見逃さず「気持ちがよく表れているね。」「よく観察しているね。」「この大胆な表現がいいね。」「この表し方おもしろいね。」といった声かけ（個別に、全体に）を増やしていった。特に、苦手意識や劣等感の強い児童ほど、教師の温かい声かけで、みるみる自信がつき、意欲や態度が変容した。教師は、児童の作品の良さやおもしろさを見抜く目を、授業実践の中や周りの同僚と情報交換や研修を行う中で養っていかなければならないと思う。

② 学年初めにはクロッキー作品に彩色してクラスのみあて作り等を行った。顔などの小さな作品を描く時でも、古今東西の様々な作品を鑑賞していろいろ



な表現方法に気づかせ、概念を崩したり描き方に变化をもたせたりした。インプットが多いほどアウトプットもスムーズなのである。

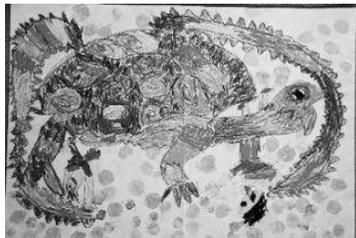
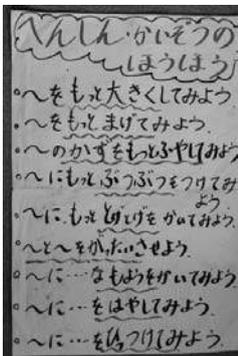
クロッキーに使える時間は限られているが、短い時間、小さな作品でも、じっくりと見て描き、自分らしさが表れる作品作りを心がけた。

(2) 発想・構想力を伸ばす

この段階が子どもにとって一番悩むところであり、教師にとっても指導が難しいところではないだろうか。そのために以下のような具体的な手立てを考え実践した。

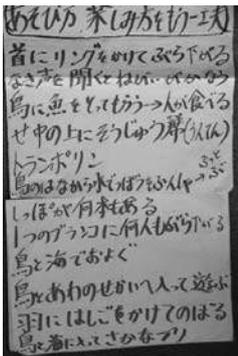
- ① 児童が想像や思いを広げられる題材を開発し、アイデアや発想の面白さを重視して指導した。

例①「面白魚！ワールド」
生き物を思い切り改造



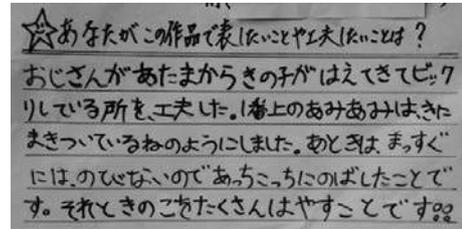
例②「～と遊ぼう」

どんな生き物とどんな遊びや冒険ができるか、考えを発表させ板書に。発想のヒントを文字化し画面構成に役立てる。



- ② 1つの題材に入る時には、必ず関連した児童作品や名画等を使った鑑賞活動を取り入れ、様々な表現方法があることや画面構成の工夫に気付かせた。ここでもインプットが多いほどアウトプットがスムーズということを実践した。
- ③ 水墨画の鑑賞後、和紙に墨で直接線描きをし、絵の具を垂らして偶然性の面白さを体感させる。
- ④ アイデアスケッチや下描き、彩色の各段階で、ワー

クシートに「とても強そうなワニを描きたい。」「～な感じの…を描きたい。」などといった、各自の思いを言葉で表していく活動を入れた。描いていく上でのめあてをいつも意識させたり、学習の見通しを持たせたりすることができるだけでなく、指導者もその児童の思いや表現したいことなどを把握して指導に生かすことができた。



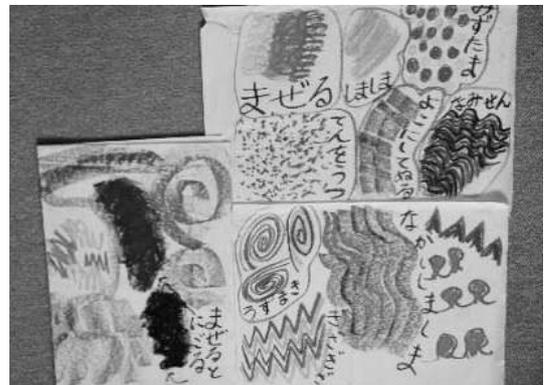
⑤ 人間の動き

関節人形を板書で示したり、人型のシルエットの切り抜きをアイデアスケッチに貼り付けたりして画面構成に取り入れた。これにより、振り回される、よじ登る、またがる、滑る、正面向きだけでなく横向きや逆さ向き、斜め向き、ぶら下がる、しがみつくななどの人間の動きを視覚的に捉えることができた。



(3) 彩色段階での指導を大切に

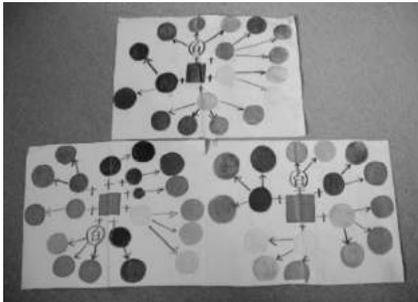
- ① パスは基本的には混色に向いていない。いつもマットな画面に塗りつぶすだけが技法ではなく、短く折って平塗りさせることも必要。模様で表す効果にも気づかせた。



- ② 画用紙もいつも白でなく、薄ピンクや薄クリーム、題材によっては黒や紺、赤などを使用。ボール紙ダンボールなどに描くのも面白い。

- ③ 背景を全部塗りつぶす必要はない。
- ④ 水彩絵の具の基本的な使い方を習得させる。

小学校卒業段階で、パレットの機能的な使い方、混色、重色、様々なタッチ、にじみ・ぼかし、筆に含ませる水加減などの水彩絵の具の基本的な扱い方を習得しておくことが、中学校に向けて最低限必要なことではないか。学校により、学年により、学級により指導法がまちまちでは習得できない。視覚的に分かりやすい資料を作成し、授業中は常時掲示して学年や校内で共有し、継続して指導にあたるようにした。児童から「先生、あれ貼って。」とリクエストされるようになった。

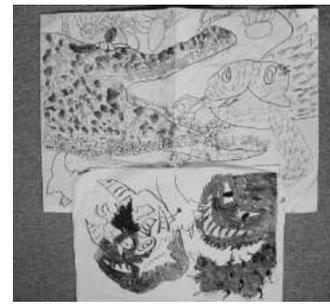


混色資料例



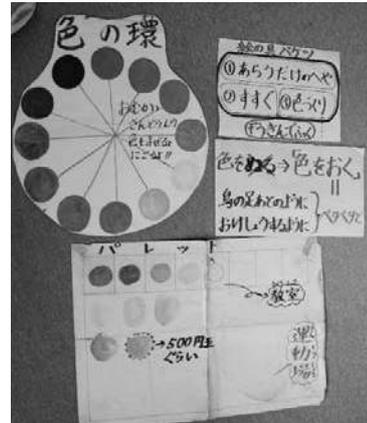
色の濁り方と配色の効果

⑤ 1つの作品が完成するまでにはかなりの集中力や根気強さが必要だが、一度に全部仕上げようとせず、「今日は、～だけ色をつけてみよう。」とスモールステップで指導し、達成できたらしっかり称揚するようにした。また、学習の初めには前回までの取り組みを全体で鑑賞し、互いの良さを認め合った上で、タッチの効果などを参考作品や資料を基に鑑賞し、制作に取り入れられるようにした。ここでもインプットが多いほどアウトプットはスムーズであった。



彩色資料例

⑥ 補色の効果や配色の効果を視覚的な資料を見て制作に取り入れていけるように、常時前面に掲示した。1年生からでも理解して活用できていた。



補色、用具の使い方

(4) 教師の力量を高めるために

① 授業前には参考資料作りを

授業で使う視覚的な資料をできる限り事前に作成した。児童がつまずいたり困難さを感じたりする点が教師に実感でき、さらに必要な資料やどんな発問や助言をすれば、発想・構想が広がりやすいかということを考えるヒントにもなった。

② 学年団や学校規模で、指導法の情報交換

互いの実践を見合い、成果のあったやり方を広げ、資料の共有もしていった。その時間で子どものどんな力を伸ばしていくかを明確にして、画一的な指導法にならないように注意した。作品主義でなく児童の姿や変容を見ていくようにした。

③ 研修を大切にする

人材育成の視点から校外に出向き、講師として研修（講義・実技研修）を実施した。研修の場で効果的な指導法について伝達・共有した。

4 成果と課題

(1) 児童の変容

- ① 年間を通して図工の時間だけでなく、他教科の学習や生活の中でも、児童の表現態度や意欲を中心に賞賛・評価していった。それにより少しずつ表現することへの抵抗感が少なくなり、意欲や自信をつけていく姿が見られた。
- ② 発想・構想段階で3の(2)にあるような指導を充実させたことにより、「何をどう描くの？」と悩む児童は少なくなり、「早く描きたい。画用紙配って！」と意気込む児童も増え、自分から進んで画面構成を工夫する姿も見られた。また、作品カードの作成・活用により、教師が一人ひとりの児童の思いや表現上の願いなどを把握した上での支援ができるようになり、さらなる児童の意欲の向上・持続につながった。
- ③ 彩色段階においては、具体的な視覚資料（3の(3)の①④⑤⑥）を常時掲示して指導したことにより、パスや水彩絵の具の基本的な技能が身についていった。また、1単位時間に多くのことをねらわず、スモールステップで制作させ、毎時間互いの頑張りを認め合う鑑賞活動を取り入れたことにより、自他の頑張りが自覚でき、最後まで粘り強く取り組めるようになってきた。特に苦手意識の強い児童、集中力が持続できにくい児童にとっては指導の効果が大きく、「こんなに粘って描いたのは初めて。」「また早く描きたいな。」「今度は～を描いてみたいな。」といったつぶやきや感想も聞かれるようになってきた。
- ④ 完成後の互いの作品を鑑賞するときには、色や形、タッチなどに着目して、自他の作品からたくさんの良い点や工夫点を見つけ出し、認め合えるようになってきた。特に図工の作品は、児童が精一杯努力して生み出した自己の分身のようなものなので、自他の作品を大切にすることは、学級作りの上でもとてもよい影響を及ぼした。
- ⑤ 独立した時間でアートゲームや対話型鑑賞活動を行ったことにより、作品を見ることの楽しさ、面白さが体感でき、図工に対する関心意欲が高まってきた。また、自分の思いを言葉で表現して伝え合う事で、充実した言語活動が展開でき、他教科の学習でも表現面で好影響を及ぼしていった。



対話型鑑賞活動

(2) 今後の課題

- ① 上に挙げたような資料や参考作品を、多忙な中で作成したり集めたりする時間は限られており、効果的な資料を今以上に校内外で共有して指導に取り入れていくことが、より多くの児童に還元でき、また教師の時間の有効活用にもつながっていくと思われる。
- ② まだまだ現場においては、「芸術作品に対する基礎知識がないから、自分にはできない。」という理由で独立した鑑賞活動（対話型鑑賞）を尻込みしている教師も多い。しかし、感性はただ作ったり描いたりするだけで養われるものではなく、現行の学習指導要領の解説にも、「様々な対象や事象を心に感じ取る働き＝感性を育てるには、「造形を捉える視点」「造形を感じる力」（アンテナ）を豊かにしていくことが大切である。」と明記してある。そして、感性を養うには、鑑賞活動はとても大きな役割を担っている。岡山県立美術館が中心となって、誰でも対話型鑑賞活動に取り組めるキット「アートルーピングトランク」が各郡市に整備されているので、有効活用して鑑賞活動を積極的に取り入れていく必要があると思う。
- ③ 図工においても、1クラスの児童が40人近い学級では、担任だけできめ細かい指導はできにくい。支援員やサポーター等の協力を得て、指導上の注意事項をあらかじめ共有した上で、できる限り個々の児童の思いに沿った指導ができるようにしたい。それも、児童が意欲的に学習に取り組み、基礎基本の力を身につけていくために必要なことではないだろうか。



専門的な学びを探究するフィールドワークの取り組み

—生徒主体の人文社会学類・学類研修を通して—

岡山県立岡山城東高等学校 教諭 大西 浩 史

はじめに

グローバル化した社会で活躍できる人材の要素として、コミュニケーション能力や問題解決力が課題として捉えられることは多い。そのため、深い教養や伝統、文化に対する素養を身につけることが重要となる。「生きる力」の養成やグローバル・リーダー育成の上で、歴史や宗教、芸術や文化の学習は今後ますます重視されると思われる。

本校生徒は、人文社会、理数、国際教養、音楽の4学類に2年次から分かれ、各学類で「コア科目」と呼ばれる学類の中核となる科目を2・3年次継続で履修する。27年度に私は人文社会学類3年次のコア科目の一つ「文学探究」を担当した。その際、近代文学分野において読解における班別学習、外部講師の講演を聴いてのレポート、調べ学習に沿ったフィールドワーク等での生徒の主体的な学びをめざした。

28年度、人文社会学類主任となり、人文社会学類の生徒に歴史や文化に関する教育を一層充実させたいと考えた。そこで注目した行事が、いわゆる「修学旅行」に代えて、学類ごと学びに比重を置いて実施していた3泊4日の学類研修である。人文社会学類独自のこの研修を、人文社会系の学問的フィールドワークと捉え直し、さらに生徒の主体的な学びの場として位置づけられるのではないかと考えた。

1 「学類研修」のブラッシュアップ

30期生が2年次、29年6月に実施する学類研修に向けて、28年度後半から行程の検討、旅行業者決定などの準備を進めた。生徒が1年次の時は、学類主任として年次会議で状況を伝えながら、一人で研修先や行程を固めていくこととなった。国内研修を希望する生徒が確定した^(注)29年1月以降、方面は東京・横浜を中心に検討を進めた。

単なる研修旅行から専門的な学びのフィールドワークへとブラッシュアップするために、方針を次の三点に絞った。①リーダーとなる研修委員を養成し、準備

から成果のプレゼンテーション、発表会までを生徒主体で行うこと、②人文社会学を網羅するよう研修を配置し、可能な限り専門的な学芸員やスタッフからのレクチャーや説明を設定すること、③生徒一人ひとりが事前にレポートしたい項目を決め、事前調査を経て研修での見聞から考察をまとめること、である。

(注) 人文社会学類30期101名のうち90名が国内研修、11名がマレーシアへの学類研修を希望した。

2 生徒の主体的活動

本校の学類研修は以前から研修委員をクラスで1名ずつ選出して、行事自体は生徒が意欲的に活動していた。29年度の実施に向けて、準備・行事・まとめ等、一連の取り組みを生徒自身が主体的に動ける体制をとった。委員を希望制にして人数増を図り、29年度は12名の生徒が研修委員となった。連絡や作業が研修委員を通して円滑になっただけでなく、事前活動の司会・指示、実施時の点呼・連絡、実施後のレポート作成のとりまとめなどを委員主導で行うことができた。

研修までの学類合同の準備の時間は5回確保した。毎回、研修委員とは事前に打ち合わせを行い、集会ごとに司会や資料配付を分担した。各集会の概略を以下にまとめる。

- 第1回集会 4月26日 6・7限
 - ・コース別研修二つの人数確定
 - ・都内班別自主研修の班分けと計画作り
- 第2回集会 6月6日 6限
 - ・事後に作成するレポートの担当確認

レポート担当の一覧

- 第3回集会 6月7日 6・7限
 - ・コース別研修(2日目午前)のリーフレット作成

○第4回集会 6月14日6・7限

・学類研修のしおり配布, 行程や留意事項の確認

○結団式 6月19日放課後 校長挨拶 最終確認

コース別研修と事後に作成するレポートは, 研修ブラッシュアップの核である。希望したコースのフィールドワークは新しい知識を得る機会である。直接, 実物を肌で感じることは, ものごとへの新しい視座をもたらす。また, レポートを作り上げようとする意識があれば, 生徒の探究心も一層増すだろうと期待した。

第3回で作成したリーフレットは, 大学や見学する博物館などに関する事柄について, コースごと分担して調べ, A4判4ページ程度に編集したものである。事後レポートの下調べを兼ねている。思想・文化コースを例にすると, 調べた項目は, ①大学の歴史②学部・学科の特徴③大学博物館④湯島聖堂・日本の儒教⑤ニコライ堂・正教会⑥神田明神の祭神⑦学問・宗教の地としてのお茶の水, といったものである。



事前に作成した大学・コース別研修リーフレット

3 専門性を深めるフィールドワーク

これまでの研修は, 歴史・文化中心で踏襲されていたが, 生徒の進路や興味・関心は様々である。多様な志向に応えるため, 人文社会学の文学・芸術・歴史・文化・社会・政治・経済・情報などの分野を行程に網羅した。そして, 専門的なレクチャーや説明を受けられる所を条件に, 研修先を絞り込んでいった。下の3か所は全員で訪れた研修先である。

○1日目 6月20日午後 横浜

- ・神奈川近代文学館 (文学・風土)
- ・関帝廟 (異文化・宗教)

○4日目 6月23日午後 東京

- ・印刷博物館 (芸術・文化・情報)

神奈川近代文学館は, 充実した常設展示が魅力的で, 特別展・宇野千代展の説明・見学では, 文学を生む風土を感じさせたい思惑があった。神奈川ゆかりの作家を紹介した動画視聴ののち, 学芸員から宇野千代の生涯について説明を受けた。生徒のレポートを紹介する。

文学館には中島敦の散歩道など文豪たちに関係の深い場所を示す模型があった。私たちが文豪たちと同じ場所において同じ空気に触れていることを確かに感じさせてくれた。また, 横浜という地は独特のエキゾチシズムがある。横浜を訪れることで文豪たちは刺激を受け新しい感情が生み出され, 作品を残したのだろう。



神奈川近代文学館での学芸員によるレクチャー

関帝廟は, 中国の信仰や文化を感じることでできる象徴的な場である。関羽信仰, 廟堂の構造, 参拝のしかた等について, 説明は授業で漢文を担当している私自身が務めた。



関帝廟での教員による説明

印刷博物館では, 人類にとっての印刷の役割と意義, 印刷の技術や文化などについて, スタッフ2名から全員に説明を受けた。生徒のレポートを紹介する。

甲骨文字やコーラン, 世界最古の印刷物である百万塔陀羅尼から磁気・ICカードなど現代のものまで展示がされており, 自分の中で点々と存在していた知識が, 繋がったような感覚がして嬉しかった。

生徒は時間, 空間を超えた知識を得ただけでなく, 知識を総合して, 体系的に理解しようとしていることがわかる。世界的な展示物とレクチャーを伴った見学が, 学問としての探究する機会となって奏功した。

4 自ら選択して主体的に学ぶフィールドワーク

4日目(6月23日午前)には, 3分野からの選択制の研修を行った。

①経済・経営分野 東京証券取引所 生徒50名

広報担当者から株取引に関する講義と見学

②東洋史・考古学分野 東京国立博物館 生徒28名

スクールプログラム「はじめての考古展示室」による学芸員からのレクチャー

③芸術・文化分野 すみだ北斎美術館12名

DVD鑑賞の後、学芸員から講義と常設展見学

本稿では、すみだ北斎美術館での実践を述べる。28年11月に開館した新しい美術館で、ぜひ日本を代表する浮世絵、そして浮世絵師の人生を体感してほしいと思い、選択コースとして設定した。学校教育プログラムの中から、「ピーター・モースコレクション」に関してDVDを視聴し、レクチャーを受けた。状態のよい浮世絵や貴重な初期の版を集めたモースのコレクションを目にして、生徒は葛飾北斎の浮世絵のすばらしさやモースの鑑識眼に感銘を受けたようだった。生徒のレポートを紹介する。

展示作品の多くが、長らく北斎を研究したピーター・モース氏のコレクションからなること、当時、浮世絵は生活に身近な存在であったこと、北斎は実は努力家であり、彼の「普通」は非常にレベルが高かったこと、などを学芸員の方から聴くことができた。私はその先進性に注目した。絵師としてすぐに「浮世絵」と呼ばれる技法で作品を発表している。西洋の透視画法を取り入れた遠近法で、手前にあるものが浮き上がるように見える。北斎は新しい技法を多くの絵師に広める活動もしている。絵としてはもちろん、絵師としての先進性を感じた。



すみだ北斎美術館でのレクチャー

北斎の優れた感覚や生きた時代、世界基準の表現技法、収集した研究者について、分析したことから北斎を全体的に捉え直し、総合的な思考にたどり着いている。専門的なレクチャーを受けたことと、レポートでの自分の中でのまとめ直しが、体系的な学びに結びついた例であると考えられる。

5 大学を見通す学問探究

キャリア教育に資する要素を加味して、生徒自身の志望分野や関心に応じて探究を深められるような選択コースも設けた。2日目(6月21日午前)の大学・コース別研修では、大学とミュージアムでのレクチャーや説明を学問分野ごとにセットにして設定した。

①思想・文化コース 生徒25名・国語科教員1名
明治大学(博物館刑事部門は学芸員による説明)、神田明神・湯島聖堂・東京復活大聖堂(3か所は教員による説明)、おりがみ会館(館長によるデモンストラーションとレクチャー)

②国際・英文学コース 生徒10名・英語科教員1名
青山学院大学(大学職員によるガイダンス、間島記念館と礼拝堂見学)

③近代文学コース 生徒33名・国語科教員1名 東京大学(構内見学・本校卒業生の在学学生2名からのレクチャー)、文京ふるさと歴史館と文学散歩(歴史館と坪内逍遙旧居跡・樋口一葉旧居跡・宮沢賢治旧居はボランティアガイド3名による説明)

④歴史・政治コース 生徒7名・地歴公民科教員1名 早稲田大学(會津八一記念館と大隈重信記念室で学芸員による説明・構内見学)

⑤社会・経済・情報コース 生徒15名・理科教員1名 慶応義塾大学(構内見学)、神奈川県庁見学、横浜ニュースパーク(ガイドによる説明)

選択コースの中で、探究的な学びを二つ紹介する。

まず、東京大学・近代文学コースでは、文京ふるさと歴史館からボランティアガイド3名を斡旋していただき、ガイドと直接、連絡を取りながらフィールドワークのルートを策定した。歴史館内や宮沢賢治旧居では、特に詳しく解説があった。



ボランティアガイドから説明を受ける生徒

人文社会学類では、例年、コア科目に即したフィールドワークを実施している。2年次生は、30年3月に岡山県内でのフィールドワークを計画している。今回のノウハウを生かし、施設やボランティアガイドとの連携・協働を、県内でのフィールドワークを進める際にも取り入れたい、と考えている。

近代文学コースは、将来へのプロセスや勉強法、大学で研究する意味などについて、先輩2名に質問しながら生徒自身が向き合う機会を設けた。先輩と後輩との関係性、学問の府である東京大学という「場」の設定を重視した。話をしっかりと聴き、受け止めて考える、という姿勢があった。限定された時と場は、自分の意識と深く関わる時空であった。

思想・文化コースでは、法学や思想・倫理、人間等に興味を持つ生徒を私自身がレクチャーをする形で、神田明神、湯島聖堂、復活大聖堂の順に3か所訪れ解説を行った。お茶の水界隈に定めた理由は、神道・儒教・日本正教会という世界の思想・宗教のシンボルが並び立つ地を歩くことに意義を感じたためである。茅の輪くぐり、世界最大の孔子像やビザンチン様式の重要文化財である「ニコライ堂」、博物館展示のギロチン台は、体感する・想像するというフィールドワークの醍醐味を味わう格好の場であった。

6 行事後の振り返りと相対化

29年6月20日から23日までの学類研修を終えて、研修委員以外の生徒たちは事後のレポートにとりかかった。レクチャーや説明時には、レポートの仕上げを意識してメモや画像で記録に残す、という生徒が多かった。その記録をもとに、締め切りとした7月19日までに、全員がレポートの提出を終えた。

研修委員には、別の取り組みを事前に指示していた。次のような行事での発表の準備である。

- ・7月28日 本校オープンスクール（第1回）
学類研修の内容を体育館で中学生に紹介する。
- ・9月8・9日 文化祭で写真・レポートを中心に
研修内容を展示する。
- ・9月30日（予定）本校オープンスクール（第2回）
中学生にスライドで紹介する。



研修内容を紹介したプレゼンテーション
（第1回オープンスクール）

- ・11月（予定）2年次学類研修発表会
2年次の他学類とともに、研修内容を発表する。
- ・3月（予定）人文社会学類2年次県内フィールド

ワークでのリーダーとなる。レポートを冊子にしてレポート集を作成し、生徒・教員に配布する。

おわりに

レポート集として冊子にする準備の中で、印象に残った記述を紹介しながら、まとめとしたい。

- ・学類研修を通して様々な場所を訪れ、様々な文化に触れて、自分たちの知識が少し豊かになったように感じた。東京という都市では英語を学ぶことの大切さ、外国人に語れるくらい自国の文化を知ることの大切さも学ぶことができた。この経験を今後に生かし、多様な知識を持ち、日本人として誇りを持つことができるようになりたい。
- ・娯楽目的で訪れているような街を、視点を変えて見ることで、初めて分かること、考えさせられることがあり、視野が広がったような気がして面白かった。自分の視野をより広げるためにも、これからはいつもと違う切り口でものごとを捉えてみよう、と思った。
- ・早稲田大学には日本人だけでなく他国の学生も数多くいた。図書館や食堂のような所で多くの学生が話し合いや自習をしていた。大学を見学することで、私たちは岡山城東高校の目指している「グローバル」を大いに感じる事ができた。

生徒たちは、今回の学類研修の準備・実施・振り返りを通して、新しい知識を得ただけでなく、ものごとを見る新しい視点を獲得することができた。さらに、日本に生きる者としての矜持、グローバル・リーダーとしての課題、多角的な視点からものごとを相対化して、客観的に見て考えることへの意欲を表現することができるようになった。レクチャーを受けるたびに、生徒たちは歴史的な流れや世界の中での位置づけ、同じ分野での差異などを自ら考察していった。主体性が求められる現代の環境の中で、「自ら進んで」という行動力と同時に、ものごとを相対化して考察をすることも、また主体性を伸ばすことに重要であると考えている。

岡山城東高校は、平成27年度からスーパー・グローバル・ハイスクールとして、「グローバルな視野、主体的・協力的な実践力」を目標に課題研究に取り組んでいる。枠にとらわれない視点の獲得や物事を客観的に見ながら主体的に考察する力に、人文社会学類の学類研修が有用な手立てとなることを、生徒のレポートは教えてくれた。



次期学習指導要領で新設される

必修科目「地理総合」における一考察

—学園祭でのクラス展示を通じた取り組み—

岡山県立岡山朝日高等学校 教諭 竹内直志

1. はじめに

現行の学習指導要領に移行してまだ4年であるが、2022年から実施される次期学習指導要領の骨格が公表された。高等学校地理歴史科では科目の大幅な見直し・組み替えが実施されるようである。現行では世界史Aもしくは世界史Bのいずれかが必修とされている。世界史必修が導入されてからおよそ20年が経過した。この20年間、高校で地理を全く学習しない生徒が半数近くいた。グローバル化が進む中で現代の世界の姿を扱う地理を学習しなくて良いのだろうか、疑問に感じた地理教師も多かったのではないだろうか。次期指導要領では世界史と日本史を融合した「歴史総合」と「地理総合」という2つの科目が新たに設置され、この2つともが共通必修科目になる。「歴史総合」で対象とする時間的認識と「地理総合」で対象とされる空間的認識が社会生活の中でより良く生きるため車の両輪として重要であることが確認された意味のある次期学習指導要領の骨子である。地理教員の長年の夢であった高校生地理全員履修がいよいよ現実のものとなる。全員履修に向け問題点を整理し、実施される2022年には良いスタートが切れるよう様々な準備しておく必要があろう。

2. 次期学習指導要領における「地理総合」

2016年12月、中央教育審議会より次期学習指導要領の策定に向けた学習指導要領等の改善および必要な方策等について（答申）が示された。次期学習指導要領のテーマは、現行指導要領で認識された知識基盤社会で必要とされる「生きる力」の育成を引き続き柱としたものとなっている。その中において、地理歴史科では現行の指導要領における世界史だけの必修を見直し、世界史と日本史を融合させ、世界とその中における我が国を広く相互的な視野から捉え、現代的な諸課題の形成に関わる近現代の歴史を考察する「歴史総合」と、持続可能な社会づくりを目指し、環境条件と人間の営みとの関わりに着目して現代の地理的な諸課題を

考察する「地理総合」の2つを必修科目として設置するようである。

新設される「地理総合」では3つの大項目から構成され、その中身は、①地図と地理情報システムの活用、②国際理解と国際協力、③防災と持続可能な社会の構築の3つである。また、「地理総合」で育成する資質・能力を次のように明確化している。1つ目が、地図やGIS等の活用に関わる地理的技能を育成すること。2つ目が、地理に関わる諸事象を考察し、問題解決に向けて構想し、説明し、議論する力を育成すること。3つ目が、地域的課題を意欲的に追究する態度を育成することとしている。従来の指導がどちらかと言えば「何を知っているか」という知することに力点が置かれていたが、次期指導要領では「何ができるようになるか」を指導の最終的な目的・評価とするよう指摘されている。したがって、「地理総合」という科目を通じ、より良い社会の形成者として社会が抱える問題を、地理的な見方や考え方で分析し、説明し、さらには、問題解決に向けた行動につなげる意思決定ができるように生徒たちを育成しなければならないようである。

3. 教育課程における地理教育の実態

新しい科目が設置され、それが必修ということになれば教育課程の見直しが当然必要になる。現行の指導要領における、地理歴史科と公民科を合わせた教育課程は、進学校であれば1年生で現代社会2単位と世界史A2単位を、2年生では、文系は世界史・日本史・地理から2科目を選択し、理系は日本史・地理から1科目を選択している。3年生では2年で選択した科目をそのまま履修する（学校によっては公民科目を選択に加える場合もある）というのが一般的である。つまり、地理歴史科と公民科を合わせた3年間の単位数はおよそ文系で15単位、理系で10単位となる。この単位数に次期指導要領で新設される必修科目「地理総合」2単位が加わることになる。他教科の単位数との兼ね合いもあり2単位の確保はとて難儀であり議論が伯

仲しそうである。当然、地理歴史科の中での自助努力も要求されるであろう。必修科目としての「地理総合」と選択科目としての「地理探究」との位置づけが明確化しない段階であるが、現行の「地理A」と「地理B」のような重なり合う部分のある教科という位置づけではないようである。

兎に角、限られた2単位だけの授業時間では「地理総合」が目標とする、社会問題を地理的な見方や考え方で分析・説明し、問題解決に向けた行動につなげることはなかなか難しいであろう。そこで、学校行事を含めた教育活動全体で「地理総合」の目標を達成するため、学園祭を通じ生徒自身が学習内容を深め、考察し、共有し合う取り組みを紹介してみたい。

4. 学園祭前日までの準備

学園祭は生徒の自主性に任せた行事ということもあり、あまり教員の指導が入りにくく、多くの場合、お化け屋敷とかヨーヨー掬い、ボウリング、さらにはユーチューブをまねたビデオ上映など比較的内容の薄い展示になりがちである。生徒主体の最大の行事が意義のある取り組みに残念ながらなっていない。この現状を改善したいと考える先生方も多いと思われる。今回、次期学習指導要領の目標を意識し、授業で学習した内容や身につけた内容を深め発展させる場として学園祭を活用することにした。最初から指示するのではなく自主性を損なわない程度に、様子を見ながら話を切り出すことにした。展示内容を決定するLHRでは、意見もあまり出ず、お化け屋敷とか迷路とかビデオ上映といった意見が場当たり的に出される状態であった。生徒には正直、何ができるのか、何をしたら良いのか明確な意見もなく、ただ何となくお化け屋敷に決まりそうになった段階で担任として意見を提案した。

提案内容としては

- ①見てくれる人に感動を与えるような展示をしたいこと。
- ②学習内容を応用・発展させる内容にしてはどうか。(地理の授業で学習した内容)
- ③Dagik Earthというソフトを使えば地球の様子を球面に投影でき、視覚的にしかも感動的に地球を観察できる。
- ④2016年が国際地図年であったので興味ある地図が数多く作成され、オープンソースとしてWeb上に公開され自由に閲覧できるようになってい

る。

以上、4つの視点から提案をし、意見の1つに加えてもらった。

意外にもというか、めでたくというか、担任が提案した意見が意欲的な数名の生徒たちにより採用されることとなった。

その後の話し合いで、展示名はクラスが2年I組ということもあり「愛(I)・地球博」ということとなった。また、具体的な展示内容としては2つのことが決定された。1つは地球の様子を球面に投影し、投影された画像を代表者がレーザーポインターを使いながら説明をするコーナー、もう1つは説明した画像や地球に関する興味ある画像をプリントアウトし地球儀を作成するコーナーである。展示に向けた準備はリーダーを中心に夏休み中に準備のできる物は準備をすることにした。必要な準備物としては、①地球の画像を投影する球体、②地球儀のもとになる球体、③地球儀に貼り付ける画像コンテンツ、④画像投影のためのプロジェクター・パソコン、などである。

- ①地球の画像を投影する球体(スクリーン)写真①
観客のことを考えると最低でも直径1m以上の球に投影したいという意見が多かったが、予算のこともあり、直径1m半球の発泡スチロールを2つ購入し、貼り合わせ投影することとした。

- ②地球儀のもとになる球体 写真②
Dagik EarthのWebサイト上に直径75mmの地球儀作成のマニュアルがあり、比較的簡単に短時間で作成できそうであったので参考にした。球体として市販されている直径75mmのガチャガチャ球を300個購入した。

- ③地球儀に貼り付ける画像コンテンツ
地球儀を作成するといっても、球体の大きさと貼り付ける画像の大きさの設定が難しいが、これもDagik Earthの地球儀の画像コンテンツを利用させていただくことにした。そのまま印刷すれば良いのだが、普通紙では貼り合わせるのに手間がかかるということもあり、裏面にのりがついたラベルシートを300枚購入した。

- ④画像投影のためのプロジェクター・パソコン
Dagik Earthを提供している京都大学では、Dagik Earthの普及のために教育現場などで活用する際、機材の無料貸し出しを行っている。プロジェクター・パソコンともDagik Earthから借り

ることとした。

準備が揃った段階で、画像投影のデモと地球儀の試作を試してみた。地球儀の試作は放課後を利用して、1人1個作成した。完成するまで時間的に個人差があったものの何とか全員作成できた。画像投影は2台のプロジェクターを使用し球面に180度ずつ同時に投影するため、プロジェクターの位置設定がなかなか難しく手こずった。どうしても半球の外側で画像が一致せず何度もプロジェクターの位置を変えながらなんとか投影できるようになった。

投影するコンテンツは、地理の授業で学習した大気の流れ、熱帯低気圧・地震の発生場所などをDagik EarthのWebサイトから探してきた。代表者がそれぞれのコンテンツについてどのように説明するかをポイントを確認しながら原稿を書き上げた。また、展示会場の雰囲気が高めるため、家にある地球儀や地図に関するものを持ち寄ることにした。

5. 学園祭当日の様子

① 会場設営 図①

宇宙空間に浮かぶ地球をイメージしてもらうために室内を真っ暗にした。画像を投影する全球スクリーンは発泡スチロール製で比較的軽いので、天井中央部分にある照明にS字フックを取り付け吊した。透明な釣り糸で吊したので宇宙に浮かぶ地球が表現でき臨場感のあるものになった。教室の黒板や壁面には生徒が思い思いにチョークを使用し地球や星座や惑星を描き、素晴らしい演出となった。壁面に貼り付けた地図は自宅から持ち寄ったものであるが、伊能図、ハザードマップ、東京の浸水マップ、正距方位図法による世界地図、ランドサットから見た日本列島など多種多様な地図が展示できた。地球儀作成コーナーは映像がきれいに見えないデッドスペースになる場所に2箇所と、机上には球体、磁石、貼り付けシート、それからラミネート加工した作成マニュアルを置いた。観客席はデッドスペースを避けた全球スクリーンの周囲に40席設けた。発表者とPCを操作する生徒の位置は暗い中での連携が必要になるため同じ場所でスタンバイした。

タイムスケジュールは1時間ごとに生徒が入れかわり、全生徒が何らかの形で展示に関わるように時間配分をした。1時間のうち最初の15分程度で宇宙空間に浮かぶ地球を生徒の説明で体感していただき、説明の後で、40分程度を地球儀作成に当てるというスケ

ジュールである。

② 発表 写真③

それぞれの班の発表者が、考えた発表原稿を表示されるコンテンツを見ながら読み上げていた。室内が暗いという状況もあって緊張することなくそれぞれが思い思いの発表ができたようである。グループの中には観客に問いかけるような口調で語り、投影される地球を見て感動していたようである。高校生らしいレベルの高い発表が聞けてさすがだという意見をアンケートに書いてくれた観客もいた。生徒自身も発表することで投影される地球の様子を学習した内容より深く理解していたように感じられた。

③ 地球儀作成 写真④

配布シートから必要な部分を切り取り球面に貼り付けるという作業を40分程度で完了しなければならず若干無理のある計画のように思われたが、運営する中で予め貼り付ける部分を切り離したものを配布することになった。これは小学生の来場者もあり、切り離すのに比較的時間がかかることに気づいた生徒の対応であった。貼り付ける作業は大陸の様子や表示されている内容を注意しながら重ね合わせる必要があり生徒たちは丁寧に説明を加えながら作業をサポートしていた。完成した地球儀を手で説明された内容を確認したり質問をする観客がいたりして学習内容の再確認ができる機会にもなった。

6. 成果と課題

① 生徒の感想

発表原稿を考える中で、学習した内容以上に地球の様子に関心を持ったようである。しかし、限られた時間での発表原稿の作成であったため、専門用語の羅列となった部分もあり、もっと調べておけば良かったという感想を持った生徒もいた。ただ、発表することで地球に対する興味が今まで以上にわき、これからも地球について学習・研究してみたいという感想を持つ生徒がいて今回の企画は試みではあったが、一定の成果があったように思われる。また、発表原稿を作成する段階でもう少しアドバイスなり修正が加えられたなら、さらに素晴らしい発表や展示になったと思われる。その上、会場づくりにしても地球儀作成にしても生徒同士がお互いに意見を出し合い、より良いものにしようという共通の意識で取り組めたことの意義も大きいと考える。学校生活では中々個人の意見を出し合い行

動するということがないため、社会性の育成の必要性が指摘されたりもするが、学校行事をうまく利用することで社会性の育成も可能であると考えます。また、次期学習指導要領に示される深い学びも授業以外の場面を利用することで可能であろう。授業という枠の中だけでは時間の確保が難しく、今回のような調べた内容を発表する機会を通じて、表現力を育成し、同世代以外の人とコミュニケーションを持つことで社会の形成者の一人であるという自覚をもたせることにもつながるであろう。

② 観客の感想 写真⑤

来場者は本校生徒を含めおよそ300名を超えた。アンケートに答えてくれたのは100名程度であったが、ほぼ観客の全員が今回の展示で地球への興味関心が高まったと回答してくれた。アンケートの自由記述欄には高校生のレベルの高さを評価する意見がある一方、難しい言葉や専門用語が多くもう少し説明してほしいという意見もあった。また、地球が空間に浮かんでいて神秘的な地球を体感できて良かったといった展示の工夫を評価してくれた観客もいた。さらに、説明後の地球儀を作成する構成は説明された内容を確認することができたのでとても良かったという意見もあった。概ね、今回の展示は観客から見ても好印象であったように思われる。

7. おわりに

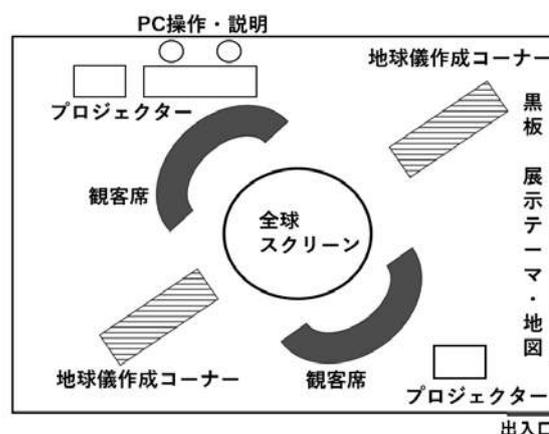
次期学習指導要領に示されるであろう「深い学び」をいかに実践し、「社会問題への分析力」と「問題解決に向けた行動力」をいかに育成していくかが我々教える側に投げかけられた重要な課題である。今回実践した学園祭を活用した取り組みは改善点も多かったが、次期学習指導要領に示される「深い学び」や「分析し表現する能力」の育成には一定の成果が生徒の感想などからあったように思われる。限られた授業時間だけでは多様化し多岐にわたる学習内容からして限界がある。学園祭やLHRさらには総合的な学習の時間などうまく活用しながら、次期学習指導要領が掲げる目標を達成していかなければならないと考える。この夏、幼・小・中学校の次期学習指導要領がすでに公表されたところであるが、今後公表される高校教育における次期学習指導要領を我々教員は大いに期待しつつ、早急な対応策を検討する必要があるだろう。



写真①
全球スクリーン
(直径1m)



写真②
地球儀作成で使用した
材料



図① 教室見取り図



写真③
投影の様子
宇宙に浮かぶ地球



写真④
地球儀作成の様子



写真⑤
展示会場の様子



子どもの豊かな学びを支える —専門性向上のための校内研修体制の構築—

岡山県立岡山支援学校 校長 篠田 千枝

1 はじめに

本校は、肢体不自由教育を行う特別支援学校である。小学部、中学部、高等部が設置されており、その教育課程は小、中、高に準ずる教育課程、知的障害を有する児童生徒の教育を行う教育課程、自立活動を中心とした教育課程で学習が進められている。

したがって、本校に勤務する教職員は、通常の学校の教科指導や生徒指導と併せて知的障害教育や肢体不自由教育の専門性を持って教育に当たることが求められる。140名近い教職員の内、毎年約40名の異動者があり、全教職員の50%近くが本校経験3年以下という現状の本校にとって、授業改善と教職員の資質・専門性の向上は喫緊の課題である。

そこで、学校組織マネジメントの視点から、プロジェクトチームを設置し、研究と研修が相互に関連し、効果を上げる研修体制の構築や継続的な人材育成に繋がる体制整備を行った。ここでは、平成28年度の取組を中心に述べる。

2 学校の現状と課題

教職員は年間に、数多くの研修を受講している。平成28年度は、校内だけで41回の研修を実施した（ミニ研修を除く）。

【校外研修】
 ○県教育委員会による経験年数や分掌に関わる悉皆研修
 ○県総合教育センターや各特別支援学校が実施する研修（希望者研修）

【校内研修】
 ○コンプライアンスや危機管理等の全員研修
 ○経験年数やニーズに応じた希望者研修
 ○各部が実施する部研修
 ○時間外に実施される教職員主体によるミニ研修

先に述べたように、経験年数、障害種の専門性も異なる教職員の実態に応じた研修を準備し、効率的・効果的に実施していくためには、本校の教育に必要な専門性を明示するとともに、教職員各自が自分の強みや弱みを自覚し、年間の研修内容に見通しを持ち、目的意

識と主体性を持って学び、研修が授業改善に活かされていることを実感できたり自己成長を感じられたりできる仕組みづくりが重要だと考える。

そこで、具体的な課題として

- 学校教育目標の下、学校経営計画に喫緊の課題である授業改善や教職員の資質・専門性の向上を明示するとともに取組の見える化を図ること
- 学校経営計画が研修や研究係だけでなく、学校全体として取り組まれ、教職員全員の共通理解と主体性により、効果的に進められるよう、推進のためのプロジェクトチームを校内組織に位置付けること
- 本校に求められる専門性とその内容を明示すること
- 研修が主体的取組となるよう自己の強みや弱みを把握できるチェックシートの作成と活用を図ること
- 校内研修が教職経験やニーズ、学校課題に応じたものとなるよう精選し、研修と授業改善の往還がなされる研修方法の工夫を行うこと

を挙げ、図1に示すように、Cap-Doサイクルの中で、組織的に取組を進めることとした。

3 取組の実際 ～見える化をキーワードに～

(1) 学校経営計画の見える化

喫緊の課題である授業改善と教職員の資質・専門性の向上を学校経営計画に明示するとともに、具体的に推進する組織としてプロジェクトチーム（教育課程改編委員会）を学校組織に位置付け、共通理解を図った。

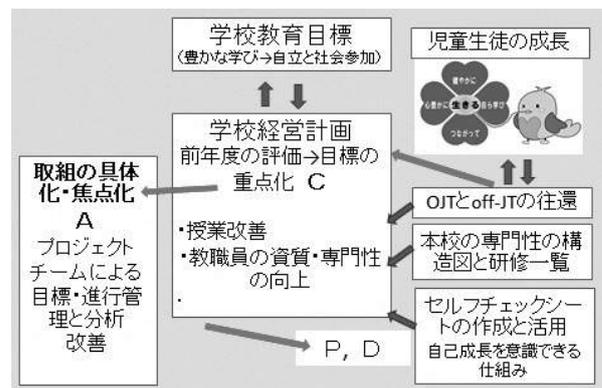


図1 研修体制等の組織マネジメントとCap-Do

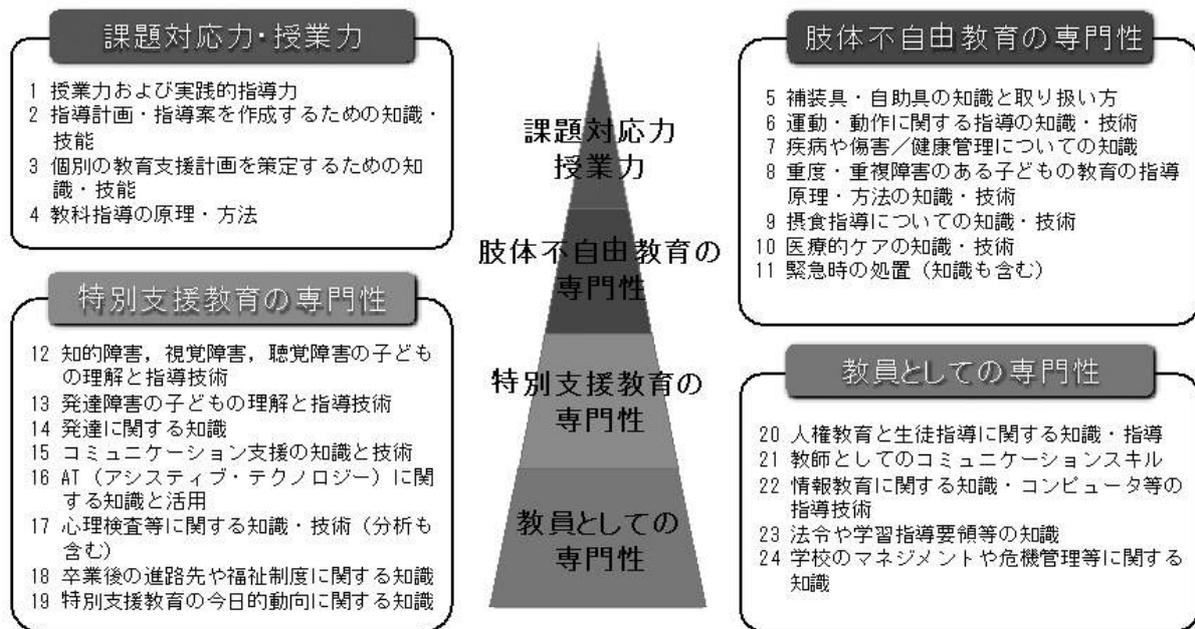


図2 本校の教職員に求められる専門性

プロジェクトチームのメンバーは、主幹教諭を中核とし、指導教諭、総括教務、研究、研修、自立活動、進路指導等分掌のチーフと管理職で構成している。各チーフは、研修と実践の往還を視点に「誰が、何を、どのように、計画・実践するのか」を明確にし、目標を焦点化して年間のスケジュールと進行管理を行った。その際、研修等が効率的に実施されるよう、研修内容の精選や時期、校内外の講師の招致と研修形態（講義、演習、継続的な授業への助言・指導）の工夫等についてプロジェクトチームで協議し、「学校経営目標・計画に基づく主な分掌の取組スケジュール」として明示し、内容や進行の管理を行い、分析と評価を行った。

(2) 本校に求められる専門性の明示

「何を学ぶのか」を明らかにするため、指導教諭を中核として、求められる専門性の構造図（図2）を作成し、当該年度に実施する研修内容や参加対象を領域に関する24の項目と対応させた一覧表を配付した。この一覧表は参加した研修をチェックできるようになっており、各自が年間の研修に見通しを持つとともに受講状況を把握できるものとなっている。また、専門性に関する県内外の研修を領域と対応させ校内Webに掲示し、ニーズに応じて参加できるようにした。

(3) 校内リソースの把握と活用

知りたいことが身近な同僚から気軽に聞け、授業改善への助言が継続的に得られる環境づくりは、非常に重要な課題である。「教えることは学ぶこと」と言われるように、幅広い専門性を有した教職員が得意を生

かして学び合い、高め合えることを目的に全教職員に趣味や特技も含め、指導できる専門的内容についてアンケートをとり、領域ごとにまとめた。作成した一覧表は、校内Webに公開し活用を促した。

(4) 自分の強み、弱みを把握できるセルフチェックシートの作成と活用

教職員の自己成長の把握と主体的な学びを目的にセルフチェックシート（図3）を作成した。これは、専門性の領域や項目における状況を5段階評価するもので、年度当初と年度末にチェックすることで、各自が成長と課題を把握することができる。

肢体不自由教育の専門性に関するセルフチェックシート 提出用 岡山支援学校

所属学部	教職経験年数	特別支援学校勤務	肢体不自由学校勤務
部	年目	年目	年目
授-1. から 教-2 4. までの評価項目について次の5段階で自己評価します。			
5 : 他の先生に説明したり教えたりできる程度の知識・技術が身についている(校内研修で講師ができる)			
4 : 学年やグループなどの小集団であれば、ある程度は他の先生にも説明したり教えたりできる			
3 : 身につけた知識や技術を日々の学習活動に生かしている(生かすことができる)			
2 : (ふだんの学習活動の中で困らない程度の)基本的な知識・技能は身につけている			
1 : 日々の学習活動の中で知識・技術の不十分さを感じている			
*備考欄には各自「さらに伸ばしたいこと：+印」、「課題となっていること：-印」など記入して研修選択や研修参加・研修資料採集の際に活用してください。			

評価項目（本校の教育を支える専門性）	自己評価	備考欄
授-1. 授業力および実践的指導力	5-4-3-2-1	
授-2. 指導計画・指導案を作成するための知識・技術	5-4-3-2-1	
授-3. 個別の教育支援計画を策定するための知識・技術	5-4-3-2-1	
授-4. 教科指導の原理・方法	5-4-3-2-1	
肢-5. 補装具・自助具の知識と取り扱い方	5-4-3-2-1	
肢-6. 運動・動作に関する指導の知識・技術	5-4-3-2-1	
肢-7. 疾病や傷害／健康管理についての知識	5-4-3-2-1	
肢-8. 重度・重複障害のある子どもの教育の指導原理・方法の知識・技術	5-4-3-2-1	
肢-9. 摂食指導についての知識・技術	5-4-3-2-1	
肢-10. 医療的ケアの知識・技術	5-4-3-2-1	
肢-11. 緊急時の処置（知識も含む）	5-4-3-2-1	
特-12. 知的障害、視覚障害、聴覚障害の子どもへの理解と指導技術	5-4-3-2-1	
特-13. 発達障害の子どもへの理解と指導技術	5-4-3-2-1	

図3 セルフチェックシート（一部抜粋）

(5) OJTとoff-JTの往還

研修は、児童生徒の安全な生活や成長に繋がってこそ有意義なものとなる。そのためには、研修をどのように進めるかなど研修の仕組みづくりが重要である。

① 外部講師の活用と授業改善等の工夫

求められる専門性と授業改善等への往還として各領域にに応じて、大学職員、医療・福祉関係職員、県総合教育センターの指導主事を招致し、講義や演習、教科指導や日常生活動作（運動動作や摂食等）への指導・助言が継続的に得られるようにした。

② 校内の専門家の活用と授業改善等の工夫

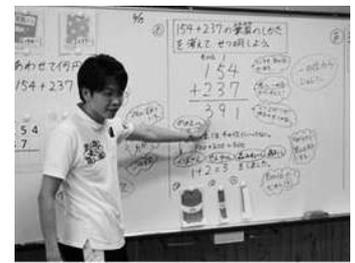
初任者と5年目経験者といった校内チーム制の活用に留まらず、主幹教諭や指導教諭、進路指導主事、自立活動担当者や教職員のニーズに対応した専門家が校内講師となって講義や演習を行うとともにニーズに応じて授業参観等と指導・助言、事例検討を継続的に進めるようにした。また、授業研究やUDに配慮した教室環境、AT、ICTの活用による分かりやすい授業の工夫など教職員全員で情報共有したい内容については研究係を中心に学び合える機会（教育課程別の小中高縦割りの授業参観と研究、ワークショップ等）を設定し、その様子を通信や校内Webに掲載した。



図5 めざす児童生徒像の見える化

例えば、中間面談等の場面では、教職員が語る言葉の中に「組織として」「学校課題解決に向けて」「チームとして」「学校は」など組織の一員としての自分を意識している文言が多く聞かれるようになった。

また、OJTとoff-JTの往還が促進される仕組みを作ったことで、外部講師による今日的な課題に対する講義、授業づくりへの継続的な指導、指導教諭や同じ課題を持つ教職員



チームによる授業検討により授業改善が図られた。右の写真は、授業の板書を基に、授業を振り返っているところである。この研修では、自分の意見を出し合い、友達の見解を取り入れながら課題解決に向かう、深い学びの授業を実現するために授業をどう改善していけばよいのか積極的な意見交換ができた。

研修や研究係の協働によりOJTとoff-JTの往還ができる時間や内容等の進行管理がなされ校内チーム制が有効に働いたことが、授業改善や専門性の向上に繋がったと考えられる。これは、セルフチェックシートの自己評価の得点の合計を年度当初と年度末で比較してみると、教職員全体では、約2.7ポイントの上昇が

4 成果と課題

本研究の成果としては、次の2点が挙げられる。

- ①学校課題解決に向けた組織的参画意識の向上
- ②OJTとoff-JTの往還の促進による専門性の向上

プロジェクトチームの設置による「組織体制整備」と校内Webや校内掲示を用いた「各分掌の活動内容及び進行状況、めざす児童像の見える化（図4、5）」を行なった結果、教職員の組織に対する意識に変容が見られた。

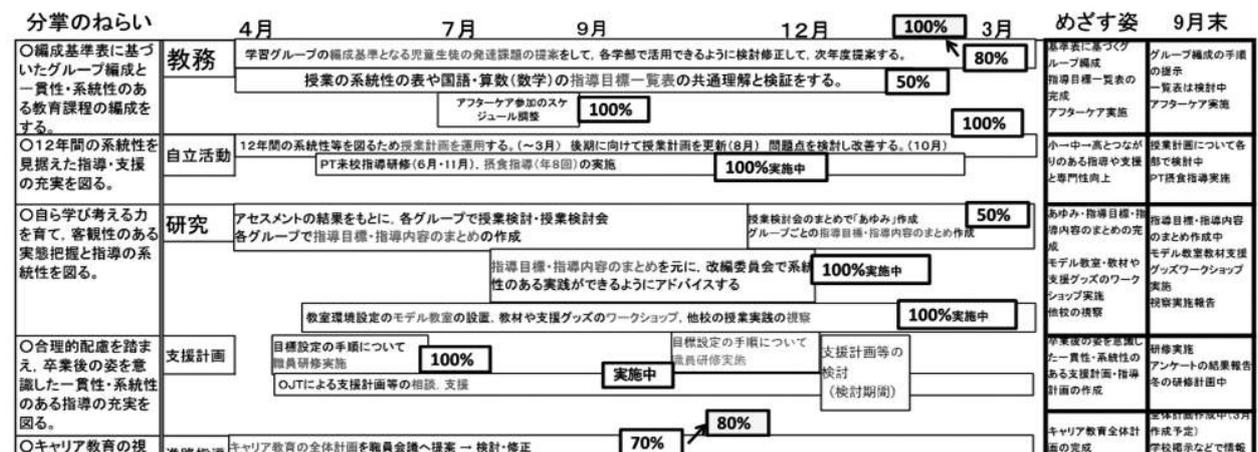


図4 各分掌の活動内容及び進行状況の見える化（一部抜粋）

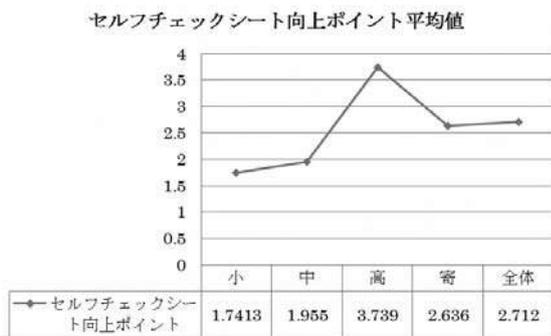


図6 セルフチェックシートの評価点

見られたことから明らかである(図6)。

また、平成28年度末、校内研修を受講した113名全員にアンケート調査を行なった結果、実施した年間41回の校内研修の回数については約81%が、内容については約75%が適切であったとの回答があった。

しかし、自由記述では、勤務年数の短い教職員からは「運動動作や摂食に関する知識や技能を身に付ける研修をもっと行いたい」との意見も散見された。

実際、平成28年度は、勤務時間外にも関わらず、ミニ研修(自主研修・1回30分程度)が年間26回開催され、延べ参加者数は450名にも上った。ミニ研修の内容は、肢体不自由教育の基礎的内容や知識・技能に関するものが中心で、校内の専門家が講師を担当した。これは、OJTとoff-JTの往還による教職員の研修意欲の向上の現れと言えるが、見方を変えれば、本校の校内研修における課題とも考えられる。すなわち、「日常生活動作、肢体不自由教育の基礎について高いニーズがあるが、勤務時間内で実施する校内研修で十分な対応ができていない」「校内講師を担う人材が限られており、組織的・継続的な人材育成の必要性がある」ということである。

5 2年目の課題と取組

これまで構築してきた専門性向上のための校内研修体制は、平成29年度からも継続し、ニーズが高かった運動動作や摂食などの研修を充実させるため、新たに「課題別サークル研修」をスタートさせる。教職員は、各自のニーズに応じて4つのサークル(摂食指導、運動・動作、こころとからだ、感覚統合)を選択し、同一サークルに複数年所属し、専門性を深める。

図7は、摂食指導を研修課題に選んだ場合の3年間の研修のイメージを表したものである。サークルのチーフは、研修の運営推進の中核となり、サークル内に複数ある班のリーダーから次年度のチーフを育成す

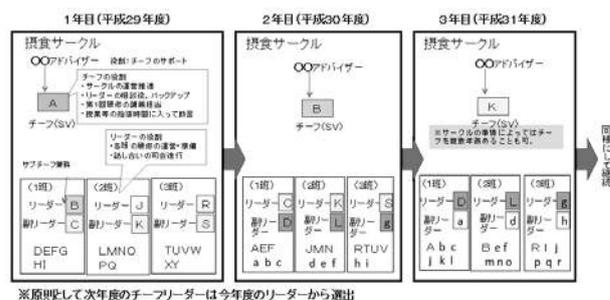


図7 継続的なリーダーの育成

る重要な役割を持つ。これを毎年繰り返していくことで、「ミドルリーダー等の継続的な人材育成」が図られるだけでなく、研修に参加した全教職員の「肢体不自由教育に関する専門性の向上」が期待できる。

実際、研修の中で日々の悩みを相談し、それを受け、リーダーが日々の授業等の様子を見て助言することで、より適切な支援ができてきているなど、教職員の互いに学び合い高め合う姿がさまざまな場面で見られるようになってきている。



※写真(左)は、「運動動作」サークル研修(第2回/年間4回予定)の一場面。※右足の緊張が強い生徒がどのように下肢に力を入れて移動しているのか体感し、支援方法を学んでいる。

6 おわりに

子どもたちの豊かな学びを支えるため、教職員の専門性向上に向けて組織で研修体制の構築を図ってきた。

これまでの取組から組織マネジメントは、課題解決に導く教職員の使命感や目的意識、目指す姿を描き、実現に向けて修正しながら協働して解決に導く思考力や行動力に支えられていることを痛感した。

働き方改革が強く求められている中、新学習指導要領の理解と対応、キャリア教育の充実など課題は山積している。今後も教職員が、豊かな同僚性と個々の専門性を発揮しながらCap-Doサイクルで組織的な取組を推進してくれることを期待している。

参考文献

- 1) 文部科学省(2015):「これからの学校教育を担う教職員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員養成コミュニティの構築に向けて～(答申)」
- 2) 杉野学(2015):『特別支援学校における学校組織マネジメントの実際』ジヤース教育新社
- 3) 岡山県教育委員会(2015):「岡山県公立学校教員等人材基本方針」
- 4) 岡山県立岡山支援学校(2017):実践研究のあゆみ第40号

著 書 部 門



『北川先生の作文教室』

退職者 北川 久美子（備前市吉永町金谷）

著 者 北川久美子

発 行 所 武蔵野書院

発行年月日 平成29年6月20日

I はじめに — (研究の動機)

① これまでの取り組み

私は11年前から、中学校の現場で、自分の想いを伝える文章表現活動に取り組んできた。そして、5年前からは、私立山陽女子中学校、県立和気閑谷高等学校に勤務する傍ら、公民館等で小学生対象に作文教室を担当している。その経験から、このテキストの中で、作文を書くことの大切さや難しさを伝えたいと思い本著を執筆した。

② 作文の宿題は頭痛の種

夏休みの宿題が出されると、保護者は頭を抱え、子どもを連れて作文教室にやってくる。特に小学校低学年の保護者は子ども以上に頭を悩ませている。彼らが藁をもつかむ思いでやってくるのが、私にはひしひしと伝わってくる。ましてや、1年生の子どもを持つ保護者は、その悩みも深刻だ。やっと、日記程度の文章が書けるようになったばかりなのに、読書感想文をどうやって書かせればいいのか・・・と。

③ 小学校低学年の児童には、親の手助けが必要

過去にこんなことがあった。ある公民館での作文教室に、小学校1年生の孫と一緒に来た祖父母に教室の最後に感想を求めたところ、「私たちにちょうど良い教室だった」と言った。高学年の子どもは、一人で参加し、私の説明を聞いて書くことができるが、低学年、中でも1年生は一人では理解することが困難だ。そこで、私の作文教室では、1年生など低学年には、保護者も一緒に参加してもらっている。

④ 作文の書き方のテキストがあれば

作文教室で、小学生を教えるようになって9年になる。私の中で書き方のテキストがあればという思いが年々強くなってきた。一斉授業の中で高学年と同じ資

料を使っていると、漢字が読めないと泣き出す1年生が必ずいる。また、宿題の枚数のきまりも違う。テキストの必要性を感じているのは、どうやら私だけではないようで、公民館の担当者からも、保護者からもそのような声を度々聞くようになった。このように、発達段階に合わせた作文練習帳が今必要とされているのである。

⑤ 私のモットー

さて、作文が苦手な子どもはたくさんいるが、苦手だといっても、皆書きたいことはあるはずだ。その思いをどうやって引き出すかが、私や保護者の腕の見せどころだと考える。

作文教室でいつも呼びかけていることは、「上手に書こうと思わない」「素直に、情景が浮かぶように詳しく」ということだ。何といても、自分の想いを誰かに伝えることが、作文の目的の一つだ。だから、自分や他の人を傷つけるような言葉でなければ、自由に何を書いても良いはずだ。

その時、保護者には広い心で子どもの気持ちを受け止めてほしいものだ。また、子どもの書いたものを否定しないでほしい。否定されると子どもたちは書かなくなる。そうではなく、もっと書こうと思うように支えてほしいと願う。



II 本書の構成

- (1) 作文の書き方の流れ
- (2) 書くためのテーマ
 - ① 私の名前
 - ② 自分の身の回り
 - ③ 好きな本・好きな言葉・尊敬する人
 - ④ 将来の目標
 - ⑤ 夏休みの宿題 800字
ア、生活文
イ、読書感想文
- (3) 推敲とは、推敲の流れ
- (4) 清書
- (5) 原稿用紙の使い方
- (6) 付録
 - ① 新聞投稿文例
 - ② 小学校1・2・3年生が習う440字の漢字表

※(2)の書くためのテーマ①私の名前から④将来の目標までは、原稿用紙に下書きを書くための「型(フォーマット)」を紹介している。

⑤からは、型を使わず、下書き用原稿用紙2枚(800字)に書くようになっている。

III 本書の特徴

- (1) 作文の書き方の流れを示した。

作文の書き方の流れ

- ①何について書くかを決める。(感想文の場合、本を読む)
- ②そのことについて感じたこと、思ったことについてメモを取る。
- ③で取ったメモをつなげるようにして作文の「下書き」をする。
- ④で書いた「下書き」を元に「推敲」する。
- ⑤で「推敲」した「下書き」を別の原稿用紙に丁寧に「清書」をする。

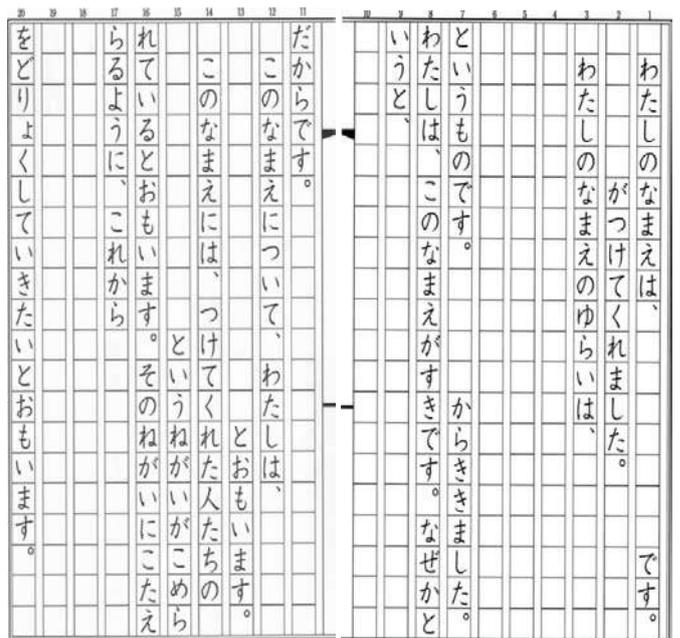
※実際の作文教室でも、この流れに沿って⑤の清書まで行っている。そうすることで、作文の書き方が定着し、何度か繰り返すうちに文章力が向上してくる。また、原稿用紙の使い方も自然に定着してくる。

- (2) 「型(フォーマット)」の紹介

(2)の書くためのテーマ①私の名前から④将来の目標までは、原稿用紙に下書きを書くための「型(フォーマット)」を紹介している。

この型を参考にすれば、簡単に作文を書くことができる。また、400字の原稿用紙をびっしり埋めることができる。

ただし、型にはめ込むより、自分らしい文章を書きたい子どもの場合は、型にこだわらず、自由に書かせると良いと考える。



(3) 夏休みの宿題を済ませるために役立つテキスト

書けないと考える。まず、自分が感想が持てる本を選ぶところからがスタートだ。

① 生活文

ア、明るい家庭づくりの作文（楽しい家庭行事）

夏休みの家族との楽しかった出来事や、その中で特に印象に残ったこと、或いはその時の家族それぞれの役割や、気づいたことなどを、工夫して書かせる。

イ、お米の作文

毎日食べるお米のことについて調べたり、もし、身近にお米を作っている人がいれば、苦勞する点はどこなところか、また、うれしいことはどこなところかをインタビューさせるなどして書かせる。

ウ、交通安全の作文

普段の通学路で危ないと感じたことや、注意すべきことなど、交通安全について考えて書かせる。

エ、その他

その他、勉強のこと、友人のこと、毎日のラジオ体操のことなど、自由に書かせる。

※本著を使って、小学校低学年の児童が一人で書くこともできるが、保護者がテキストを理解し、子どもたちが作文を書くことを支援できるように工夫している。

(4) 自分自身を見つけることができる作文のテーマ

① 私の名前

自分の名前は誰が付けてくれたか、その名前にはどんな願いが込められているか。家族に聞いてみると、新しい発見や家族がどれほど自分を大切に思っているかがわかるだろう。それだけでなく、自分の名前に誇りが持てるだろう。

② 自分の身の回り

私たちは人とのかかわりの中で生きている。回りの人とのかかわりを書くことは、自分自身を見つめることにつながっている。

家族、友達、先生、身の回りにいる気になる人（お店の人、通学路で会う人等）とのかかわりを書かせる。また、自分の住んでいる町について書かせる。

③ 好きな本・好きな言葉・尊敬する人

好きな本や言葉のどこが良いのか、尊敬する人のどこが好きか。将来その人のようになりたいか。等を考えさせて書かせる。

④ 将来の目標（夢）

自分の将来の目標や夢を考えるために、自分の長所やどんなことに向いているかを考えさせ、整理させて作文を書かせる。

※以上のテーマは、今まで気づかなかった自分自身を見つめるために必要なテーマである。それらについて書くうちに、子どもたちは自分を肯定し、自分に自信を持つことができるようになると確信している。

※上記のテーマの作文には、それぞれメモのワークシートが付けられているので、ワークシートの項目を埋めてメモを完成させ、それをつなげるように原稿用紙に下書きをさせる。そして、推敲させ、丁寧に清書させる。

② 読書感想文

感想文の流れ
面白い本を選ぶ。

本人が選んだ本がベストだが、保護者が選んだ本でも、必ず読んで理解してあらすじが自分で書けることが必要だ。本に対して自分がどう感じたか、どう考えたかを話せなければ



(5) 推敲から清書へ

本著のP46からP51には、推敲の仕方や原稿用紙の使い方や清書の仕方がまとめられている。それらを参考に、下書きしたものを何度も推敲し、原稿用紙の使い方に従って丁寧に清書することができる。子どもだけでなく、保護者にも、学校の教師にも、一般の人にも大変役立つ資料である。

そして、一度だけでなく、何度も、下書き→推敲→清書のサイクルを繰り返すことで、書くことへの抵抗感をなくすだけでなく、書くことに慣れ、書くことの喜びを味わうことができるようになると確信している。

(6) 付録として

① 新聞投稿文例

作文教室では、書いた作文を新聞に投稿している。掲載されたものの中で、好例を2例掲載した。



② 小学校1・2・3年生が習う440字の漢字表 (2017年現在)

引	百	町	先	人	耳	五	学	一
羽	文	天	早	水	七	口	気	石
雲	木	田	草	正	車	校	九	雨
園	本	上	足	生	手	左	休	四
逸	名	二	村	青	十	三	玉	王
何	目	日	大	夕	出	山	金	音
科	立	入	男	石	女	子	空	下
夏	力	年	竹	赤	小	四	月	火
家	林	白	中	千	上	糸	犬	花
歌	六	八	虫	川	森	字	見	貝

IV 本著についての書評等

① 日本教育新聞書評欄から

・読み手としては、主に小学校1年生から3年生の保護者を想定している。宿題として出された作文、読書感想文をどう子どもに書かせるかという視点でまとめているが、教員にとって参考になる部分も多そうだ。

・賛否が分かれるかもしれないが、本著では作文の「型」を身に付けることを重視。部分的に言葉を印刷した原稿用紙のページがあり、空欄を埋めれば400字の作文がとりあえず完成する。「作文練習帳」でもある。

・推敲のページが面白い。下書きを声に出して読むことを勧める。「大切ところは詳しく、大切でないところは簡単に」など細かい助言も多い。

(2017年8月28日 佐原啓仁記者著)

② 読売新聞気流面から

・新聞に掲載された教え子の投書も収めた。北川さんは「書きたいことがあっても言葉や文章にできない子は多い。その思いを引き出し、自由に書けるようになるためにテキストが役立てば」と話す。

(2017年7月11日 満田育子記者著)

V おわりに

文章修行は、人間修行でもあると言われている。一度書いたら終わりではない。宿題が済んだら終わりではない。自分を磨くために、これからも日々の生活を綴って行ってほしい。

作文教室では、自分の文章を磨くために、新聞への投稿を勧めたり、様々な作文コンクールへの応募を勧めたりしている。中には、度々投稿が新聞に掲載されたり、作文コンクールで優秀な賞に輝いたりする子どもがいる。その子どもたちは、次は〇〇賞に入賞しようなどと、自分の課題を見つけて、作文を書く喜びを感じている。

「継続は力なり」子どもたちは今、文章修行の出発点に立っている。保護者や教師は、その子どもたちの文章修行のサポートをしなければならないのだ。書けない子どもを放っておいてはならないのだ。

平成29年度「日教弘教育賞」

最優秀賞

(学校部門)

優秀賞

(学校部門・日教弘岡山支部推薦論文)

子どもの学びの姿から考える探究型の授業づくり

— 全職員で取り組む学校研究体制の構築を通して —

山形県長井市立長井南中学校
校長 土屋 正 人

1. はじめに

本校は、全校生徒412名、学級数16学級、職員数39名の学校である。職員の年代は様々であるが、同僚性を高め、子どもを中核に据えてよく話し合うことを大切にして教育活動を行っている。学年部会、分掌部会、職員会議はもちろんのこと、日常の関わりの中で、先輩教師が若手の指導を尊重しつつ、助言するという互いに学び合う風土が根づいている。

一方で、教材研究の時間が足りないという悩みを多くの職員が抱えていた。子どもたちが「わかった、できた」と目を輝かせるような授業をしたいという思いは、全員に共通しているものの、十分に実践できないでいたのである。

そこで、平成27年度から、新たな研究主題で校内研究を活性化し、授業を柱に、すべての教育活動で個々の生徒に自己存在感・共感的な人間関係・自己決定を実感させるという学校経営の方針の下、教職員一丸となって授業改善に努めてきた。

2. 本校が進める探究型学習

(1) 学校研究主題

関わりの中で、主体的に課題解決をめざす授業づくり
～子どもの学びの姿から考える～

(2) 主題設定の趣旨と研究の積み上げ

変化の激しいこれからの社会を生き抜いていくためには、強い関心や意志を原動力に、知恵を駆使しながら、他者と関わり、目の前の困難を乗り越えていく力が必要とされている。

このような力を育てていくために、「主体的・対話的で深い学び」の実現が、次期学習指導要領の大きな柱となっている。「主体的・対話的で深い学び」とは、単に活動性が高いだけのものではない。汎用性の高い資質・能力の育成に向けて、深い思考を可能にする探究過程と知識の獲得が伴う学びである。「探究型学習」も、まさにこのような学びをめざすものであり、本校

でも、探究型の授業づくりに取り組んできた。

初年度は、各教科で探究型学習が有効である単元を検討し、生徒にとって必要感のある課題設定や協働的な学びのあり方に重点を置いて研究を進めた。次年度は、全教科全学年で年1回は探究型学習に取り組んだ。



土器のレプリカを触り、
新たな疑問が生まれる
(1年社会)

子どもたちが笑顔でいきいきと学び、主体的に課題解決をめざす姿が多く見られるようになった。



自分たちで考えた検証実験に夢中(3年理科)

一方で、次のような課題も見えてきた。

- ▲自分の考えを整理し相手にわかりやすく伝える、自分の言葉でまとめやふり返りを書く等の表現力の育成。
- ▲教科のねらいにそったペア・グループ学習の仕組み方や思考を深める手立て、ふり返りの場のあり方についての検討の必要性。
- ▲子どもの学びや変容を見逃さない見取りと個の発言を全体に返して考えさせる授業力の育成。



これらの課題をふまえ、3年目にあたる今年度の学校研究を次のように進めることにした。

<カリキュラムマネジメントによる授業の取り組み>

- ① 全教科で「探究型学習」を年間計画に位置付け、実践を進める。
- ② 教科を横断する「探究型学習単元」を全体の中に位置付け取り組む。

<子どもの学びを見取り、検討する事後研究会>

- ③ 事後研を重視し、授業の中でのある子どもの行動を見つめ、行動の根拠等から個の学びを探り、それを基盤とした生徒理解、指導の妥当性、教科の本質に迫る指導のあり方を探究していく。

(3) 研究の視点

- ◆探究型学習にふさわしい単元（教材）開発と単元ベースのカリキュラムマネジメント
- ◆主体的・協働的な学びによる課題解決学習を進める
 - ① 生徒にとって必要感のある課題設定
 - ② 協働的な学びの設定と工夫
 - ③ ふり返りの場の工夫
- ◆子どもの学びの姿から考える事後研の工夫

3. 学校研究の活性化のために

(1) 全校体制による年3回の授業公開

早稲田大学の小林宏己先生を年3回招聘し、授業研究会では全ての教科と道徳の授業を公開している。事前研も教科ごとと研究推進委員会での2回実施し、様々な立場の意見を聞きながら授業を練り上げている。

提案授業がない教員も、個人研究プランを立てて研究実践を積み上げ、年度末に成果と課題を明らかにして実践集を発行する。探究型学習は先進的な取り組みでもあるので、研究推進委員会が他校の優れた授業実践を紹介するよう努めている。

(2) 子どもの学びの姿や変容を見取り、子どもの姿から指導を考えるワークショップ型の事後研の取組

一人ひとりに確かな「学び」を成立させることが、授業の核心である。その子の学びを、子どもの姿から確かに見取り、その姿から教材や題材のとらえや指導法の検討をしていくことこそ、「個の学び」と「教科の本質」「生徒観」「指導法」をつなぐ大切な視点である。これは、探究型学習を進める上でも、肝となる。そこで、事後研でも指導法の善し悪しではなく、子どもの学びの姿が多く語られるよう以下のことに取り組んだ。

改善策1 「本時は、誰のための授業か」を考え、具体的な手立てを明確化

授業者は抽出生徒を2人あげ、次のことを指導案に明記する。

- ① この子の前時までの学びの姿（思い・考え・問いかけ・つまづき・求めなど）
- ② 教師が本時に願う（見守る）この子の姿
- ③ 願いの具現化を支える指導の手立て

【実際の指導案より（3年社会）】

- ① 集中力が続かないことがあり、1回の指示で取りかかれないことが多い。社会科に対する興味関心は比較的高く、積極的に発言するが、理由や根拠が曖昧なことが多い。事前アンケートで、北方領土は「北海道のもの」と回答しているにもかかわらず、どこの国の領土かという設問には「ロシア」と書いている。
- ② グループでの資料の読み取りを通して、日本の領土であるという根拠が持てる。
- ③ 資料を読み取る際の視点を明確に持たせる。グループ学習で他の意見をよく聞かせて、自分の考えに反映できるよう声がけする。

改善策2 参観者の「誰をどこで見なのか」という目的意識の変革

- ・授業を参観する際は、抽出生徒もしくは一人の生徒を決めて、その子との関係の中で周りの子を見取る。
- ・子どもの表情がよく見える前方や机のすぐ側に寄り添ってつぶやきを拾い、子どもが書いた言葉や変容を見取る。
- ・抽出生徒の様子を記録する担当を決め、コピーを分科会で配付して活用する。また、動画も撮影し、授業者が振り返る手立てとする。

改善策3 事後研の進め方

黄の付箋に子どもの学びの姿、赤の付箋に成果、青の付箋に課題と改善策を書き出し、最初に子どもの



姿をあげてそれに対して教師の関わりや手立てはどうであったかを小グループで話し合う。研究推進委員は、グループの話し合いを

コーディネートし、研究主任は、授業研究後に視点に基づいた成果と次回の方向性を「学校研究だより」にまとめる。



全員が役割を分担して進める事後研

◎成果

子どもの学びの姿に着目して授業を参観し、事後研でも子どもの姿を語ることにこだわったことで、その教師の生徒観、極めて具体性を持った指導観が表出され、実感を持った教師間の学びが成立した。また、配慮が必要な生徒にとって『ないと困る支援』は、他の子にとっても『有効な支援』となるという授業改善の大切な視点に気がつくことができた。さらに、「なぜA君は、あのとき～とつぶやいたのか？」や「班の話し合いの中で、B君がこだわった意見を全体の場に出させるにはどうしたらよかったか？」という所から話し合いを深め、日常の授業改善にもつなげることができるようになってきた。

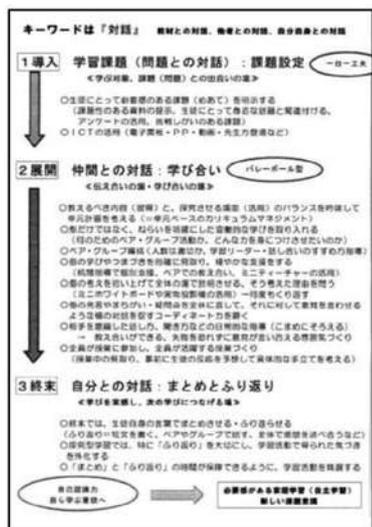
4. 子どもにとって大切なことは全員でそろえる

(1) ユニバーサルデザインを意識した掲示環境

子どもの視点で、教室環境を見直してみると、黒板の周りに様々な刺激があることに気づいた。そこで、学習指導部や特別支援コーディネーターで検討を重ね、ユニバーサルデザインを意識して学習意欲を高めるような教室掲示を全学年共通で行った。

- ①黒板には何も貼らず、全面を学習に使う。
- ②黒板周りの掲示をシンプルにし、生徒の集中の妨げにならないようにする。

(2) 日常の授業でも大切にすることを共通理解



日常の授業でも、生徒が主体的に学習を進めることができるように、課題を明示し、協働的な学びを取り入れ、生徒自身の言葉でまとめやふりかえりを行うという流れを大切にしている。

5. 研究の視点に基づく授業実践Ⅰ

美術科のデザイン思考の学習と総合的な学習の時間との合科型学習を設定し、郷土の魅力を主体的にPRできるようにした例

2年生の修学旅行で、「だがしや楽校 in 蒲田西口商店街」という交流体験学習を行った。これは、長井市の隠れた魅力について調べ、東京の人たちに伝え、特産品を販売するという活動である。

デザイン思考を取り入れた美術科の授業

十

自分たちのアイデアを実践する総合的な学習の時間

アイデアを出す場面は美術科の授業で行い、授業で取り組んだ発想や制作物が実際の活用場面、修学旅行でのプレゼンに結びつくように取り組んだ。デザインのプロセスは、問題点を見つけその解決策を考え、試作し、評価しさらに改良を加えるという循環をたどる。その際に、ブレインストーミングやマインドマッピング、KJ法などのアイデアを出すデザイン思考の方法を具体的に解説して行われた。このデザイン思考によって協働でアイデアを出し合う子どもたちの姿は、まさに探究的であった。



ボードに付箋を貼って動かし、意見を可視化

その後の、生産者への取材、パネルの作成、PRの仕方の検討、売上金の管理も子どもたち自身の力でいった。子どもたちは、声をはりあげ、道行く人に笑顔で話しかけ、自分たちが調べたふるさとの魅力を一生懸命伝え、心を届けようと意欲的に活動した。都内の関係者の方々からも大反響を頂いた。まさに、

かわりの中で主体的に課題解決をめざし、探究する姿がそこにあった。



かかわりの中で主体的に課題解決をめざし、探究する姿がそこにあった。

6. 研究の視点に基づく授業実践Ⅱ

3年間の学習内容を見据えたカリキュラムマネジメントを行い、日本が抱える大きな課題の解決に向けて議論させた例

3年社会科 「北方領土問題について考える」

(1) 本時の目標

北方領土は歴史的な経緯からも日本固有の領土であることを認識し、日本とロシア両国の立場をふまえて、平和的に解決するための方策を主体的に考えることができる。

(2) 探究型学習にふさわしい単元（教材）開発とカリキュラムマネジメントについて

本来は、地理・歴史・公民的分野で段階的に取り上げる学習内容であるが、歴史的分野の終盤で特設単元として扱った。そのことにより、子どもたちが北方領土について正しい認識を持ち、領土問題の解決のためにできることを主体的に考えることができると考えた。また、その後、公民的分野の学習の中で自分たちの考えを検証し、論点を整理しながら提案をまとめ、首相官邸のHPを通じて声を届けることで、社会に参画していく態度を養うことをねらいとした。

(3) 主体的・協働的な学びによる課題解決学習を進める手立て

今年4月の日口首脳会談のタイムリーな話題を取り上げ「北方領土は日本固有の領土なのにロシアに占拠されている」という対立軸に気づかせ、課題意識を持たせた。また「北方領土問題を平和的に解決するためにはどうすればよいかを考えて、安倍首相に提案しよう」という単元を貫く課題を設定した。

前時の学びの様子から意図的な班編成を行った上で、学習の流れや班・全体での話し合いの進め方を提示し、生徒の司会によって意見交流が活発に行われるよう促した。個の発言やグループの考えを全体に投げ返し、意見を言わせるような横の対話を促すコーディネートを行った。提案の際には理由も述べさせ、生徒の思考の根拠をはっきりさせるようにした。



ホワイトボードに最もよい提案と理由を記入

(4) 振り返りの場の工夫について

毎時間「ふり返しシート」を活用し、自己評価させると共に、感じたことを自分の言葉で書かせることで、学びの深まりを実感させることができた。

<p>◆今日の課題に興味を持って取り組むことができたか ④ 3 2 1</p> <p>◆個人活動やペア・グループでの意見交流に積極的に取り組むことができたか ④ 3 2 1</p> <p>◆授業を通して、わかった・学びがあったと感じたか ④ 3 2 1</p>	<p>北方領土問題についてこんなに真剣に考えたのは初めてなのでとても難しく時間がかかり話し合いでしたが、でも自分の思っている事を言ったり、いい意見が出た時のワクワク感などかとても楽しかったと思います。北方領土をもっと身近に考えて活動ができることを褒めたいです。</p>
<p>◆今日の課題に興味を持って取り組むことができたか ④ 3 2 1</p> <p>◆個人活動やペア・グループでの意見交流に積極的に取り組むことができたか ④ 3 2 1</p> <p>◆授業を通して、わかった・学びがあったと感じたか ④ 3 2 1</p>	<p>今日のグループごと提案をし合いました。何か新しいことをするということは新しい課題を見つがせていくことだと思いました。私たちは平和的な解決は望み、それ以上にある島の島民の声を、アソシエーションで発信したいです。</p>

7. 子どもの姿から見た成果

「だがしや楽校」の後も、子どもの探究は続き、活動を通して見えてきた長井市の課題を克服するためのアイデアを考え、実行した。その実践を中学校デザイン選手権でも表現力豊かに発表し、グランプリを受賞することができた。また、これらの活動を通して自信をつけた子どもたちは、生徒会役員選挙でも堂々と意見を述べるようになった。



公民の授業後には、「この話題であと2時間は議論できる」と話す生徒や、弁論のテーマに領土問題を選ぶ生徒も現れ、子どもにとって難しいテーマではあるが考えがいのある学習になったようだ。その後の公民の学習でも議論を重ね、子どもたちから出た提案の論点を整理していくことになった。

公民の授業後には、「この話題であと2時間は議論できる」と話す生徒や、弁論のテーマに領土問題を選ぶ生徒も現れ、子どもにとって難しいテーマではあるが考えがいのある学習になったようだ。その後の公民の学習でも議論を重ね、子どもたちから出た提案の論点を整理していくことになった。



理由をつけて首相官邸に提案



生徒による司会

今年度の「全国学力・学習状況調査」の生徒質問紙では、意欲やかかわりの項目の多くで「当てはまる・どちらかという当てはまる」と回答した割合が、全国平均を大きく上回っていた。（全国比）

学校に行くのは楽しいですか	+6.3
先生はあなたのよいところを認めてくれますか	+14.4
話し合う活動では、話し合う内容を理解して、相手の考えを最後まで聞き、自分の考えを伝えていたと思いますか	+8.5
授業の中でめあてが示されていますか	+8.8

8. おわりに

3年間の研究の積み上げにより、子どもの姿や職員の意識に確かな変容が見られる。校内研究の核心は、これまで手慣れてきた指導や、過去の手垢のついてきた指導に風穴を開け、新たな可能性を感じる授業を提案することである。それぞれの個性を持った職員が、「だがしや楽校」や「領土問題」で示したように、ダイナミックで学びのある活動になる単元開発を促すことは、極めて大切である。これからも、子どもの学びの姿を中核に据えて、全職員が自覚と必然性をもって授業改善に努めていきたい。

児童の「才能の最大化」を引き出す学校経営の可能性

— 教職員の意識改革を目指して —

富山県南砺市立井口小学校
校長 山下 透

1 はじめに

本校は富山県砺波平野の南端に位置する45人の小規模学校である。校区は平野部と山間部に分かれるが、居住区は学校を中心に2キロ圏内とコンパクトであり、全校児童が徒歩通学である。地域の教育力は高く、保護者も協力的である。しかし、近年の児童減少で学校の存続への危機感があり、地域の人が期待する「魅力ある学校」の創造が必要である。児童は仲よく礼儀正しく素直である。また、知・徳・体のレベルが高く、高い可能性を感じることができる。温かく伸び伸びした環境はこの学校が長年培ってきた最大の魅力であり、この環境の中で、児童は自分の才能を最大限に伸ばす、そんな「魅力ある学校」を目指していきたい。

そこで、児童の具体的な成長の目標として、「圧倒的な学力の育成」「圧倒的な体力の育成」を掲げ、「才能の最大化」に取り組む。そこには、従来の常識にとられない教職員の意識改革が必要である。教職員の意識改革を進めながら、協働性を大切にしたい学校経営の可能性を追求したい。

2 研究の視点と研究内容

(1) 児童の見方を見直すことによる意識改革

- ・スチューデントファーストの視点

(2) 教育活動を見直すことによる意識改革

- ・「何をするか」から「何のためにするか」へ
- ・困難をプレゼント

(3) 小規模校の活動を見直すことによる意識改革

- ・「丁寧な指導」からの脱却
- ・下級生を上級生のライバルに

3 研究の実際（意識改革の具体例）

(1) 児童の見方を見直すことによる意識改革

- ① スチューデントファーストの視点（よい小学生の育成より自立した社会人の育成を考える）

年度当初から教職員にはスチューデントファースト（自立した社会人を目指す時、今の児童に何が必要か）

の視点で児童の実態を捉えることを話してきた。本校の児童は、知・徳・体のレベルが高く、いわゆるよい小学生であり、学年相応の力を持った児童が多くいる。しかし、本校が目指していくのは、学年相応の力で満足している児童ではなく、自立した社会人を目指すための課題に対して、今以上の可能性に対して挑戦しようとする児童である。つまり、自立した社会人になるための伸びしろは無限にあると考える。この視点が「才能の最大化」の基本理念となる。この視点から児童の実態を捉えるようになってきたことで、教職員からは「〇年生だから、まだ小学生だから」という発言は姿を消して、今もっている力以上のレベルアップが図れる教育活動の展開を考えるようになった。

(2) 教育活動を見直すことによる意識改革

- ① 「何をするか」から「何のためにするか」へ（全ての教育活動に決まった形はない。形は私たちの心の中に。）

毎年、隣接する中学校と運動会や学習発表会を合同実施してきた。しかし、昨年度までは小・中学校それぞれにテーマがあり、予行は別に実施するなど、一体感に欠けていた。そこで、一体感と自主性の創出を目的に下記の表のように計画の見直しを図った。

（運動会：前年と目的を明確にした今年との比較）

項目	前年度	今年度
テーマ	別々で立案	合同テーマを立案
企画	別々で企画	小中の代表者が話し合って全体企画運営を立案
合同競技	なし	児童会生徒会による小中合同競技を2種目実施
一体感の創出	予行演習、係活動は別に実施	・色団毎でのランチルーム会食の実施 ・勝ちどきコールを競技者・応援席で同時実施 ・合同予行演習の実施
主体性の創出		・会食後を団活動の時間として自由裁量に利用 ・小学生も競技練習を中心とした自由裁量の時間を設置

目的が変わると運動会の形が変わった。小・中学生の一体感と各団毎の一体感がそれぞれに表れ、応援席の熱い声援を背に全力で運動する児童生徒の姿が見られた。例年とは違う運動会全体の活気は学校の新たな挑戦として保護者や地域の人に高評価をいただいた。



児童と生徒との合同会議



新しくできた合同種目

また、児童生徒の一体感を創出するために中学校の教職員との綿密な話し合いが例年以上に行なわれたことで、教職員同士の一体感が生まれ、その後の小中連携をスムーズにさせることにつながっていった。

目的を明確にし、目的を優先した活動をすることによって、違う形の運動会ができあがり、年度当初から話している「全ての物に形はない、形は私たちの心の中にある」を教職員は実感することができた。

② 「困難をプレゼント」

今年度は、「できた・分かった」「頑張ってよかった」という感動を児童にもって欲しいと願った。難しいことの方ができた感動は大きく、児童が「頑張ってよかった」と思う経験を意図的に作る必要があった。

そこで、「困難をプレゼント」を合い言葉に、学習発表会では、例年実施している学年舞台発表や作品発表の他に、新たな困難を準備し挑戦の機会を増やした。

学習発表会での新たな困難

- ・新しい発表への取組
全校体育、小中合同合唱
チャレンジステージ（希望者による自主発表）
- ・全校体育の種目
前方宙返り、よさこい、グループマット

挑戦の機会を増やただけでなく、前方宙返りなどの難しい技に全校で挑戦した。休み時間の自主練習にも多くの児童が参加し、技の習得に取り組んでいた。そんな中でも、今年度から実施したチャレンジステージに自ら挑戦する児童が多く見られ、家や学校での空き時間に練習する様子が伺え、たくまし



前方宙返りに挑戦する児童

く成長した児童の姿が見られた。学習発表会は大成功に終わり、児童アンケート結果は以下のようであった。

（児童アンケート※達成度：当てはまると回答した率）

項 目	達成度
学習発表会は楽しかった	100%
練習や本番は大変だった	100%
大変を乗り越えられた	100%
「頑張ってよかった」と思った	100%
前より頑張れる自分になった	100%

困難を乗り越えることが楽しいと思った児童が多く見られたことが教職員の自信を深め、挑戦の場があれば、そこに挑もうとする児童は必ず現れ、困難に挑むことは児童を成長させると改めて実感した。そして、困難をプレゼントするには、教職員が児童の可能性を信じることが最も重要であることも実感した。

(3) 小規模校の活動を見直すことによる意識改革

① 「丁寧な指導」からの脱却（自立型学習の展開）

小規模校の強みの一つに、「一人一人に目が届いた丁寧な指導」があげられる。しかし、時に丁寧すぎる指導は、先生の指示を待つなど児童の主体性を育てる弊害となった。自分の課題に主体的に取り組む姿勢は、自立した社会人を目指すためにも、圧倒的な学力を目指すためにも、最も大切な要因である。

そこで、主に算数科の数の計算の領域を中心に、自分で考え判断し学習を進める方法を導入した。本校では自立型学習と呼んでいる。

（自立型学習例）

学習活動	留意事項
1 例題を解く ①先生の説明、②友達と一緒に解く、③自分で解く ①②③のいずれかで実施	<ul style="list-style-type: none"> ・できるだけ教師の説明を短く ・理解の見取りを確実に行う ・自分の課題を自己選択、自己決定、自己評価させ、学習内容の定着を図る
2 自分の課題を選択し進める 適応問題、計算ドリル、文章題ドリル、思考問題等の難問	
3 学習のまとめ	

自立型学習は、児童が自分で自己選択・自己決定・自己評価しながら進んでいくことを重視している。児童は自分で選択した課題を解決したら、自己評価しながら自分で選択した課題をさらに進んでいく。これによって、一人一人が自分の解きたいだけ問題を解く時間を設けることができた。その一方で教職員は、本当に個別指導を必要とする児童の支援に十分な時間を割くことができる。このように、児童一人一人が自分の

力で着実に学習を進めていけるように、見取りと支援を丁寧を実施することを「丁寧な指導」と考えている。自立型学習では、全ての児童が同一課題を同量実施する



自力解決する子供

ることを平等とは考えず、自分の可能性に挑戦する時間が平等にあると考えている。

自立型学習の導入はまだ算数の一部分

ではあるが、児童の主体性の向上には効果的で、自分の課題に集中して楽しく取り組む姿が多くなり先生の指示を待つ児童は少なくなってきた。そのおかげで学習活動量が格段に増え、授業の生産性が向上し、中位と下位の児童の学習定着度は高まってきた。

自立型学習は児童の自己選択・自己決定の機会を格段に増やした。そのことは日常の生活でも生かされ、自分の思いをもったり表現したりすることにも少しずつ効果を表している。この効果は、今後さらに充実を図ろうとする課題解決型学習の基礎的な能力として重要である。

自立型学習の導入は、教職員の意識を「教える」から、「児童の学びを支援する」に変化させた。それにより、教職員は1時間の児童の活動量に着目するようになり、一人一人が集中して学習に取り組める学習活動の改善に繋がっていった。

自立型学習の効果は小規模校だけでなく、全ての学校の児童と教職員に有効であると考えている。

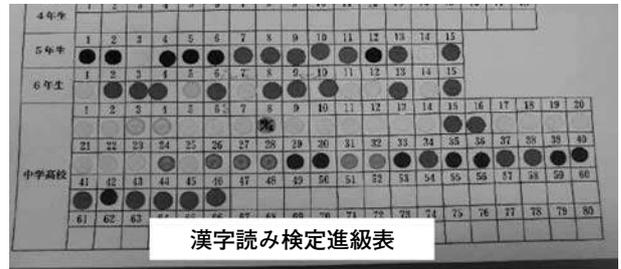
② 下級生を上級生のライバルに

小規模校では児童の序列が固定化され、競争による刺激が少ない面がある。そこで、従来の上級生のリーダーシップの育成を目指す活動であった全校の縦割り活動に、学年を超えた競争を取り入れ、下級生に上級生のライバルとしての役目を担わせ、児童の刺激を活性化させてみた。

具体的には、8秒間走、5分間走、マット・跳び箱運動等の年間を通して実施する活動において、同じカードを使ったり、能力別グループを導入したりして競争を促した。実際に、マット運動の前方宙返りの学習では、3年生の一人が全校児童の中で最初にできたことで、6年生が負けまいとさらに真剣に取り組み、全体により緊張感が生まれた。もちろん、下学年は上学年を超えたいという意識はさらに高まっていった。こうして、小規模校の全員が仲良しという強みに、児

童同士の刺激の活性化をプラスすることができた。

運動面だけでなく、学習面でも漢字読み検定を全校活動として実施した。漢字読み検定の本来の趣旨は、少人数では多様な考えに触れづらいことを本の知識や新聞等の情報をもとに思考力を高めることにある。読むことだけに特化して、新聞が読める中学・高校の漢字までを対象に月に2回ずつ実施した。



漢字読み検定進級表

自分の学年が終わったら、一つ上の学年の問題に挑戦し、できたらさらに上の学年の漢字に取り組む。上の学年への挑戦は、児童の知的好奇心をくすぐり、意欲的に取り組んでいる。挑戦する学年のスペースが決まっているので、下の学年の児童が同じスペースに入ってくると俄然気になり、負けまいと頑張る児童が多く見られる。ライバルが増えることで児童はさらに意欲的に活動している。

児童の成長に児童同士の関わりはなくてはならない。同じ学年同士では序列がついている関係でも他学年を交流させることで新たな刺激が生まれ、児童の活動が活発になることを教職員は実感した。

4 研究のまとめ

(成果)

意識改革の成果は次の結果に表れた。

(1) 魅力ある学校づくり

保護者による学校評価

項目	達成度
教育目標が明確である	100%
小規模校の特色を生かしている	100%
学校の教育活動に魅力を感じる	95%

※達成度は、当てはまると回答した率

- ・学校行事では主体的に取り組んだ姿が見られ、目標を持って取り組む大切さを学んだと思う。
- ・困難をプレゼントという方針に共感できる。

保護者の評価から、明確な目的をもち実施した各教育活動で、児童は好ましい変化をとげ、その姿を通して学校への信頼が高まってきたことが分かる。

(2) 児童の成長

① 圧倒的な学力の育成

教研式標準学力検査NRTの成就値結果（4教科平均）

学年	3年	4年	5年	6年
成就値（H28）	9.2	8.5	6.5	6.1
成就値（H27）	-	-2.5	-0.1	4.8

※成就値＝教科点－学力の期待値

NRTの結果から、成就値が大きく向上し、一人一人の期待する学力以上の結果が表れており、「才能の最大化」が最も表れている成果である。また、漢字の読みに関しては、卒業生は中高の半分くらいの漢字の読みをマスターし知識量が大幅に増えてきた。このことは今後の思考力の向上に期待できると考える。

② 圧倒的な体力の育成

体力テスト結果（県平均を上回る項目数：全8）

性別	1年	2年	3年	4年	5年	6年
男子	7	6	8	6	2	7
女子	7	8	8	5	3	8

5年男女を除いてほぼ県平均を大きく上回る体力の状況は好ましい。また、今年度重点的に取り組んできた前方宙返りの達成者は、3年以上で全員達成し、全校では達成率8割近くであった。

①②を通して、学力と体力面から、児童の「才能の最大化」に迫る成長が図れてきたと考える。

(3) 才能の最大化に取り組む教職員の意識

項目	1学期	2学期
教材研究の時間は十分ある。	3.1	3.5
仕事にやりがいがある。	3.6	3.8
気軽に話せる雰囲気がある。	4.0	4.0

※満点4点

教職員の意識の変化は、教材研究の時間を生み出し、やりがいを高めている。さらに、協働性の高まりはチームとして挑戦する原動力となっている。

(4) 意識改革が進んだ要因

教職員の意識改革が進んだ主な要因として、次のことが考えられる。

① 明確でぶれないスチューデントファースト

全ての意識改革の基本がスチューデントファーストであった。校長として、年間を通して、学校行事や授業の中でのスチューデントファーストの具体的な在り方を提示し実践してきたことが、教職員の共通理解に

繋がったと考える。また、困難な課題に校長が率先垂範することで教職員との信頼を築く要因となった。

② 成功体験からやりがいを実感

年度当初の運動会での児童生徒の劇的な変化と成長は、まだ半信半疑だった学校の進む方向性の確かさと教職員としてのやりがいを実感する機会となった。運動会や学習発表会では、小・中学校の連携の難しさ等で、教職員からは不満が出ることもあったが、劇的に子供を成長させたという成功体験は、教職員自身の「頑張ってたよかった」に繋がっていった。

③ 同僚性を高めたチーム体制とOJT

児童が自分の可能性に挑戦するには、学校は創造的な場であることが求められ、教職員の前向きな姿勢が必要である。自主的なチーム会議による実行力と会話の推進、そして職員室の明るい雰囲気作りに努めた。いつでも、誰とでも話せる環境は自由な議論を生み、新しいことに挑戦する機運が高まってきた。卒業式では、「もっと卒業生を楽しませよう」と、今までにない新しい取組がいくつも出てくるようになってきた。

さらに、最近では子供の情報だけでなく、指導法の情報交換も活発に進んでいる。仲はいいけど他のクラスには負けたくないという、いい意味でのライバル意識も芽生え、一人一人の教職員が前に進もうという意識が感じられる。

(課題)

学校行事等、全員で進める活動は教職員のベクトルが揃い、チームとしての一体感は非常に高まってきた。しかし、授業においては、自立型学習の考え方は進んできたが、教科によっては、「正解を教える」を乗り越えられていない。児童の未来は「正解のない世界」である。主体的に考え行動できる児童を育成するために、「何を教えるかからどう学ばせるか」への意識改革がさらに必要である。

5 終わりに

先日、教職員との面談の中である教職員が「私たちは本当はいろいろ新しいことに挑戦したいと考えていた。でも、いつしか、現実の中で忘れてしまっていた。今年は多くの新しいことに挑戦する中で、挑戦することが楽しいことだったと思い出せる1年だった。『学校は楽しい』と改めて感じている。」と話してくれた。新しい挑戦を楽しもうとするチーム井口が児童一人一人の「才能の最大化」を進めていくと信じている。

『書く』ことの徹底による学力向上をめざした組織的プロジェクト

— 小規模中学校の挑戦 —

岡山県美作市立勝田中学校
校長 西村 睦美

1 研究テーマ及びテーマ設定の理由

(1) 学力面での課題と現状

本校は全校生徒数45名という小規模校で、平成27年度までの各種学力検査では市や県・全国の平均値を20～40ポイント下回るという学力低位校であった。家庭学習時間も県・全国調査に比べ短く、基礎学力の定着や生徒の学習意欲向上が課題であり、決定的な弱点は文章表現力であった。テスト問題では字数制限のある問題や長文問題の無回答率が非常に高く、生活ノートのコメント欄や学習の感想は1, 2行程度。語彙も乏しく考えがまとまらない。学習は苦手と初めから諦めている生徒も多い現状であった。

こうした実態を反映して学校教育に対する生徒や保護者・地域の信頼度は低く、中学校の活力と自信を取り戻してほしいという強い願いと期待があった。

(2) 研究の仮説

本校では学力不振という最大の課題を克服するために、学校組織をあげて学力向上の取組を進めてきた。まずは生徒の学習実態分析を行い、確かな学力を育成するための勝田中学校6つの仮説を立てた。その仮説を検証するための組織的プロジェクトを組み、小規模校という強みを生かして個の状況分析と課題に応じた指導を徹底しながら、学力向上をめざした。その中でも決定的な弱点である「書く力」を鍛えるため、②の仮説を実証する取組を研究の中心に据えた。

- ① 組織をあげて取組を徹底（＝全員でやり抜く）すれば学力は伸びる。
- ② 全ての教育活動で「書く」ことを徹底すれば学力は伸びる。
- ③ 生徒が学ぶ意欲、学び方、学ぶ習慣を身に付ければ学力は伸びる。
- ④ 教師の意識改革と授業改善が進めば学力は伸びる。
- ⑤ 個の課題に応じた指導を徹底すれば学力は伸びる。
- ⑥ 家庭学習の習慣形成をすれば学力は伸びる。

2 研究の方向性

(1) 学力のとらえ方、目指す学力観

狭義の学力を「数値で図る学力」「自ら考え、表現

する力」、広義の学力を「学ぶ意欲と目標に支えられた豊かな人間性と社会を生き抜く力」と捉え、広義の学力形成を基盤に狭義の学力向上を実現することを目指す。

学力の中心を「書く力」と規定し、「書く」という総合的な営み（書くことは、聞く、読む、話す、考える、まとめるといったあらゆる分野の能力を必要としているため）を全ての教育活動を通して徹底的に鍛えることを学力向上対策の基本とする。

(2) 研究の牽引者としての「学力フロンティア」

教員の中には「補充学習では理解しても次には忘れている」「課題を厳しく課すると生徒が休む」「長い文章を書く力がない」「家庭での学習環境が整わない」といった諦めが蔓延していた。学力向上の取組が単一の教科や一部の担当者だけに任せられ、全員で徹底して取り組むことができなかつたために成果が見えにくく、徒労感だけが募っていたのである。これでは、生徒の学力が向上するはずはない。生徒の課題は、教員の課題でもある。そこで、校務分掌に新たに「学力フロンティア」という名称で学力向上策推進責任者を位置づけ、教科や学年、個々の教員の取組を整理して、具体的な学力向上の手法や実践内容・時期を示した。

年度当初、学力フロンティアが「組織としての学力向上の方針」に基づく具体的な実践計画について全教員に提案。生徒や保護者には通信等を用いて年間の学力向上策を説明。さらに、学期毎に取組別の実践内容と時期を一覧にした学力向上カレンダーを作成。全員が見通しを持って互いに確認・点検できるよう工夫し、取組の成果を日常的・継続的に評価することにした。

こうして、個々の役割と責任を明確にした本校の学力向上実現の取組がスタートした。

3 仮説②「書く」ことを徹底する組織的取組

(1) 書く活動を“見える形”にする

確かな学力の定着を図るには反復練習して書くことが有効である。書くためには、「読んだり聞いたりしたことを記憶し、自分でそのことについて自分なりの考えを持ち、自分で判断して書く内容を決め、構成を

考えて、相手に分かるように順序立てて記述する」という手順が必要である。その意味で「書く」という活動は、極めて総合的な能力を必要とする、究極の「総合的な学習力」である。したがって、本校では徹底して書く活動を大切にしている。「書く力」を育てる最初の一步は、「書く」ことへの抵抗感や苦手意識を無くすことである。そのためには、国語科だけでなく学校生活のあらゆる場面に書く活動を取り入れて書き慣れること、何を書けばいいか書く視点を明確にしてヒントを与えること、自分の考えを整理してまとめる手順を身につけることが必要と考えた。そこで「組織として取り組む具体的な手立て」を全教員で協議し、次のような取組を行った。

- ノート作り→どの教科も授業開きで「ノートの使い方」を説明、指導を徹底する。授業中の板書は必ずノートにまとめる。1時間の板書は見開き1ページにまとめ、振り返りのしやすいノートになるようにする。
- 感想→道徳・総合的な学習の時間・特別活動・学校行事等の感想や意見は必ず書かせる。A4用紙に15～20行の感想欄を設け、最後の行まで自分の考えを記述させる。書くことに苦手意識が強い生徒は覚えていることを箇条書きすることから始め、徐々に自分の感じたことや考えたことを記入するなど、その都度「書く視点」や意見のまとめ方を明示するように工夫した。
- 生活ノート→毎日のコメント欄7行は必ず全て埋めて毎日提出。教員も必ず、コメントを返す。生活ノートもまずは自分がしたことから書き始め、徐々に生徒の考えを引き出すよう、教員のコメントを工夫した。
- 滴一滴ノート→帰りの会後の毎日10分学習で週2日、全校で取り組む。山陽新聞コラム「滴一滴」から国語科教員がテーマを選んで予め用意。それをノートに貼り、「正確に、丁寧に、速く」書き写す。ノートは国語科教員に提出、助言や励ましのコメントが生徒のやる気を引き出している。コラムの要旨をまとめる欄や感想を書く欄もあり、3年目を迎えた今では生徒の抵抗感も無く全ての欄に書く習慣が定着している。コラムは常時、数日分用意してあるため、学習が早く終了したときなどの補充教材としても活用している。
- 夢ノート→毎日1題以上のテスト直し問題をA4判ノートに書く。週1回、学年提出日を決めて提出。学年団外の教員がチェックする。備考欄に間違っただけの理由や学習のポイント、感想などを記入、教員もコ

メントを返す。全国調査の結果でもテスト見直しをする生徒の率が全国平均よりかなり低かったため、自主学習ではなく、あえてテスト直しに限定した。生徒にとっては「継続は力なり」を実感できるノートであり、1年で3冊目になった生徒もいる。

(2) 「書く」活動を“授業の中心”に据える

授業では「板書を写すだけでなく自分の考えをノートにまとめる」「授業の振り返りに文章表現の欄を設ける」ことを全教科で取り組んでいる。この取組は小学校でも授業の中に組み入れ、児童や生徒の「学びの構え」を創る素地になっている。勝田中学校区では「かつたっ子15の春プロジェクト」による保幼小中連携の取組を進めている。授業の進め方についても円滑な小中の接続を図るため、小学校と中学校で共有する「かつたっ子授業のスタンダード」に基づいた授業展開を進めている。このスタンダードの中心に「書く」活動を取り入れている。

本校の教科学習では「自分の考えを表現する」活動例として以下のような取組を行っている。

- 国語科：テーマを設定した200字作文、初読の感想、字数制限問題、短詩表現、作話など多様な表現活動を工夫して、その都度、生徒への評価を返している。毎時の振り返りシートは文章表記である。
- 社会科：授業プリントに理由を説明する記入欄を必ず設け、根拠を述べて説明する練習をしている。
- 数学科：計算の過程を式で、解き方の根拠をことばで書く習慣をつけるよう授業で指導。記述問題は、授業で書き方のポイントをヒントとして与え、全員にノートに書かせて説明させる練習時間を増やしている。
- 理科：実験結果の考察や現象の説明を書く。振り返りシートに授業で理解したことや疑問を思ったことなどを文章で書く。
- 英語科：英語長文の100字要約（日本文）をする。英作文チャレンジの時間を設け、単語ではなく文としての感覚を養っている。
- 保健体育科：保健では、毎時間、振り返りシートに学習のまとめと感想を書かせている。実技の時間では、サッカーなど種目によって感想を書かせている。

(3) テストを変える

生徒の学力向上には、小テストや定期テストの内容も大きく関わっている。テストが生徒たちにとっては最も分かりやすい、学習の成果や達成感を実感する素材である。授業だけでなく、家庭学習に対するモチベー

ションも高まるきっかけを生む。

○小テストを習慣化する

学習内容の定着度を即、確認できるチャンスとして、5教科授業で毎時間小テストを課している。テストをするだけでなく、教科ノートに必ず正解を記入する、夢ノートにもう一度書くなど、振り返りの材料にしている。また「書く」ことで、覚える手助けをしている。

○定期テストの問題に「書く」ことを取り入れる

授業と共に、全教科の定期テストも、字数制限で文章にまとめる問題や自分の考えを書く問題、根拠を述べる問題などを出題する。授業でしていることが成果として実感でき、テストでできたことで授業へのモチベーションが高まるという相乗効果も生み出している。その意味で、テストによるこの取組は「書く」活動を取り入れた授業改善の検証にも役立っている。

(4) 毎日、家庭学習で「書く」

授業や生活・夢ノートなどの「書く」取組に加え、家庭学習として毎日、プリントやノートなどのデイリーワークを課している。家庭でも毎日「書く」ことの習慣化をめざして取り組んでいる。週末はウィークリーワークが加わり、完全提出を基本に細やかなチェックと助言を行っている。生徒は、この習慣形成で「書く」ことへの抵抗感が少なくなると共に、既習事項の確認と定着につながる実感も得ることができている。

4 取組の成果

(1) データに見る学力の改善

現3年生の各種学力調査の結果を1年次から順番に示したものが図1～3である。それぞれ、本校正答率と市・県・全国平均との差を示している。国語の推移に着目すると、図1・2にあるように県平均以下、市平均をわずかに上回る状況であったものが、図3では全国県市いずれの平均点より高くなっている。特に図2にあるように2年次には平均以下であった国語のB問題が大きく向上している。ただし、数学に着目すると、図2で県平均以上であったものが、図3では県平

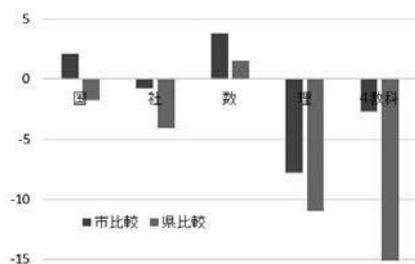


図1：1年次の県学力学習状況調査結果の県市平均との差 (H27.4)

均以下となっている。国語の学力の向上を他教科に広げていくためには、一層の工夫と指導の改善が必要である。

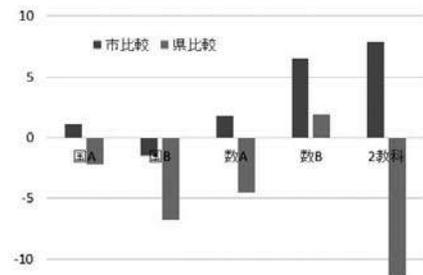


図2：2年次の県たしかめテスト結果の県市平均との差 (H28.11)

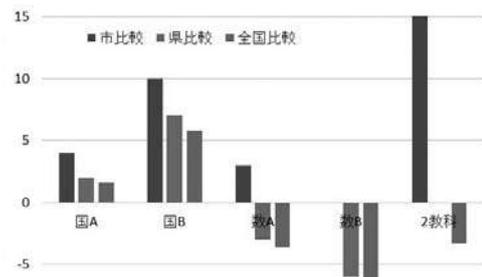


図3：3年次の全国学力学習状況調査結果の全国県市平均との差 (H29.4)

また、無回答率は1年から3年まで全問で0となり、字数制限の問題にも果敢に挑むことができている。

(2) 学習への取り組み方の変化、意欲の向上

この取組で、生徒は常に真剣に、ひたむきに授業や学校行事に取り組むようになった。また、自分の考えや意見を書くトレーニングが功を奏し、自分の言葉で十分に表現できるようになった。話すときにも「ノー原稿ノーマイク」で堂々と多くの聴衆を前に意見表明や説明ができるようになってきた。書くことへの抵抗感が少なくなったことで、課題提出100%達成が基本となり、全校あげての取組が定着してきた。まさしく「学校すべきことは学校で完結する」体制が整いつつある。さらに、美作市代表として人権作文の朗読をしたり、標語が県優秀賞になったりと各種の表彰をされる生徒も多くなってきた。

滴一滴・夢・生活ノートなど学校主導の取組が今や生徒の自主的な取組として随所に創意工夫が見受けられるようになってきた。夢ノートはテスト直しだけでなく復習や学習のまとめ、要点整理へと内容が広がり、教科ノートにも学びの要点や教師のワンポイントアドバイスがメモされることが多くなってきている。

生活ノートの赤帯（家庭学習時間）青帯（メディア時間）記録を毎日続けた成果が表れ、定期テスト前の

学習計画表やメディアコントロール自己チェック表でも生徒自身がセルフコントロールできるようになっている。まさに、「継続は力なり」である。

(3) 教職員の意識改革

3年前には「小規模校ではどうせたいした変化はない」「家庭学習の負荷をかけると欠席してしまう」「授業にやる気がない」と『できない理由』をあげ、「諦め」の空気に支配された教員が大半を占めていた。

『できないこと』に目を向けるのではなく、「現状で、この陣容でできることは何か」「学校でできることは何か」と、『できること』に目を向けた話し合いを徹底し、決めた事は全員で実践した。そして、学力フロンティアを中心に組織で取り組むことと個別の役割を明確にしながら着実に学力向上策を進めた結果、今では「どの教科でもぶれずに取り組んだら生徒がやり遂げた」「生徒が短時間で考えをまとめて書くので、授業の効率が上がった」など授業改善の手応えを実感する教員の声が職員室で行き交うようになった。

また「全学年でこれをしてみよう、これを使って」と、全体を意識して提案するなど、それぞれがやるのではなく、みんなでやるという気風が満ちている。

「書く」活動は「何を、どのように書かせるか」が全教職員の目にもはっきりと理解できるため、教員にとって指導しやすい活動であったことも、意識改革に功を奏した。学校全体として「書く」活動を授業の中心に据えることが定着し、教師自身の「授業を変える」という前向きの姿勢が生徒に“見える形”で伝わった。また、アクティブ・ラーニングやユニバーサルデザインの視点をもった授業改革も進んだ。生徒が自分の考えを明確にもち、意欲的に自己表現するためには、そうした力を引き出す、或いはそうした力を育てるための教師自身のしっかりした「授業づくり」が根底にないといけないことも、この研究を通して各教科の教師が学んだことである。今では、「生徒の学ぶ意欲は、教師の授業づくりの意欲に比例する」が本校の合い言葉になっている。

また、学力フロンティアが1年間の見通しを持って、全教職員で取り組む学力向上プランを提起したことで、教職員個々の力量や指導力も向上してきている。従来、本校のような小規模校では簡単には成果があらがないと思込んでいたものが、取組を一つ一つ徹底して実践することで着実に成果を上げてきたことを実感できたことは大きな成果であった。小規模校だからこそ、日常の学習状況チェックや各種学力調査結果から、生徒個々の状況分析や教員集団での共有がこまめ

にでき、個別の対応策の検討・実践が短期間でできた。

教員集団が誠実にそれぞれの役割を果たし、協働して「個に応じた指導」を行う体制が整うにつれて、生徒のひたむきな姿と学力の伸びが教職員のモチベーションを高め、教職員の意欲ある姿が生徒たちの力を伸ばすという相乗効果が表れてきている。

さらに、学力向上の組織的プロジェクトの原動力となった「学力フロンティア」の育成が他の教職員の指導力向上につながり、そこから派生して学力向上以外の取組にも教職員や生徒の力が反映できるようになりつつある。

5 まとめ

『全ての教育活動で「書く」ことを徹底すれば学力は伸びる』という仮説を立て、学力フロンティアを推進軸に生徒の「書く力」を育てるための組織的プロジェクトを組み、さまざまな角度から取組を提起し、実践を重ねてきた。「書く」指導は効果がすぐに表れ、生徒の「やり遂げた」という実感につながる。生徒は書くことへの抵抗感が薄れ、自分の書いたものを読み返すことで自分の意見を見直すことができるようになっていく。また、ある程度の分量が楽に書けるようになることで自信にもつながっていく。生徒たちの原稿用紙に向かう姿は、明らかに取組を始める前とは変容してきている。組織をあげ、徹底して「書く力」を鍛えることは、学びの意欲を高める有効な取組である。

組織的プロジェクトによる取組は生徒にとっても保護者にとっても非常に分かりやすく、個々の教職員の力量を超えた成果をあげることができた。取組の不統一は生徒や保護者の不信を生む。誰もが同じめあてで取り組むことが最大の学力向上策である。

生徒の姿が変われば、保護者や地域の学校への信頼はついてくる。これは、本校の教育理念の根幹である。この2年間、確かな学力をつけるための6つの仮説を、一つ一つ組織的プロジェクトで具体的な実践にかえてきた。成果が生徒の姿や力となって表れてきたことで、学校が活力と自信を取り戻し、学校への信頼も生まれつつある。小規模校の限界はたくさんあるが、弱みを強みにかけて工夫した取組が生きている。

数学についてもこうした手法を生かし、問題データベースを利用した問題に全校で取り組むなど、組織で工夫する新たな取組に着手している。

学力低位校の挑戦は、組織的プロジェクトを基盤にして、さらに一つ上のレベルを目指して続いている。

あ　と　が　き

日教弘岡山支部は、昭和31年、全国に先駆けて教育研究助成事業を開始し、個人研究、グループ研究、教育研究論文・著書助成事業と順次事業を拡大して62年目を迎えました。これまでに延べ1,562人の方々に総額81,676千円を助成いたしました。

また、平成5年、創立40周年記念事業の一環として「教育研究集録」を創刊して以来、本県の教育振興に寄与するべく県下の学校・教育機関に頒布し、今回で第26号の発刊となりました。ご多忙な中、ご尽力された教育実践の成果をお寄せくださいました先生方のおかげだと感謝いたしております。

今後とも、本県教育の振興・発展を支援するべく、本事業の更なる充実に努めてまいりますので、学校現場等が抱える課題の解決に向けた日々の取り組みや、教材研究などの実践・研究を論文としてまとめられ、多数応募されることをご期待申し上げます。

平成30年3月 教育研究集録 第26号

平成30年3月15日発行

編集 公益財団法人 日本教育公務員弘済会岡山支部

発行 公益財団法人 日本教育公務員弘済会岡山支部

〒703-8258 岡山市中区西川原255番地

TEL 086-272-1909

印刷 株式会社 創文社
